演劇会議

□ 総会・ゼミナール特集

伝統芸能のはなし……北川鉄夫…1

第26回西会議総会報告……田中実…16

西会議・山口ゼミのこと……杉林幸登…20

87東会議総会の報告……丸子礼二…24

87関東Bゼミナールの報告……葛西和雄…31

■ 劇団通信……35

手話劇団誕生・その課題……尾津訓三…50

第5回西日本作家会議の報告……東川宗彦…54

あか鼻のピエロの行方……いずみ凛…56

■ 劇評

関西芸術座の新しい試み……阿部好一…59

観劇雑感……萩坂桃彦…62

中部B1987年8月～10月の上演から……丸子礼二…69

■ 戯曲

合唱劇「山手線はまわる」……大橋喜一…73

「ルードリッヒ はるかなる恋人へ」……中村おがわ…81

67

1987年12月 ¥500

1987年後半の全リ演創作劇の上演状況

劇団名	作品名	作者	演出	上演月日	会場
劇団やませ	赤い海	柾谷伸夫	佐々木洋二	11／1	八戸市公民館
劇団展望	まひるの ちょうちん ＜新作3本＞	集団創作	大沢郁夫	11／28～ 12／6	阿佐谷小劇場
世仁下乃一座	洞道のヒカリ虫	岡安伸治	岡安伸治	11／27～ 12／9	文芸座 ル・ピリエ
石るつ	茜色の氷原から帰って来た男	境野修次	ひぐち丹青	11／27～ 11／28	深川江戸資料館 小劇場
劇団名芸	夢家族	栗木英章	片野耕治	11／20～ 11／23	平針小劇場
名古屋演集	落ちこぼれの神様	園山土筆	丸子礼二	11／26～ 11／29	名演小劇場
劇団名古屋	赤い自動車	熊谷昭吾	久保田明	11／11～ 11／15	名演小劇場
人形・京芸	ものみなおどらはる	関矢幸雄	関矢幸雄	巡演	子ども・おや子劇場
関西芸術座	クラブ 記憶 奈落の神々 紫煙の彼方に	吉田美彦 清水巌 矢田嘉代子 重光透	楢崎英三 仲武司 岩田直二 上利勇三	9/2～9/6 9/9～9/13 9/16～9/20 9/23～9/27	扇町 ミュージアム スクェア
劇団未来	ああウエディングドレス	和田葉子	森本景文	11/13～15 11/20～23	未来 ワークスタジオ
劇団コーロ	さるむこどん まるみちゃんの冒険	さねとうあきら しかたしん	三沢和子 しかたしん	87.8～88.7	各地巡演
劇団息吹	桜の木は語る	瀬戸洋	横山幸世	8／9	八尾市民ホール
四紀会	ああ八月の陽の如く 雨にならむ風になるらむ	内田昌夫 内田昌夫	梶武史 三村省三	7／31～ 8／2 10／31～ 11／1	シーガルホール
劇団あしぶえ	落ちこぼれの神様	園山土筆	園山土筆	10／17～ 10／18	東京三百人劇場
劇団道化	生きてあること あなぐま クータンの冒険	しかたしん かたおかしろう	楠瀬規夫 森実重雄	87.9～88.7 87.9～88.3	中学校公演 小学校公演

◦これは65号のこの同じ誌面で紹介した、1987年にのぞむ全リ演創作劇のラインアップのつづきとなります。従って劇団銅鑼の「燃える雪」のように、現在活躍中のものでも65号で記載済みのためはずしました。上演予定が88年のものも同様に扱いました。なおオリジナルと言っていいものでも脚色はやはりはずしました。劇団さっぽろの「やまんばにしき」や群馬中芸の「また七ぎつね自転車にのって」などがそれです。

「演劇会議」発行所

■テアトル・ハカタ
「おったった伊平治」
作・岡部耕大
演出・野尻敏彦

■劇団京芸
「ホルストメール」
原作・トルストイ
脚色・ロゾーフスキイ
訳・桜井郁子
演出・藤沢　薫

■福岡現代劇場
〈山口ゼミナール参加芝居〉
絵解き説教
「地獄極楽・冥土の旅日記」
演出・猿渡公一　役者・鈴木新平

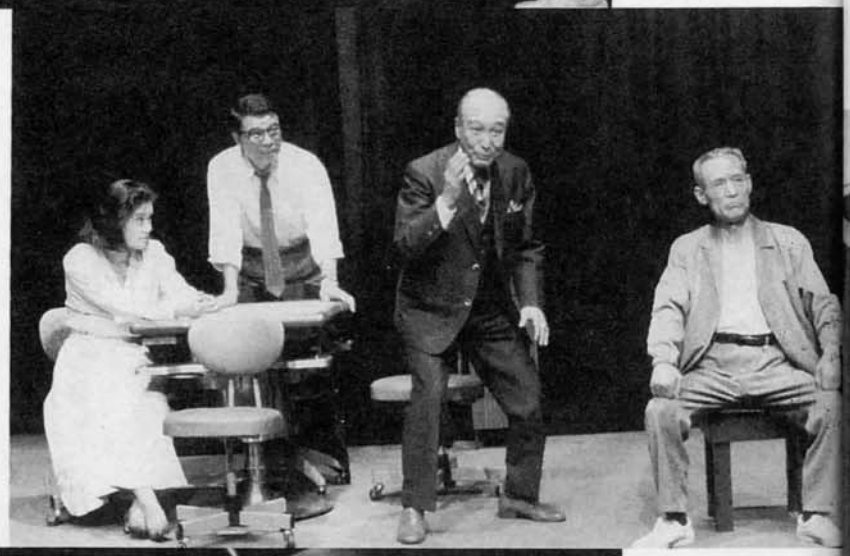
■劇団コーロ
「まるみちゃんの冒険」
作・構成　しかたしん

■劇団四日市
「人情赤提灯」
脚本・田中十九郎
演出・菊本健郎
森けんろう

■劇団あしぶえ
「落ちこぼれの神様」
作・演出　園山土筆

関西芸術座九月連続公演

▲
（その1）
「クラブ」
作・吉田美彦
演出・楢崎英三



（その2）▶
「記憶」
作・清水　巌
演出・仲　武司

◀（その3）
「奈落の神々」
作・矢田嘉代子
演出・岩田直二

■劇団名芸
〈第七回天白子供劇場〉
「走れ冒険」
脚本・栗木英章
演出・糸井重喜

■だいこん座
「勲章の川」
作・本田英郎
演出・成田邦彰

■手話劇団「河」
「HIROSHIMA TODAY」
の稽古風景
台本・演出　尾津訓三

（立っている右側の人）
・広島の手話劇団「河」の誕生にいたるいきさつは本号に尾津さんが寄稿されています。

（その4）▶「紫煙の彼方」
作・重光　透
演出・上利勇三

■黒石演劇研究会
「ザ・シェルター」
作・北村　想
◀演出・杉山隆一

■劇団はぐるま　▼
「紅鼻子」稽古はじまる。
右から
通訳・于黛琴さん
こばやしひろし
演出・陳　顒さん
（北京・青芸）

伝統芸能のはなし

――西会議・山口ゼミナールでの講演――

北川鉄夫

(1)

皆さんお早うございます。私、実は昨晩の交流会の時にゆかたがけで現われまして―。実は今日しゃべらなきゃならんので年もいっておりますので少しおとなしくしておこうと思って早く部屋へ入ったもんですから、村崎君に引っぱり出されまして、ゆかたがけで失礼致しました。

私、今年八十です。八十と言いますと明治の四十年、生まれましたのは一九〇七年。何でこんな事を申し上げるかと言いますと、ちょうどその時期に日本の新劇が始まったわけです。御承知のように一九〇九年、明治の四十二年に東京で小山内薫とそして歌舞伎役者の市川左団次とが組んで自由劇場を始めました。皆さんの中にも自由劇場という劇団名をお持ちの方、いらっしゃるかも知れませんが、この名前は皆さん、記憶しておく必要がある。非常にその当時の古い世界であった歌舞伎の中の俳優が自由劇場という名前をつけたが、「自由」ということは、民主憲法下でも十分に保証されています。その「自由」を、あの明治の時代に、保守的な歌舞伎界の役者が求めて、新劇の方法で演劇の中で表現しようとしたということは、大変重要なことです。その思想は、今日もなお、新劇人である皆さんの一番基本的な思想ではなかろうかと思っております。

ところで、今日、私は伝統芸能について少しお話をするわけです。実は、私はこのところ部落問題の研究にかかわって参りまして、そんなことから猿舞座の村崎修二君たちとかなり接触する機会が続いています。昨晩は、私は猿舞座の御意見番だという紹介でしたが、大体、御意見番というのは、隠居しているよ

うな者がやることでありまして、私もまぁ演劇の現役の世界からはほぼ引退した形でいるわけです。その私がこんな元気発溂とした席に出て、皆様にお話をするということには恐縮している次第です。私などの出る幕ではないと思うのです。けれども、まあ古い伝統芸能の世界ということで出ることにしました。

実は、伝統芸能というものは、ほとんど滅びかけている世界といってもよい状態です。しかし、研究は進んできております。私もちょっと驚いたのですが、昨夜は「絵解き」まで出てきました。あの「絵解き」というのは、元来は、中世のお坊さんが、お説教をするのに、当時の民衆は字も読めず、書けずという人が多かったので、本で読ませるのでなく、ああいう風に絵を画いて、それでいろんな仏教思想を説く手段にしたもので、もともとは芸能でもない、宗教の宣伝手段でした。司会をやっていおりました筑豊大介君が、「絵解き」が変化、発展して、紙芝居まで来るのだというようなことをいっておりましたが、正にそういう流れで、テレビもあれは絵解きのようなものだと私は思っていますが、そういう意味では、私たちの祖先が生んだ、紛れもない民衆の中に生きたものでした。決して、官制の、上からこしらえたものではなかったのです。昨日上演されました「おどけ開帳」の中で、坊さんが最後に赤いふんどしを出してひっくり返りますが、ああいう形は堕落した坊主の批判なんです。当時の民衆はああいうものを見て非常に痛快がったのです。

これは、当時の民衆のリアリズム精神みたいなものから創り出されたもので、今も僅かに残っている「ちよぼくれ」という芸能です。今も佐渡にたまたま残っています。佐渡の「ちよぼくれ」というのも、私も一度見ましたが、あんまり面白くない、何をやっているのか判らないようなところがありますが、とにかくそういうものが、今も民衆の中に伝えられ、生きていたということは、大変大事なことです。

戦後、外国から芸能団がやってきて上演されますが、その中に韓国の民俗芸能がいろいろやってきており、私も気をつけて見ているのですが、その中に「ちよぼくれ」と同じ坊主の批判があります。例えば、鳳山仮面劇は、劇団の入場から、神への祈り、四方祓いの舞と展開して、行い澄した高僧が美女にたぶらかされて堕落する場が、この劇の頂点になっています。そういう点では、朝鮮民族も、日本民族も、同じ道を歩み、同じような形で劇を創りだしていたんだということが分ります。昨夜の赤ふんどしの一場は、今日でいえば飯沢匡とか井上ひさしに該当する当時の作者が書いたのだろうと思ってよいわけです。

(2)

伝統芸能の世界というものは広いので、私もこの話がありました時は、何を話したらよいか随分考えました。今日は、その広い中から二、三の問題を取り出してみたいと思います。

一つは、創造の源泉の問題、それから芸能の流通、普及の問題、も一つは芸能者の差別の問題といったところです。差別の問題という点では、私が部落問題をやっているということからいえば、大へん重要な問題で、この問題についての研究はまだほとんど系統的には手がつけられておりません。

民俗学者、研究者の民俗芸能についての研究は、ずい分詳細な諸研究が蓄積されてきていて、私などもその学恩をありがたく思っているのですが、この芸能者の差別の史的研究となると皆無に近く、残念なことです。私が

今日あえて浅学を顧みずお話する気になったのは、この点が大きな理由になっているといえます。

戦後の今日では、タレントというような、怪しげな日本語らしきものが横行いたしておりまして、タレントといえば大へんもてはやされ、ワイワイさわがれます。週刊誌のトップ記事でも、そういうことばかり書かれていて、何とか聖子ちゃんが離婚するとかしないとか、話がいっぱいです。まあ、ああいう風なところまで日本の芸能人たちは社会的に見られるようになりました。しかし、ごく最近までは、例えば歌舞伎役者は河原者という呼称で蔑視されております。民俗芸能の問題を考える場合、このことは外せないのだが、それが研究の上では外されている現状です。しかし、少し芸能史の中へ入ってみると、例えば説教浄瑠璃の「信田妻」や「山荘太夫」は、内容としてこの問題は外せないというのが実体です。

この問題はあとでも一度ふれますが、それに先立って、少し芸能の歴史に入ってみたいと思います。

古事記だとか、ああいう古い文献の中に出て来る天の岩戸の、天鈿女命がストリップをやったこと。あの時分にはストリップなんて言葉はありませんけど、正にストリップをやっている訳ですね。

あの、天鈿女命ていうのは巫女さんです。

最近またずっと歴史が下がって来ますと歌舞伎の創設者であるといわれている出雲の阿国、あれもたぶん巫女であろうと思う訳です。そして女が男を演じ、逆に男が女を演じるといったことは、歌舞伎にはずっと残っており、今日では中村歌右衛門のような名女形がおりますが、そういう世界がずっと天鈿女命の時代から続いてきているわけです。天の岩戸から今日長い年月を経る中で、生まれては滅び、あるいは種々と変形してきています。

その中で、昨夜の「おどけ開帳」や「絵解き」のような民俗芸能は、各地のお祭りと結びついたものは、年に一回、あるものは二十五年に一回などというものもあって、ようやく残ってはおりますが、春駒とかちよぼくれとか絵解きなどというのは、もうほとんど見ることができないような状況になっているのです。

現実にもっと多く、そういう芸能が我々の眼に映り、日常的にこれを知ることができるような状況でしたら、今日のような講座は必要なかったとさえ思います。もちろん、大きな意味でいえば、歌舞伎も伝統の芸能でしょうし、能・狂言もそうでありましょう。浪曲もそうです。昨夜の「絵解き」を演じているのは説教僧ですが、ああいう節をつけて語るのは、実は浪曲につながる、古い時代の芸能の一つなのです。あの説教のような宗教の世界から脱け出して浪曲はつくられてき、明治期の桃中軒雲右衛門のような傑物が出て、今日の浪曲ができているわけです。そういう点で、古い伝統芸能が今日まで変形、変質しながら今日残ってきています。私たちが、これをとらえようによっては、ただ昔のものを大事にしなければならない、伝統を大事にしなければならんといったことだけでなく、伝統芸能自体の中に、演劇的なものの本質的なものが、非常に素朴、単純な形で残っていることも、見逃してはならないことだと思います。

たまたま昨夜、皆さんによって新しく再生された伝統芸能の舞台を私たちは観ました。この芸能の大きな特徴の一つは、呪術的な世界のものであったことです。もっと平たく言えば、宗教的な関わりが非常に深い訳であります。きのうの舞台で御記憶の方があると思いますが、あの「おどけ開帳」が始まります

前に、舞台に荷車が出ておりまして、そしてその太鼓の上に小さな神殿がおいてありました。あれを司会をやっておる大介君が、ひとくさりやってから後で、その前に行って手を合わして、拝んでたと思うのです。あれがつまり何と言いますか、伝統芸能の思想的な基礎です。

私たち今日では宗教というと演劇のリアリズムとは関係ないのではないかと思われるでしょう。しかし、宗教というのは思想だという風に考えてみて、ある時代の一つの思想だという風に見直してみれば、宗教は判ります。判ることと信じることとは違うので、誰でも理解できます。鎌倉仏教では親鸞というすぐれた思想家や一遍のような行動的な思想家が生まれていたという風にとらえてみることです。そういう風に、宗教を思想として考えてみれば、日本の宗教史というものは、まぎれもなくすぐれた思想史でありまして、そこにはまたその当時の人々の生きざまを反映した社会の歴史でもあったわけで、伝統芸能というものも、そういうかかわりの中で生まれ、消え、変化しながら、今日まで生き残ってきたのだと考えていいのではないかと思います。

ところで、先にいいました天鈿女命は俳優のはじめだというわけですが、ここでちょっと俳優という字を思い返していただきたいと思います。

(3)

俳優の「俳」という字は、イと非の組み合わせです。イは人で、それが非ですから、人にあらざるもの、神でしょう。人が自己否定して神として言動をするということです。優は、人と憂の組み合わせで、いわば憂うる人です。人が心配している形です。優という字は、やさしいという意味ですが、人が心配をしている形はやさしいということでしょう。

俳といい、優といい、どちらも漢字ですからもともとは中国産でしょうが、中国の人たちは神となった人が心を配り、物やさしいものとして俳優という語を考えたのだろうと思います。

それから、日本では古く俳優のことを、「わざ」といいました。「おぎ」というのは招くという意味で、「おぎ」は技、つまりそういう技術をもっているということです。何を招くといえば、神を招いてわが身にのりうつらせるのです。

天鈿女命は正にその通りのことをした巫女です。神ののりうつった巫女という俳優は、ののりうつった神の言葉を神に代って発したということで、私たちは古い芸能を考えた場合、このことはよく判ります。今日では、神という意識はうすれていますが、神ということを、宇宙や世界や人間社会というものとして考えれば、今日でも俳優のもともとの意味は十分に通用します。芸能が演じられている有様は、神々が社会や人間のことに心を配り、やさしく語りかけてるのだといってよいと思います。俳優は、正に自己否定をして社会や人々になり代って、社会の意志や人々の心を語りかける人です。モスクワ芸術座の創始者スタニスラフスキーが「役に生きる」といった、その俳優術の根元も、そういう事でしょう。

昨夜、司会の大介君が神前に手をあわせて念じたのは、神に私たちはあなたに代ってやってみせますから、よろしくお願いしますということであったのです。民俗芸能のような古い時代の遺産は、そういうことを素朴に、原初的に教えるという意味で、大へん貴重です。今日、新劇は別にこういう形を探る必要はありませんが、その精神はうけついでよいと思います。

私は最近、村崎修二君と一緒に長野県の北安曇野のある村で、民俗芸能のビデオ撮りをしました。それは、韓国のサムルノリという国際的に評価の高い太鼓打ちの集団と、日本の古い民俗芸能では最高といってよい伊勢大神楽と猿舞座が、そこで一堂に会して出演するという、貴重な機会に恵まれたので、こうしたすぐれた民俗芸能を映像で記録しておこうと、専門の映像製作者に依頼してビデオにしたわけです。

サムルノリというのは杖鼓という横長のしめ太鼓を四人でたたく芸能集団です。もともと、長野では、このサムルノリが太鼓教室を開いたのが中心の行事で、その機会に伊勢大神楽と猿舞座が協力参加として招かれたというわけです。

この三つの芸能は、どれも本来野外で演じるもので、舞台で見せる、室内で見せるというものではありません。サムルノリのすごいボリュムは室内で聴けば、すごい音ですし、伊勢大神楽も室内ではよほど高い天井でないと到底演じ切れません。どちらも室内でもやりますが矮少化されます。伊勢大神楽は長野でも野外で演じました。そして、この時はすばらしい立体空間を実現してみせました。伊勢大神楽の宣伝をするわけではありませんが、民俗芸能に関心をおもちの方は、機会がありましたら、ぜひ見ていただきたい。

この伊勢大神楽の座、つまり演芸団は、まだ五座か六座ありまして散在していますが、中心の山本源太夫の一座は三重県の桑名にあります。そしてこの一座は宗教法人です。神とかかわっての一座です。桑名というのは昔の東海道の重要な宿駅で、「桑名の焼きはまぐり」で知られているところです。名古屋から名鉄で急行で最初の停車駅、二十分ぐらいで着きます。そこに太夫町という、昔からそういう人たちが住んでいる町があります。そこで毎年、十二月の二十四日に、すべての座が集って、「事始め」をやり、太夫町の一角にある彼らの氏神の益田神社の境内で全曲を演じます。入場無料で、当日の昼過ぎからやっております。何しろ寒い時ですから野外で寒風にさらされながら見るのは大変です。私も最初見ましたときは、寒いので凍死寸前に近い状態で震え上がってしまいました。しかしすばらしい芸で、感銘しました。益田神社の境内といっても広くありません。そこへ、全国から関心をもった人が集って、とりかこんで観ます。

ござを敷いた上で演じるわけですが、すがすがしいものです。先般、長野でやりました時も、山ずその神社の本殿の下の広場で、村人に囲まれながら演じました。演じる前には、一座の代表たちが神前で獅子を一さし舞い、神に祈り、それから芸に入りました。

昨夜、「おどけ開帳」のときに、司会の大介君が出演者一同に代わって神の前に手を合わせたのと、同じ意味のことをやりました伊勢大神楽、そしてサムルノリも太鼓教室が終った翌日の村の盆踊りで二時間にわたる熱演をみせたときも、まず最初に舞台に神殿をおき、祈っています。日韓ともに芸能の道は同じです。いわば民俗芸能は、世界どこでも同じ形式を踏んできたのではないでしょうか。そこには本来の意味の民俗芸能の思想があると、私は思います。

(4)

さらに、具体的に民俗芸能をみてみると、どういうことになるでしょう。昨晩の演目にあった人形劇の安来節のどじょうすくい。あれは労働の表現です。安来節は労働歌です。民謡の多くは農耕の労働であったり、漁業の

労働をうたっています。これは、皆さんが民謡を思いかえされればすぐお判りいただけると思います。このことは、舞踊にしても同様であって、いろいろ変形をしてはおりますが、同様であります。各地に残っている芸能の中には、例えば農耕をそのまま演じているのがあります。初めに土を起す。つぎに種をまく。こんどは苗を植える。雑草とりをやる。さいごに実りの刈り入れをする。米作りを始から終りまでやるのが芸能として演じられます。

昔は、田植えのときには、苗を植える早乙女を、畔で男たちがはやし、歌い、踊ったりするのが行事になっていました。今は農耕も機械化して、こういう行事もなくなりましたが、昔はこういう行事が必ずやられ、それが芸能化しています。芸能は、生産や労働の中から生まれたといってもよいと思います。そして、これらと関連して虫追いの行事が生まれたり、雨が降るようにと雨乞いの行事が行われたりで、それがやはり芸能としてのこっています。

おそらく戦前まで、日本の国民の大半が農業とかかわっていたときには、当然これらの行事があり、それは芸能の中にも反映いたしまして芸能化されて今日まで伝わっています。

これはひとつのものを実らせる事でありますから、人間が子供を産んで自分の子孫を作っていくという事に対しても非常に大きな関心があります。これを非常に大事に考えている訳です。今だとポルノめいた話になりますけれども、そうではなくてもっと生殖という事は大へん神聖な事として考えられていまして、民俗芸能の中にもそのまま出て参ります。さっき言いました田植えの行事みたいな芸能の中で、爺さんと婆さんとが出て来まして、お婆ちゃんが大きなお腹をしてですね――お婆ちゃんがお腹が大きくなるはずないんですけども中に物を入れて大きなお腹を突き出してですね、二人が出て来てそして、二人が抱き合う。それが芸能の所作になってる。全くそのままの形、セックス行為みたいなものそのままをやっている訳です。

これが例えば、東京のある地域で、正月そういう芸能がやられています。学者、研究者はこれを詳細に観察して記録を残しています。これは予祝芸能で、これをやることで、今年農耕がうまく行き、ゆたかな実りがあるようにとの願いをこめて、地域の氏神でやるのです。観ていても面白いものです。大体、年の始めの正月ごろには、各地でこういう予祝芸能が行われ、今年の実りがうまくいくように、漁業が収穫が多くいくようにというわけです。そして、その中身は、民衆の生産行動と直結し、労働を描き、生産の結実を願っているものが多いわけです。芸能とは本来そういうものでしょう。そして、これらを創りだしてきたものは、その当時の支配層がつくったのではなく、正に汗にまみれ、ある時には命をかけるような努力と苦しみをしながら労働してきた民衆の作ったものであることを、私たちは忘れてはならないし、見逃してはならないと思います。

ソ連の初期の文部大臣であったルナチャルスキイは、あの骨太い「ボルガの船唄」は、ボルガ河の船の漕ぎ手の労働を表現したものだといっていますが、そういう意味では芸能は正に東西軌を一にしているといってよいでしょう。こうしたことを軸に、芸能はさらに多様な人間社会の様相を、さまざまに反映して多様な芸能の内容をつくりだしてきたわけです。その中には、昨晩の「相川音頭」のような「くどき」、愛の悲劇の悲しみを歌ったものも生まれます。また赤ふんどしの坊主の醜いさまをからかうようなものも生まれます。

能と狂言は一対のものですが、「狂言」は

大名という支配者と太郎冠者という下人との組合わせで、いつも太郎冠者が大名の鼻を明かして逃げだすのを、「やるまいぞ、やるまいぞ」と大名がおっかけます。昨晩の「おどけ開帳」の坊主は、自から堕落していくさまをさらけだすわけです。こうした坊主の批判がどうして生まれたか、ということです。

こういう一曲が生まれた江戸の時代は、鎌倉期の親鸞や一遍のように、どん底の民衆からしたわれた宗教の状況とちがって、大へん堕落していたわけです。お寺は、今でいえば区役所の出張所みたいになっていました。当時の反体制の思想、危険思想とされて禁止されていたキリスト教の思想、その信奉者の切支丹が国内にひそんでいないかを調べるのが、お寺の重要な役目になっていました。そして宗門人別帳というのを作るのが業務になっている。今でいえば、思想調査の戸籍調べです。お寺はこのように役所の下っ端みたいなことをやっていました。本来、人間の救済を本旨としているはずのお寺が、こんな状態になって、多くの僧侶は退廃し堕落してしまいます。いわば坊主は支配者の手先になり、思想的にも支配者の思想の中へくみこまれて、民衆抑圧の役割を演じていました。それで民衆は、じっと頭を下げて、いいなりになったような顔はしていましたが、心の中ではくそ坊主奴という気持ちがあったわけで、その気持ちを反映して芸能者は、「おどけ開張」の赤ふんどしの飲んだくれ坊主を芸能に表現しました。

こういう宗教者批判は、先にふれました鳳山仮面劇の中心と曲目になっているわけで、どの国でも共通しているわけです。このように、民俗芸能というものは、民衆を地盤として生まれたものであり、私たちが民俗芸能を継承する立場は自から明らかだといえます。それはまた、自主的な演劇活動をやられている皆さんの思想とも一致します。

(5)

ところが、そういうものを作って来た多くの芸能者たちは、先に問題を出しましたように、正に差別の中にあったわけです。河原者というのは、河原に住んでいた人々です。これは職能のいろいろな便宜もあって住んだ面もあろうと思いますが、決して支配者でも何でもなく、河原に住んでいました。

厳密な差別の形式やその状況は、さい近歴史家の研究がかなり活発に進められており、その成果を学ばれることを願いますが、そういう状況です。

すべての民俗芸能がですね、そういう風な非道い差別状況の中にあったとは申しませんけれども、ほとんどのものは多かれ少なかれ、そういう意味で歌舞伎役者が河原者と呼ばれた様に差別をされ、昨日演じました猿舞座の猿芸の場合には、これは明らかに穢多と言われる身分に属しておりました。だから村崎修二さん達は一方では芸能者ですけれども、同時に彼は山口県の部落解放運動の有能な働き手でもあります。

そういう中で芸能の運動と社会運動が結びついております。そのように、村崎さんは差別解放を念じながら、同時に猿舞という賤視されていた芸能を復活しました。困難な中で、彼は亡くなった詩人の丸岡忠雄さんらと協力して復活したのですが、差別からの解放の闘いに参加していなかったら、あんなエネルギーは出なかったろうと思うほどです。私はまだ猿舞復活が日程に上っていない当時から、その活動を知っています。よくやったと思います。

この猿舞が差別された身分の状況に少しふれます。江戸期の例をとりあげますが、この

時期の江戸（今の東京）では、穢多の最高の頭であった弾左衛門の配下におかれていました。そして、その猿飼いにも小頭がいて、その下に一般の猿飼いをやる人たちが従属していました。彼らは、江戸の町を廻って猿を舞わし報酬をもらっていました。今も猿舞座は投げ銭という形の興行形態をとっていますが、当時も廻る先々で報酬をもらって暮しを立てていたのです。その小頭は、長太夫、門太夫というのがいて、その下に町を廻る猿飼いがたくさんいました。そういう組織で、低い身分におかれていたのです。

さきほど、ふれました韓国の太鼓の集団のサムルノリのすばらしいエネルギーのことをいいましたが、ご承知のように韓国はいま民主化の瀬戸際に立って新しい時代を迎えようとしており、学生を始めすごいエネルギーを社会的に噴出していますが、このエネルギーを反映したのがサムルノリのすごい太鼓の音だなと私は感じました。それは長い間、植民地化され、抑圧されてきた朝鮮民族が新しい民主主義の社会をめざしているエネルギーです。そのようなエネルギーは、残念ながら、今の日本の現状の中では、表には出てきておりません。だから、余計にサムルノリの太鼓の音を強く感じたのかも知れませんが、とにかく強烈でした。

長野に一週間ばかりおりましたが、朝から晩までその太鼓のパーカッションがありまして、初級・中級・上級に分かれて習っています。大半の生徒は在日朝鮮人の人たちで、習っているわけです。朝から晩までパンパン杖鼓をたたいていますので、私、ビデオを撮り終えて東京へ帰りましてからも、一日位は耳に太鼓の音がついて消えないというほどでした。太鼓の芸のことは私よく分らないので、技術がうまいとか、音楽のレベルが高いとか、そういうことはよう申しませんが、とにかくその音には圧倒されました。そして、この音をスーッとうけ入れるのは、韓国の今の革新的な盛り上がりのふんい気だと思っております。

ところが、このサムルノリという太鼓集団は、実はもとはナムサダン（男寺党）という韓国の芸能集団の一党から派生した集団なのです。このナムサダンは、数年前に日本に来演しており、私も見ました。太鼓もやれば、人形も舞わす、仮面劇もやる、それから日本でいう放下芸、皿廻しや球投げや高登り、綱渡りもやるという雑技の諸芸が加わった演芸団で、現在は解体しており、サムルノリはその中から新しく派生しているのです。

こんなすばらしい芸能集団の人たちが、やはり韓国（朝鮮）では、かつて白丁（ペイチョン）という賤民身分だったのです。賤民として差別をされてきたのです。この白丁集団は、戦前の部落解放運動の団体であった水平社と交流をしています。このように韓国でも長く芸能をやって、本当に素晴らしい力で民衆と共に生きていた人々が、社会的にはそういう形で最も低い身分差別の中に苦しめられて蔑視をされて来ておりました。

しかしそういう差別の中からそれぞれ自分達の猿舞を作り、河原者と言われた者が素晴らしい歌舞伎の芸を作り出してると言う事は、やっぱり芸能というものは本当に民衆と共にある人間が作ることなしにはできないということだといえます。それがひとたび支配層にかかえられて色々と上の方で大事にされて、そしてそれに隷属をし、上の思い通りの形の芸能になって行きますと、これはもう固定化して老朽化して行きます。今の、能なんかにもそういう風な傾向があると思うんです。御承知の様に能は江戸の時代なんかには武家の式楽でした。だからそういう中で能というのは、私も芸能に関りありますからわかったよ

うな顔をして見ていなきゃならないんですけど、あんな眠たいものはない。見ていたら何だか、あれは幽玄なのかも知れませんが大変眠たい。しかし、あれをひけらかしていると、ところの狂言はおもしろいですね。これはやっぱり民衆の批判がちゃんと入ってますから。ところが能の方はむつかしそうなお面出て来てサーッとやりますけれどもあれはまあ、足が痛くなりますね、見てまして。しかし、昔はああいう風なものでなかったのではないかと僕は思ってます。世阿弥というのは大変立派な思想家で芸術家ですけれども、彼のあたりから、上にかかえられる様な情況が出て来てああいう風な、幽玄性という風なものが大事に考えられて、大衆の芸能である事をだんだん失って行ったんじゃなかろうかと私は思います。

もっと能というものはおもしろいもんだったと僕は思っております。これは色んな芸能で皆言える訳です。歌舞伎なんかも、明治以降に非常に変質したようです。明治の時代になると、身分制がなくなっていく訳でありますが、そういう中で歌舞伎を始め講釈、落語、なんかの芸能者が全部集められて政府から、お前らはこれから民衆を教化する、ちょうど最近では、中曽根首相がさかんに言っている「教化する。」そういう風な役割りを持った芸術家にならなきゃならんといわれる訳です。そういう形で芸能の改良というのをやって、見事につまらん芸能をいっぱい作り出す訳です。だからあの時代の歌舞伎の新作、改良劇というのは今、さすがにそういうものを演じませんけれども、当時の御用学者たちが参加して作った改良歌舞伎などというものはつまらなくて読めません。そして九代目団十郎という、当時の代表的な歌舞伎役者は大変優れた俳優であったのだろうと思いますが、あの人の舞台は、正に本来観客の中心であった民衆を歌舞伎から引き離していった人だろうと、私は思っています。演劇史でみる明治の上からの演劇改良というものの正体は、そういうものであったと思えます。

こうした時代の流れの中で、能も歌舞伎も非民衆的になり、おもしろさを失いました。さい近、市川猿之助が宙釣りや早替りをふんだんに出して、古い形を復活し、おもしろい、大衆的な形をみせようとしております。「日本武尊」などの新作は思想的に危険な点を感じますが、猿之助がいまやってる面白さ、もとは歌舞伎というものはもっとくだけたもので、昨日の赤ふんどしの坊主のようなものを皆平気でやって、筋や人物にいささか食いちがいがあっても、「かかることであったるか」といったことで、然るべく終りになるというものです。

歌舞伎の脚本などをお読みになると「今日はこれまで」とか「今日のところこれで打切り」というのが最後の台詞にあります。そしてチョン、チョン、チョンと拍子木で幕が閉ります。こんなの覚えておかれるといいと思います。ラストがちょっと切りにくくなったら、「今日はこれまで」。そうもいかないでしょうが、歌舞伎の脚本には本当に書いてあります。芸能というのは、楽しく面白い中で、自ずから世の道理を知る、といったことで、狂言は狂いごと、プレイやシュピールは遊戯といったことも見過しにはできないわけです。気楽に大衆は楽しんでる、やってる方も楽しんでいる、ということです。

ところが今はもうきびしくて、芝居をみてるときは、客席で物を食べてはいけません、飲んではいけませんというのですから、それも良いことでしょう。大変上品な事で良いんですけども、お芝居の世界というものはそんなもんじゃなくて、本当は神の前で宴会をや

る様なものであったんでしょう。

松竹新喜劇の、亡くなりました渋谷天外というリーダーがおりました。あの人がしゃべっておりますが、とにかくお客さんはお芝居を見に来るというのは半分、半分は食べに来る訳ですね。ですから芝居が始まりましても、舞台を見てない。そうして皆、円座を作りまして中で物を食べてるんです。今は椅子席ですからそんな事できませんけれども、昔は皆座ってた訳です。だから松竹新喜劇の、今は藤山寛美さんがリーダーでやってますけども、あんなアドリブいっぱいの芝居、他にはないでしょ。その時にならなんだら何をやるのか分かんないですからね。これは亡くなった村山知義さんが笑ってましたけど、渋谷天外さんというのは大変革新的な方でしたから、村山さんなんかを呼んで演出をしてもらって新劇をやったりしてます。村山さんは演出して帰る訳です、ちゃんと。そしてもういっぺん本番を見に来る訳です。ところが自分が演出した形は残っとらんわけです。つまり松竹新喜劇流になおしてしまう、無茶苦茶だと言えば無茶苦茶なんですがそういう事ができる様な役者さんに皆、なってる訳ですね。そういう風なものがあの松竹新喜劇なんです。

(6)

そういう意味では三好十郎の、先程お話にあった「浮標」の様な芝居というのは、りっぱですがしんどいですね。丁度、京芸の藤沢君があれをやるので是非見てくれというんで、私、京都へ行く機会がありましたので見たんですけども、三好さんというのは私も知っておりますけども、これはしんどい芝居です。ああいう芝居も良いですけどね。やっぱり私はスキヤキを食べてながら見られる芝居も欲しいと思うですね。そういう意味では、昨日の「おどけ開帳」なんてのは、それに当ります。あれは全部背中向けてたって役者の方も勝手にやってますからね、だからまぁそれで良かろうと。そういう演劇の世界が、本当に上も下一緒になった様な世界が将来の演劇の世界になり、大きな広場でやられるようなことになるでしょう。そういう時には、古き伊勢大神楽は、正に筆頭にあがる芸能になるわけです。

もちろん新劇とはジャンルが違いますし、新劇は新劇として歴史的に大きな役割を果してきました。私も新劇で育った人間で、生れて間もなく自由劇場が興り、青年期には築地小劇場を「海戦」からほとんど見ています。今日の新劇というものは、この築地のあとを継いでいるようなものです。それが新しい形になっていると思うんですが、それを見てる一人な訳です。だから新劇は僕は一番自分の気になります。まあ、広場でもやれるぞなんて言ってますけども、実際は新劇というのはしっかりしたら、そしてもっともっと本当に広い民衆に迎えられる様なお芝居ができる様になった時には、本当に中央に座るお芝居になると僕は思い、そうあって欲しいと念じてるんですけれども、ともかくお芝居というものはそういう時代の中で、その自分の置かれている位置というものを誤ったならば、これはもう非常にその芸術は硬化してしまうもんだろうと思っております。ですから僕達が今見ております歌舞伎というのはおそらく、明治以前の日本人が見ていた歌舞伎とは大分違うだろうと。さっき言いました様に「今日はここまで」と言うので済みますし、途中で、色んな台詞が入って来ますね。そういう様な事が歌舞伎というのは出来た。新劇でそういう事をやれと言ってるんじゃないんですけれども、それ程自由にお芝居ができてる、一方の見る方でも、今日はこれで終りか、そんな

ら帰ろうかという風な事で帰って行くと、いう風な事でした。

昔は通し狂言というのはものすごく長い。今の新劇の十倍位のがありますでしょ。よくやります「仮名手本忠臣蔵」なんていうものは、ほんとに長い。

昔はあれ全部始めからしまいまでやってた訳です。だから朝暗いうちから出ていって帰る時は夜、暗くなっています。それで今の様に外は明るくありませんから、帰るのは大変恐い。「四谷怪談」なんて芝居を見て、帰って来る時の、それは、女の人などはびくびくしながら歩いてて、何かで石につまずいたりしてキャーッと言ってるという風な——そういう形でお芝居を見てた。しかし見てる間はですね、楽しんでいたという形がお芝居にありました。また、きのうやられた「おどけ開帳」など、これは芸能者が道を歩いて旅をして、そして民衆の生活してる場を訪ねて行って、そしてそこの門口でやって、そのお礼にお米をもらったり、大根一本もらったり、だからあの人達は皆、袋をさげています。あれお米を入れる訳です。そういう形のものでありまして、本当の民衆とのつながりを非常に持った芸能者でした。

そういう中から民俗芸能というものは創造の源泉、思想的源泉、感性的源泉、刺激というものは民衆との直接の接触との中でうけとりました。

民衆が苦しんでる事、喜んでる事、願ってる事というものを読み取って、そうして彼らはそれを形象化して、ささやかでありますけれども、ああいう風な芸能を作り出して行った訳です。ですから、田植えをやったり、そりゃいろんな事をやりますし、正に、お産劇みたいなものをやったり、色んな事をやってる訳ですけれども、本当にその源は民衆の中からつかみ取って来ました。これはある意味で、それこそリアリズムの一番原点みたいなところをです。

こうして、日本の民俗芸能は民衆に学びつつ、自からを豊かにしていき、民衆との交流を深めて、芸能を育てて来たのだと、私は思っております。しかも、さきに申しましたように、社会での位置づけは、穢多頭の弾左衛門の支配下におかれ、さらに猿飼いは二人の小頭に従属していて、そして自分たちの廻る先は決まっていた、テリトリーがちゃんとあったわけです。猿飼いは、江戸期、江戸だけでなく全国あちこちにいたわけで、猿舞座は、長州藩の下での猿芸を堀り起し、皆さんが昨夜ご覧になったような形で、新しく再生されているわけです。

そういう支配された組織形態は、明治以降はなくなったので、猿舞座は全国自由にどこへでも行けますが、明治以前はそうはいきませんでした。各地の猿飼いが、江戸の町に入ってきて一稼ぎしようとしても、勝手に門づけできません。自分で勝手に歩くことはできないんです。よその土地から入って来たものは、ちゃんと江戸の猿飼いの頭のところに行って、「こんど私はここで興行したい、門つけをやりたいんですけれど」と願いを出す訳です。そして許可をもらって、それじゃお前はあすこに行けと、いう風な指示を受けて他国の猿飼い達は町を廻っておりました

これは明治以降にくずれてしまう訳ですけれども、それまでそういう形で、多くの民俗芸能者たちは、ただむやみに歩いているんじゃなくて、自分の行く地域、自分の行く所での手がかりになる人、あるいは宿屋、といった風なものが必ずきちんとありまして、そうしてやってたのです。

昨日も言葉が出てましたけれども「放浪芸」といいますね。小沢昭一さんなんかも、「日

本の放浪芸」という本をお書きになってる訳で、芸能学者の中でも、民俗芸能の、しかも特に道を歩いていく様な道行く芸能者の場合には放浪芸といっております。で、それは一面まちがいではないと思うんですけれども、私は基本的には放浪芸という言葉には反対なんです。もっとちゃんとした普及の筋道があった、そうでなかったら中世の様な時代に、今日から食いぶちがないからどっかへ行ってやってやろうというので出かけて行ったら、おそらく中世だったら三日目位には飢え死にします。あるいは、冬であったら凍死をするでしょう。そういう風な厳しい社会状況の中で、放浪をして歩くという風なロマンチックな旅というものは芸能者にはできなかったと私は思っております。もっとちゃんとてがかりがあって、そうしてある時期が来たならば、その時期には必ず昨日の様な春駒がやって来る。春駒が来たらひとつ、種の準備をしようじゃないかという事が、民衆に教えられて、民衆は「ああ、あの春駒さんが来たら種の準備をしようぜ」と、いう風なつながりがちゃんとあったわけです。

昨日の赤ふんどしを出しました坊主というのは、願人坊主の系統の芸でありますけれど、お坊さん達が沢山、宗団の、下っ端の坊主やニセ坊主が勧進と称して、いわゆるカンパ活動ですね、ずっと全国をまわっております。例えば高野聖ていう様な、高野山というのは中世の大きな宗派の拠点になっておりますからその高野山というものを背景にして、そこのお札を持って全国を歩きまわって「これから高野山の何とかという塔を建てますからひとつカンパをして下さい」と言ってまわりよると言うのが表の名目なんですね。それで後には怪しげな高野聖がいっぱい出てくるわけです。聖（ひじり）という言葉は聖人の聖と書くんですが、実態は昨日のあの赤ふんみたいな坊さんが多かった訳です。その聖という事も日を知るという日知りに通じます。だからあの高野聖が今度お札を持って来た時には、いつもいつごろ来るからこういう季節の準備をしなきゃならんというような意味で、暦のかわりの様な役割りも演じていたわけです。

私たち芸能の世界で話していると、こんな事は大変野暮ったい話になりますけれども、実は芸能者は深く深く民衆生活と結びついていて、日常の生活の中にくい込んだ形で、世界的にどこでもそうでしょうが、民衆の中を歩いて来ている。そして民衆と交流し、民衆の心をつかんでそしてそれを表現し、それを返していくと、いう風な活動をずーっと続けて来ていたのではないかと思うのです。

(7)

この席の大半の方は、お若い方が多いから、そういうものをほとんど経験していられないでしょう。私は、たまたま幸か不幸か、三代にわたって生きておりますので、戦前、戦争が始まりかける昭和十年あたりまでは、あちこちで、ああいう芸能者たちが、五月になったら大黒舞がやってくる、春駒がやってくる、季節によって猿廻しが来る、越後獅子がやってくる、ちょろが来るという風な事が皆習慣になっておりました。二月の節分になると厄払いが来るという形です。

私京都生れですが、節分には厄払いが「ヤッコ払いまひょー」と言って、晩になると来る訳です。そうすると、この頃はどうか知りませんが、節分には豆をまきますね、そしてあれを年だけ食うんです。僕だったら八十一食って次の日は下痢するだろうと思うんですけど、厄払いさんが来るのを予想して、そうして私の家なんかも、自分の家の表に豆をちゃんと

紙に包んで、それになにがしかのお金をいっしょに包みまして、それを表に置いときます。そうするとその厄払いの人がやって来まして、「ああめでたやなめでたやな」と言って、厄払いのひとくさりを唱えまして、それを持って帰って行きます。その歌を唱うというのはそういう物をもらうことへのお返しな訳です。そのお礼に芸を返してる訳です。

今もその厄払いがやってくる地域もあると思うんですけれども、ほとんど都市では見られなくなってしまいました。そんな状況ですから、やっぱり芸能というものは自分の目で見なければこれを受け継ぐと言ったって何だかよく分からない訳ですけれども、色んな面で絵も残ってる訳で、こんどの「おどけ開帳」をやられたのも、ちょっと説明にございましたけれども、佐渡でそういう芸能が残ってるのを、たまたまビデオで撮って残しておりましたので、あの相川音頭なんかもそういうものを見て、覚えられて、いささかの振付けがあって、昨夜の踊りになったわけです。

皆さんはいろいろな物にご関心は豊かだと思うのですが、ひとつ、それを機会に、日本の民俗芸能を受けつぐ担い手になっていただきたい。邦舞などもいまは盛んですが、新劇の世界でもそれほど関心が高くありません。邦舞や邦楽は、実は明治期に今の東京芸大の前身が作られたとき、洋楽は重視されたが、邦舞、邦楽は脇におかれてしまいました。創設者たちには、河原者の世界や遊里のような悪所でやられているような邦舞や邦楽は低級なものだという、差別意識がはたらいて、伝統芸能を放ったらかしたのです。新劇にしても西洋でつくられたものを移入して育ててきたという歴史があり、邦舞、邦楽には弱いという傾向がいまも残っています。それで「おどけ開帳」のような伝統芸能をやるとなると、それが障害になって出てきます。そういう点を考慮されて、民俗芸能に新しい息吹をふきこんで下さるようお願いをします。

明治以降の文化の近代化というものは、そんな形で進行したので、差別の状況というものも、それ以前の身分制は公的には賤称廃止令でなくなりましたが、現実の社会状況はそうした差別状況をぬぐいさるまでには至りませんでした。芸能関係でいえば、女優の登場する過程をみると、よく判ります。明治期には、まだ女優はほとんど出てきていません。

先程申しました小山内薫が左団次と一緒にやった明治の四十二年の自由劇場、女形で新劇をやってるんですから。これはちょっとおかしいでしょう。ですけど実際はそうだった。こういう現象は、やっぱり女性全体が社会的に差別をされてた表われなんですね。女がそんな事をやるのは駄目だ、という事と芸能者はいやしいもんだという事が結びついて、うちの娘がそういう事をやるのはけしからんと、という事です。大正期になるとそれがだんだん大正デモクラシーの中で変って行きました。女優が現われて参ります。しかし映画の女優に致しましても初めは普通のお家の娘さんというのは誰もなり手がない。なろうと思ってる人はいたかも知れないけれども、家がやらさない、という風な事で、大体は花柳界で育っている様な芸者さんなんかが女優さんになっています。

松竹の川田芳子さんなどはそうです。そういう形で、昭和になりまして、皆さんはお名前をご存知でしょうか、入江たか子という、大変美人の、京都の昔の公卿華族の娘さんが日活に入社しました。昭和期になると、女優が映画各社でどんどん出て来て、入江たか子だけではありませんが、入江たか子は華族出身ということで注目を集めました。彼女は、本名は東坊城英子で、東坊城家というのは子

爵です。当時、京都にエラン・ビタール劇場という新劇団体があり、そこがチェーホフの「叔父ワーニャ」をやったとき、初めて舞台に出ました。私は、そのころ旧制高校の学生で、劇研などをやっており、入江の初舞台を見ております。アマチュアの初舞台で何の記憶もありませんが、美人だったことだけは覚えています。入江たか子は間もなく当時の大映画会社の日活に入社し、スターとして売り出されました。彼女の兄の東坊城恭長というのが日活の監督をしていて、その縁で日活がひっぱったのでしょう。ところが、この入社が問題をひき起しました。華族という身分は、皇室を支える特権層で、上級階級層なのです。国から補助をもらって生活してる存在で、国の功労者や旧大名、公卿などが爵位をもらい、公侯伯子男という序列があり、東坊城家は下から二番目の子爵でした。そういう上級層は上級層で様々な制約があり、その中から女優の如き卑しい河原者身分の者が出るのは怪しからんということになりました。そして爵位停止になりました。これは明らかに差別で、女優という女性と職分の賤視です。この座に女優さんは沢山いらっしゃるわけですが、皆さんの先輩の中には、そういう道を通って女優が生まれているということを、私は忘れないで欲しいと思います。

今日、タレント募集といえばワーッと人が集まる状況と比べれば、昭和の初期にはまだその出身の身分が問題になっていたのです。入江たか子は、そういう処遇にあいながら、女優の道を進みました。当時の新聞をご覧になれば、この事件は大きく報道されていたわけで、大局的にみれば、この事件は一女優の問題に止まらぬ、女性差別の一頁として記憶さるべきだと思います。

そう考えると、私たちは芸能をやっていくにしても、ただ芸能の内部のことだけを考えていればよいということにはなりません。芸能のことを追求していくと同時に、社会的、政治的なことについても、最低のところをきちんと気を配っていく必要があるでしょう。さい近の政治の動向をみておりましても、見過せないことが起っております。中曽根内閣のもとで、一部の学者、文化人が、さきほど梶さんがお話になったような、反動的な、しかも新しい形を装った日本文化論がのさばり出しております。これは、京都の梅原猛、上山春平といった人たちがリードして、新しい思想集団をつくり、政府のこの人たちを中心に思想文化研究所をつくることになっています。さきの十五年戦争のときには、天皇神格化、国体明徴ということで戦争遂行体制の強化に一連の御用学者、文化人が動きました。そういう中で、民俗芸能なども、どんどんつぶされていったわけです。私が、さきに市川猿之助が、いま新しい動きを見せている梅原猛の作である「日本武尊」をやったことに、危険な思想性をみるといったのは、その意味です。「日本武尊」の思想は、天皇族の征服支配の思想の劇化です。私は、先の戦争を経験した一人として、こういう文化の動きは黙視できないのです。文化の破壊だからです。民俗芸能の抹殺につながるからです。

長い歴史の中で、民俗芸能はしばしば上からの圧力に妨げられてきました。民衆と深く結びついた芸能は、その中で民衆の願いを生かす努力を重ねてきました。それは「神」に祈る形をしばしば採ってきてはいますが、それはつねに民衆の声であったわけです。今日、私は芸能のプロローグで、神に祈ることを申しましたが、そういう形にこだわる必要はないと思います。そういうこだわりを配慮して、私は宗教を思想として考えてはどうかというようなことを申し上げた次第です。宗教とか

神とかいっても、別にお線香くさい話ではないので、あの春駒が「お坊ちゃん、お嬢ちゃん、ご息災で」と呼びかけをします。あれは全く日常の生活の健全を願う呼びかけで、今日でも十分通用します。そして今日なら、「平和」を念じようという言葉に変えてもよいわけです。猿はかつて馬の病を慰やすお祈りをやってき、伊勢大神楽は訪ねる家々ではかまど祓いをします。馬を飼ってる家がほとんどなくなったり、かまどがガスや電気のこんろに変った今日、猿飼いも伊勢大神楽も昔のようにはできませんが、それなら核兵器を廃絶しようということに変ってもよいわけです。今日の神の声はそういうものであるはずで、そうでなければ神も民衆のくらしを憂える神としての資格がありません。私たちはそういう視点で、民俗芸能を正しく継承し、これを今日にふさわしいものに創造していきたものです。

今日は、そういう意味では、決して油断のならない時代です。下手をすれば、さきにいった日本論者たちは、一部の民俗芸能をとりあげて、あだかも純粋な日本文化の象徴にして上げかねません。私が猿之助の「日本武尊」の上演の危険性を指摘したのも、そのためです。私たちは、このような歴史に逆行した文化行動に反対し、民衆のくらしといのちを支える民俗芸能をほんとに民衆のものにする時に直面しています。そういう意味でも、歴史と現実の真実を追求するリアリズムの立場にたたれた皆さんに、民俗芸能の継承への関心を期待いたします。

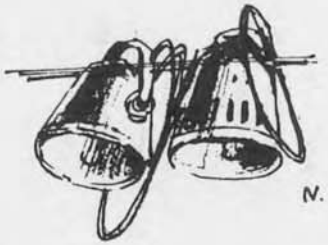
サムルノリのリーダーである金独沫さんも、パーカッションのシンポジウムで、民衆芸能はあくまで民衆が創造したもので、支配者のものでないと力説しておりました。その点では、韓国も日本も全く同じです。

大変とりとめのない話をいたしました。あっちへ飛び、こっちへ戻って、民俗芸能そのものについては、まことに大ずがみな、あらっぽい話で恐縮です。

時間がそろそろ来たようでございますので、この辺で私の話を終らせていただきます。

（大きな拍手）

（**おことわり**。本文は区切なしの論稿でしたが、ひと息いれる感じでアラビア数字で小休止をいれました。同じような意味で、可成の行改えをほどこしてあります。字句の省略は明らかに重復と思われるものの節約以外はありません。北川先生に心から御礼を申し上げます。＝**編集・萩坂桃彦**）



●特集……東・西総会とゼミナール

時代にふさわしい活動の展開を

――第26回・西会議総会の報告――

田中　実
（劇団息吹）

全り演第26回西会議総会は山口県湯田温泉ホテル「かめ福」で8月21～22日の両日に開催された。

昨年の総会は、トントン拍子ルンルン気分（演劇会議誌64号後記）であったが、今年もルンルンとはいえないがトントンと議事はすすんだ。

我々を取りまく状況が好転したのでもなく、光が見えはじめたわけでもないが、数年前の重苦しい雰囲気はなく、開き直りからか楽天的な雰囲気の総会であった。

討論は活発ではあったが整理して報告するのは大変で、だからこの一文も印象記として読んで下さればありがたい。

総会は26集団及び手話劇団「河」がオブザーバーとして出席して、ここ数年来では最も多くの集団が参加した。

まず総会議長団に、杉本（劇団大阪）、畑野（こじか座）の両氏を選出。続いて西会議議長団を代表して猿渡氏（福岡現代劇場）が、演劇会議誌66号の座談会での城谷氏の発言を引用しながら、全り演運動がすすめてきた「地域に根ざす」概念は今日ではむしろ「地域をつくる」と言い替える方がピッタリだと思う、またマスメディアなどによってつくられた文化やあれこれのモデルを追うのではなく各地域各集団の活動そのものが一つのモデルであり、その経験を積極的に交流し合うことができれば、充実した総会になるだろう……と挨拶。

討議は、梶事務局長の報告から始まった。事務局報告はわれわれをとりまく状況と活動を概括しながらすすめられた。

自民党の長期政権によって国の内外で矛盾が拡大しているが、この政治の流れを変える柱となるはずの労働組合が、その力を発揮しないばかりか右傾化を強めて企業の資本蓄積の水先案内人を演じている。労働者は職場での不満を抱きながらも権利拡大の欲求を減退させ、長時間労働や出向などを余儀なくされて、そのため精神的にも肉体的にも疲労が蓄積し、業余を文化的に過ごす能力を喪失してきている。

わたしたちの多くが労働者の集団としてこのような現実の渦のなかにあるため、その諸活動は苦闘の連続であり、未来をみつめるすぐれた作品が生まれ難い……と、状況を分析しながらも、だがむしろこのような時代であるからこそわたしたちの活動が光彩を放つのだと檄をとばす。

それぞれの集団が地域と集団の特性を生かし、相互に連携を強めながら、時代が求めるさまざまな新しい創造方法を学び、同時代を生きることの意味を共有し得る演劇を創り広めようと呼びかけた。

そして、西会議加盟劇団の活動の特徴を、各集団が存在の意味を明確しようとする傾向

が著しく、それぞれに成果を挙げていると集約した。

①レパートリィでは、創立30周年の関芸と四紀会が、上演形態の違いはあるものの創作劇4本を連続上演を計画し、あしぶえの「落ちこぼれの神様」は福岡のハカタや大阪のきづがわでも上演される成果を上げ、大阪は劇団員創作劇「昭和酔虎伝」を上演、府職劇研も「雲雀の仕事」に挑んだ。また一方京芸ではレパ反対者の退団表明をおして三好十郎の「浮標」を、未来は劇団の歴史からは想像できない北村想「十一人の少年」を取り上げて話題を提供した。

②地域の民主運動との連携や合同公演で、創作劇が生まれたり注目される上演成果もある。和歌山、神戸職演連、中国ブロックがそれである。

③稽古場兼用の劇場で拠点づくりを目指す傾向も顕著だ。テアトルハカタ百人劇場、あしぶえ五十人劇場の建設、螺線館の移動劇場、大阪や未来の改築、移転などだ。

劇団の活動報告の主な発言は、創造問題では、

京芸……なぜいま「浮標」なのかという声があったが、特別の理由はない。ただ劇団ではこの作品をくぐり抜けねばという強い思いが若い劇団員までも支配していった。その過程で「本音ばかりの芝居には生理的にはついていけない」「自分の人生に精一杯で他人の人生なんかに興味がない」といった反対意見が続出、数人の中堅劇団員が一挙に退団する事態も起こったが上演の結果は高い評価が寄せられ、若い観客にも「えらいものを観たぞ」という気持ちにさせたようであり、人生の「飢え」に応えたとの確信をもった。

未来……若い人たちの欲求に応えたいという思いで「十一人の少年」を取り上げた。結果は若い劇団員よりも旧い人が喜んだ。俳優が面白く楽しんだ芝居がお客さんも面白いと伝わったかどうかは課題として残した。この創造で得たものを生かすのはこれからだ。

関芸……関西在住作家のものを上演することを活動の軸にしてきたが、今年は30周年でもあって四十余人の演技者総出演で、若手作家中心の創作劇四本の連続上演となった。劇場も若者のメッカといわれる場所に進出、劇団の命運を賭けている。

四紀会……十年間にわたって観客対象別の班活動で集団が活気づいたが、一方では自分の班以外に関心を寄せなくなってきた。そのため30周年を節目に、劇団活動の基本である地域民衆の歴史と生活を描く創作劇四本を一年間に連続上演することで劇団の再構築を図ろうとしている。

拠点づくりでは……

あしぶえ……念願の五十人劇場を完成。「落ちこぼれの神様」を五か月間の長期公演で八五〇人の観客に接した。易しくて楽しい作品との評価を得たものの、生徒に観せたいという学校側の要求には応えきれていない。

テアトルハカタ……百人劇場の完成から一年半、一公演平均千五百人。目標は経営的にも五千人で地域にどっかりと根をはること。そのために平日マチネーの定着化を目指し、貸しホールも考えている。

地域との連帯活動では……

月曜会……原爆の犠牲となった新劇移動グループ「桜隊」を追悼する意味で「獅子」を上

演することを企画したが、「桜隊」ゆかりの地である宇品で上演実行委員会が結成されて劇団としてはじめての地域移動公演が成功。しかもこの取り組みのなかで「宇品の歴史と文化を語る会」も結成された。

生活舞台……国鉄の分割民営化反対集会など、地域の民主集会との連携に情熱を注いでいるが、自主公演は持ち得ていない。

和歌山演集……昨年の市民参加による大演劇行動に引き続いて今年も、語りつごう和歌山大空襲実行委員会主催で創作劇「音楽によるあの街からこの街から」を栗原小巻さんを迎えて上演したが、劇団自体の創造や組織強化にはねかえっていない。

中国ブロック……昨年に続いて憲法集会に合同公演して刺激し合った。ブロック活動は充実しているものの今後は一劇団ごとの力量向上が課題となっている。

職業劇団からは……

クラルテ……子供だけでなく大人のための人形劇を土曜劇場として企画した。来年は40周年であり文楽劇場で「国姓爺合戦」を上演したいと考えている。平均年齢が35才で若い劇団員が少ないのが深刻である。

コーロ……学校公演が少なくなって経営的に困難な状況である。固定給制度は劇団の柱であったが、今年は二割カット二か月欠配している。

ひととおりの報告が終わって討論となったが、テーマを特に限定せずにフリーな討論になったので発言は活発であった。

そのなかで創造問題で両極と思われる京芸と未来に話題が集まったが、創造に関する発言のみを記してみる。

栗原氏（いこら）……「浮標」は演劇会議誌64号の島田論文への反論ではないかとも感じた。この舞台から若者たちは新鮮な感動を受け「新しい芝居」と受けとめたようであった。暗い冬の時代でのインテリの苦悩が焦点なのか時代そのものを観客と共有したかったのか、演出にも興味がある。一方の「十一人の少年」は演出が間違っているのではないか。リアリズムの方法を硬直化して考えていないか。

森本氏（未来）……稽古のなかで発見していくことが少なく、従来の役づくりの方法ではどうにもならないことを体験した。

仲氏（関芸）……作品によっては新しい創造方法を模索することが必要である。

梶氏（四紀会）……一つ一つの作品に課題を明確することが必要だ。俳優も心の動きを言葉と身体が後を追って行くだけの役づくりではどんな作品でも通用しない。即物的感覚的な面での俳優訓練がなければ生き生きした人間を形象出来ない。

栗原氏（いこら）……関芸は全方位的、あしぶえは観客が喜ぶ芝居、テアトルハカタは観客の半歩前をといろいろな表現はあるが、劇団としての主張がなければ観客とともに楽しむことも出来ないだろう。

合田氏（どろ）……楽しく観せるという言い方には危険もある。楽しい芝居とは観客を巻き込んだ創造であるはずだ。

小沢氏（京芸）……若者は、自分の居場所に芝居が届けば沸く。しかし若者の居場所そのものをゆさぶることが肝心だ。それが良質の芝居かどうかの分かれ目だろう。

三村氏（四紀会）……舞台の上で役者どうしがぶつかり合うことが少なくなった。大所帯なので日常交流も希薄になっている。だが上べだけの付き合いで劇団員の数を確保する態度はやめた。舞台こそ回答にしたい。

園山氏（あしぶえ）……小人数劇団では愛情こそ命だ。後輩を可愛がり先輩を敬うことに気を配るなかから優れた創造をめざしている。

討論は充実していたものの誰もが発言し易い雰囲気で進められ、はじめて参加した人からはこれだったら総会を敬遠しないで次の年も参加したいと感想が寄せられるほどだったが、それだけにまとめるのは大変だ。

演劇会議誌の50部増誌と投稿、国民文化祭への対応、地方自治体への文化要求なども討議した後、事務局長が各集団ごとに独自性を発揮しながら地域を創る意識的な活動を展開していこうと締めくくって討議を終えた。

なおかねてから辞意を表明されていた土屋議長（月曜会）については、執筆活動に専念していただくため今後は運営委員とし、代わって議長団には事務局長兼任で梶氏が選任された。土屋議長には西会議結成時より長い間ご苦労さまでした。

活動方針

・ブロック活動を強化し、劇団交流を積極的にしよう

・演劇会議誌の内容を充実し、拡げよう

・演劇フェスティバル等の諸行事を成功させよう

・文化政策の拡充と民主化へ、地域で連帯して運動を展開しよう

・西リ演史を深めよう

事業計画

・演技ワークショップ

88年1月17～18日　関西地区

・演劇フェスティバル（道演集共催）

88年8月5～7日　札幌市

西会議から1集団の上演参加

多くの個人参加を

・88年度総会

88年8月22～23日

◉新役員

議長団　仲　武司（関芸）

藤沢　薫（京芸）

猿渡公一（福岡現代）

梶　武史（四紀会）

事務局長　梶　武史（四紀会）

次長　熊本　一（大阪）

田中　実（息吹）

運営委員劇団

（京都）京芸

（大阪）関芸、未来、大阪、息吹

（兵庫）四紀会、やぎ

（中国）月曜会、草の実、トラム

（四国）福岡現代

会計監査劇団　息吹、やぎ

〈悲しいお知らせ〉

土屋　清さん、死去

西会議総会で土屋清さんに、全リ演議長団の役を解かざるをえなかったのは、勿論、病気のためでした。

ひたすら、その恢復をねがったのですが、それはかなえられず、十一月八日（午後九時一分）、竟に余りにも早い生涯を終えられました。病名は食道がんです。五十七歳とききました。

次号で追悼特集をいたします。

だからまださよならは言えません。

編集委員一同

●特集……東・西総会とゼミナール

第二十六回全リ演・西会議

「山口ゼミナール」

実行委員長　杉林幸登
（劇団草の実）

この「演劇会議」が皆さんのお手元に届く頃には、ぼつぼつ北の方から初雪の便りが聞えてきて、稽古場の寒さが体にしみてくる、季節となっていることでしょうが、各劇団とも今年を締めくくるべく、がんばっておられることと思います。

さて、第二十六回全国リアリズム演劇会議西会議「山口演劇ゼミナール」は、八月二十二日・二十三日（土・日）の二日間、行なわれました。場所は、明治維新の里、長州「西の京」は山口市の湯田温泉、「ホテルかめ福」にて。西日本各地より、三十劇団、百十数名の演劇を愛する仲間の皆さんに参加していただき、盛大に開催することができました。皆様のご協力を厚く感謝いたします。そしてこの「山口ゼミナール」を成功させるべく、まだ寒い時期より、諸事情を排して、日夜奮闘し努力された、実行委員の方々には、万感こめて、「御苦労様でした」と、お礼の言葉を申し上げます。お陰様でゼミを担当した各劇団とも、落ち着きを取りもどして、秋の公演へ向って、活動を開始しております。

ここで、今回の「山口ゼミナール」の過程を振り返ってみますと、まず草の実の下村氏より、「西会議演劇ゼミナール」を山口で行えないだろうか。という話があったのは、まだ雪が降る二月頃であったと思います。なにしろ百名以上の規模になる催しですし、地方の劇団は、団員数が大都市の劇団に比べて少ないので、単独劇団ではとても実行できないということで、県内の各劇団が合同して当らねばならないという状態でした。その後、県内の劇団と相談しましたが、それぞれに公演や催し物があり、スケジュールの調整が難しいとのことでした。更に、山口で行うとすれば、会議は何処にするのか。夜遅くまで大きな音が出せて、しかも泊れて、交通の便が良い所があるのか、また地理的に、山口県は西の端に位置しているので、はたして参加者は予定通りに集まるのだろうか。「山口ゼミナール」にふさわしいイベントが企画できるのだろうか、と問題点がいろいろとあり、順調にはいきませんでした。それから何度か話し合っていくうちに、会場も何とか確保できそうだし、他にないものを企画すれば、参加者も増えるだろうということになり、八月までは公演をとり止めてでも引き受けようということになりました。

第一回目の実行委員会は、三月の初めの雪が降りしきる、とても寒い日曜日、「演劇サークルトラム」の稽古場で、すき間風に震えながら行いました。このような催しを企画・運営してみるのも、劇団員にとって良い勉強になるし、芝居作りの上にも役立つのではないか、毎回ただ参加するだけではなくて、自分達でやってみようという意見が多く、まずは、それぞれのスケジュールの調整から始まりました。今回の実行委員はゼミが初めての者が多くて、何から手をつけたらよいのか、又実行委員の劇団がそれぞれ遠く離れていることもあって、日曜日にしか会議ができないなどの理由で、当初は思うように進みませんでした。その後、五月には、憲法集会での公演等があり、実質的に実行委員会として活動を始めたのは、六月に入ってからでした。

それからもう一つ大事なこと、ゼミナールのイベントを企画しなければなりません。何か面白いものはないものかと、いろいろと模索していたところ、下村氏のかつての劇団仲間で、現在は猿舞座という、猿まわしの一座の主宰である、村崎修二氏より、日本の伝統芸能である「手踊り」という大道芸を復活させてみないかというお話しがありました。これなら山口ゼミナールのメインイベントとしてもぴったりだし、劇団活動の活性化にもつながり、芸として残すこともできるので、これでいこうということになり、さっそく稽古にはいりました。新編「おどけ開帳」――日本の手踊りの継承と創造のための試み――。

しかし、民俗芸能、それもすたれゆく芸能いや、既にすたれてしまった芸能もあるので資料はほとんどなく、ましてそれを知っている人もいないので、はたして芸能として形になるのだろうか。全員が手さぐりの状態での出発でした。幸い、村崎氏の所に三年前に佐渡で行われた、伝統芸能夏期大学のビデオテープが残っておりましたので、それと村崎氏の指導により稽古を行いました。なにしろ、日頃我々がやっている新劇とは、異質な世界であり、体の動き、足の運び方、手の動かし方等が異なっているし、衣装にいたっては、全て自分達で作らなければならない等々、まさしく、一からの出発であり、創造のための試みでした。

「新編おどけ開帳」より「春駒」

こうして、夏も盛りの中、汗を流して連日の稽古となりました。その間にも、劇団月曜会による「どんべえ太鼓」、福岡現代劇場の絵解説教「地獄極楽冥途の旅日記」、劇団あしぶえの肩金式車人形による「安来節」、さらに、劇団やしゃぶしの友情出演による筑豊

劇団やしゃぶしの筑豊犯言「穴」

狂言「穴」と、内容も充実してきたのでした。そして「一大民俗芸能絵巻」は、維新の地・山口で盛大に花開くことができました。実行委員のみならず、ご協力くださった各劇団の方々や関係者の皆さまに大変感謝いたします。

次に交流会についてですが、二日間という短い日程でのゼミナールということもあり、又おどけ開帳を前半に入れたこともあって、交流会の開始が夜十時を過ぎてしまいました。当初の企画では、おどけ開帳と交流会を一緒にして、酒を飲みながら大道芸の数々を楽しんでもらおうということだったのですが、せっかくこれだけの民俗芸能が一堂に会したので、一般の人々にも観てもらい、それぞれ分けて行なうことにしました。本来なら、この種の芸能は、お客さんが観に来るものではなく、人々がいる所へ芸を持って観せに行くものなので、お酒など飲みながら楽しく観る方が、やはり良かったのではないかと思われました。今回はいろいろな事情で、このようにしましたが、交流会を楽しみにして来られる方が多いと思いますので、もっと早く始めてもっとゆっくり、寝る暇を惜しむことなく交流できるような方法はないものでしょうか。交流会の開始をもう少し早くすることは日程上無理もあり、夜を徹して語り明かすのがいいんだと言われる方もありますが、今後の課題になると思います。ともあれ、ロビーでの交流会も盛りあがったようですし、東の空が白み始めるまで語り合った人もいたようで、久々の交流を楽しんでいただけたことと思います。

それから、特別講演「伝統芸能のはなし」ですが、今回のメインイベントとして、民俗芸能を取り上げたので、日頃接することのない伝統芸能についての講演がよいのではないかということになり、猿舞座の村崎氏のお骨折りによって、北川鉄夫先生に依頼することになりました。北川氏の経歴は省略させていただきますが、我々演劇界の大先輩であり、民俗芸能社会史の研究家でもあります。北川氏の講演というより「おはなし」は大変わかり易く的を得た内容で、伝統芸能と民衆のかかわり合いが良く理解できました。

民俗芸能の根底に流れているものは、昔も今も、我々演劇人が目指しているものと同じであることに気づきました。大衆の欲望・希望・体制批判を彼らは巧みに取り入れて、世間へアピールしては、日本各地を渡り歩き、生活していたのでしょう。今でいうテレビ、新聞、雑誌等のマスコミの役割をも果していたのです。私達も、もう一度原点にもどり、技術ばかりを追求するのではなくて、素朴な民衆が求めているものをさぐり、民衆に支えられる新劇を目指して行かなければならないのではないかと考えさせられました。世の中がますます冷たくなってきた今日では、私達の役割はとても重要なものに思えます。困難なことばかりですが、くじけず地道に続けようと思いました。何よりも演劇が好きなのですから——。

さて、分散会についてですが、今回は比較的若い劇団員の方々の参加が多かったようでどの分散会でも活発な意見が出てなかなか充実していたようです。日頃接することの少ない、遠く離れた劇団の人々が、何を考え、悩み、何を求めて、どのような活動をしているのか。文字では分らない、生の声を聞くことができて、大変参考になったことと思います。大所帯の劇団、数人しかいない劇団と条件はさまざまですが、それぞれに抱えきれない問題をもっており、苦労しておられるのが良く分りました。自分達の劇団だけがこんなことで頭を悩ましているのかと思っていましたが他の劇団でも、ほとんど同じ問題を抱えていることを知り心強く思いました。まず一番に

共通している問題は、稽古時間の不足・不ぞろいということでした。各自が仕事を持っていて、疲れた体にムチ打って、夜遅くまで稽古をする。残業あり、家庭の事情ありで、十分な時間と役者がそろうことが難しい状態です。まして現在は、男女雇用均等法により、女性も残業で遅くまで会社に縛られるようになり、ゆとりのある社会・文化的な社会という文句とは裏腹に、より働きバチの集団社会になろうとしています。それからチケットの販売方法、そして慢性的な資金不足、劇団員の人数不足と演劇の創造とは関係のないところで各劇団とも四苦八苦しているのが現状のようです。しかし、それらの困難にもめげずに演劇の灯を消すまいと、新しい創作劇に取り組むなど、一生懸命に活動している様子が手にとるように伝わってきて、励まされる思いがしました。

以上、ざっとゼミナールを振り返ってみましたが、実行委員会としては、今回の「山口ゼミナール」は一応の成功を納めることができたのではないかと自負しております。

〝明治維新の長州で、これからの百年を語ろう〟と題した「やまぐちゼミナール」は、民俗芸能絵巻・交流会・北川鉄夫先生による「伝統芸能のはなし」・分散会と盛りだくさんの内容で、参加された皆さんも存分に楽しまれ又、語り合っていただけたことと思います。百年の未来に向って、今日、過去を掘り起して、今また新しい視点で見つめ直して、何かを摑み、感じとっていただけたならば、十分な成果はあったのではないかと思います。わずか二日間という短い期間でしたが、このゼミナールで得たものを、今後の演劇活動の肥やしにしていただければ幸いです。

それでは、最後に今回の第二十六回全リ演西会議「やまぐちゼミナール」を開催するにあたって、企画・準備等大変お世話になった諸劇団の皆さんに重ねてお礼を申し上げます。何かと不行届きな点もあったことと思いますが、参加して下さった皆さんご協力ありがとうございました。次回のゼミナールでお会いするのを楽しみにしております。お元気で。

（おわり）

○

○

〈新刊〉
北国に生きるものたちの
青年演劇脚本集
〈内容〉
CQ・CQ・CQ　石上　慎
十七歳の高校生の少女がハムの電波にのってベトナムへ——。
ゴシブシェ　板緑東助
北方少数民族オロッコを夏休みの研究課題にとりくんだ高校三年生の竜太。彼自身がオロッコ族であった。
明日にあるもの　田中　誠
明日の農村青年の生きる道を探る。
テ　オ　堤　伸一
ゴッホの苦難の生涯を支えた弟テオの限りないやさしさ。
俺の勲章　武藤一仁
人間の価値観を大都会の東京と北辺の自然の大地との比較でとらえる。
発行所　オホーツク書房
定　価　5分冊一組　九五〇円
口座名　北海道拓殖銀行北見支店
九四五－六三六

●特集……東・西総会とゼミナール

「足もとを見つめよう」から始まって……

――87東会議総会の報告――

丸子礼二

(1)

87年度東会議総会は8月22・23の両日、戸塚駅前の「サンライフ横浜」で行われた。

今年はゼミナールなしの議論だけの総会である。東日本全体のゼミとブロックゼミを一年交替で持つことになっているが、東西合同の全国ゼミナールが5年毎に入って来るので、この三年、秩父、湯の山（全国）、雨畑と続いて、四年目の今年がゼミなしになったのだが、やはり、一寸寂しい。

昨年の総会では、議案書の情勢の部分で討議がもつれてしまった。今年は城谷事務局次長の原案をもとに、議長団で慎重に検討を行った。労働者の置かれているきびしい状況を中心とした筋の通ったものにはなったが、あまりまともすぎて、議論が煮えなくなる心配もあったのである。

出席は26集団＋萩坂編集長で40名、議長席には石るつの境野、仙台小劇場の石垣両氏がついた。（以下敬称を略します）

こばやし議長は基調報告で〝韓国では学生が燃えたが、日本の若者は非政治化が、どんどん進んでいる……金と技術は生産費・人件費の上らない所へ逃げて、産業空洞化が進み……豊かさの鑑賞から保守化が生れ、変革のエネルギーは出にくい……しかし創作は最近又増えつつあり、地域の要求に応えたイベント、憲法を扱った「リンゴの木」等が成功している。…混迷しつつ過去から何かを探ろうとする所に観客の関心があり、地域特にその歴史をどうつかむか、各集団が真剣に考えている…〟と、深刻な状況と全国を一つに括れない多様化の中での創造の発展の困難を語った。内容的には、この数年同じことが語られているようにも思われるが、議案書のような形でなく、直接語られれば、未来をさぐる困難さへの想いは、よく伝わって来る。

続いて、新しく加盟した劇団「土くれ」が紹介され、満場の拍手で承認された。関東ブロックでは東京働く者の演劇祭に十数年前から参加していて、今年五月に創立二十年を迎えたということである。代表の本川国雄氏が挨拶をしたが、団員30名近く、やる気充分で、〝期待されるような中味は、今全り演には無いんですよ〟と言われまして、それでも入ったという……。

(2)

――さて、討議開始だが、しばらくの間、主な発言の要旨を並べて見ようと思う。

城谷（京浜）　議案書に書いたことは、わかり切っているつもりで、わかっていない事が多すぎる。大合理化の中で職場をやめたり劇団をやめたりする人が多いのではないか。足元を見つめ直した所から新しい集団づくりを始めなければダメなんじゃないか…日本鋼管等では、下請の企業を廻って、社員の出向を売りつけている。近代化の行きつく先は人身売買ですよ。自分の知らない所で、意志と関わりなく売られている。全

リ演集団はまず自分の足元を見つめ直す必要がある。地域に根ざす、というのは今日では全く新しい意味を持っている。出口のない状況を何処かで破ろうとしている。そこから新しい劇団、新しい観客が出来てくるんじゃないか。

久保田（名古屋）　この夏「精霊流し」を公演したが、稽古は午後8時から。八時間働いて、八時間眠って、あとは…というと、〝そんな馬鹿な〟の声が返って来る。

栗木（名芸）　うちは男22女23、稽古に来られるのは半数以下、古手の団員が創造的に燃えて来ない。研究生も定着しない。男性がいない…しかも職場がきびしい…議案書に書かれている（人が集まらず稽古が七時半、八時になっても始められないという所）ことがよくわかります。

中沢（京浜）　月に百時間残業やる職場に居ると自分だけ早く帰れないよ、鉄材運びやって夜の稽古なんて辛いし…遅れて来るのが多いと全体がギスギスして来る。人間関係が出来なくなるんだ。こりゃ、団内で解決できることじゃない、それじゃ、方々でたたかっている仲間に呼びかけて芝居を一本作って見たら。で、「ジョー・ヒル」に取り組んだ。呼びかけたら、争議団、国鉄、鋼管、小さい労組から60人もワーッと来た。皆、同じような事を考えている。人間を結びつけ、心がふれあっていくことが、日常のたたかいの中でどうしても必要なんだな。

ところが、劇団員は7時に仲々揃わない、三分の一なら多い方、一人か二人なんて時もある。彼等は6時半から来て待っている。…やっぱりみずみずしい創造の現場を作れば可能性があるんじゃないか。そういう人間達を相手にすると劇団員の弱さがはっきりして来る……。

(3)

――きびしい状況をどう破るか、話は企画のあり方へむかっていった。

高橋（だいこん座）　「シェルター」をやると4人、あとは来ない。これは駄目だというんで「かげの砦」「野麦峠」「勲章の川」…団員が10人位で出演者が20人、10人足りない。友達を無理矢理連れて来る。だんだん、誰が団員かよくわからんようになって（笑）団費は月三百円、創立12年以来、ちゃんと払っている人はあまり定かでない……稽古場は只だし、出費はないし、全り演の会費くらいなもので…。（笑）公演はお祭りなのだ。お祭りが成功すれば、誰が団員かさだかでなくてもいいじゃないか。部にも入らずブラブラしてた高校生が生き生きとする。文化にふれることだってすばらしいじゃないか。

工藤（展楽座）　（東会議ニュースを出し）うちはこれに何も書いてないけど（笑）今年は上演がなかったんで…でも仲間はアッケラカンとして、今年は10周年だけど、来年がんばろうか、という具合です。先程の大企業のしわ寄せは田舎には二重に来るんです。子会社に名簿持って来るのはうちの地域では当り前になっている。一万五千人の小さな町で円高倒産が七、八十軒もあるし、黙っていると住民が仙台や東京へ行ってしまう、芝居よりそっちの方が大変なんで…そんな中で「芝浜」を六ケ所でやって満員にしたんです。

どうも、演劇会議やニュースを見ると、下の方は忘れられているんじゃないか、「弱小劇団」と客観的に言われると…大きけりゃいいのか、〝弱大劇団〟だってあるんじゃないか（爆笑）展楽座だって地域で成立っているじゃないか。そういう地域の状況を拾ってつないで行く仕事をやったら、

全リ演も意義があるんじゃないか。

藤原（支木）　どうも奥羽ブロックはレポートよこす劇団ないもんで…（笑）電話すると「アイ…」「アイ…」って返事はするけんど…（笑）ええと…やっぱどこも同じだのって感じで…7時に来るのは演出と助手だけ、7時15分に浩平（藤原）、8時半にやれる所からやろうか…で9時10時でも団員が来て…11時すぎると、明日も朝が早いし、もう寝たいなァと…（笑）ここ、何とかなんねえのかな…電気会社にいるのは「ハッスル月間で僕は五百万売らねば今月一杯でやめねばならん」国労にいて靴の販売に廻されて、8時過ぎないと帰れなかったり…11時にやっと十五、六人が揃う、それでも若い連中にまかせると話だけはいい。〝創作の芝居つくって札幌へ行こう〟なんて…「ごんべえ太鼓」もう五、六回やっていて赤字は埋まるし、地域とのかかわりも…

加藤（すがお）　「夏の夜空に」―桑名空襲の記録―は、25周年の劇団の存在価値を明らかにしようという意気込みで、パーティの時、本がまだないのに企画だけ発表してしまいました。空襲を語る会、平和委員会、等々沢山の団体が参加して、人は集っても本がないのでやることがない（笑）結局三人が合作して5月頃台本らしくなり本番は7月11日、桑名戦争を語る会の戦争展をデパートで展示したり、劇場のロビーでもやりました。団員十数名なのに舞台には百人以上出て、石取り祭の山車まで舞台に出してもらう…あれの許可はなかなか出ないんです。80万桑名市民の話題になることが出来ました。稽古は8時、8時半ぐらいからで、日曜もやるけど、全員はとても……。

丸子（演集）　私も見に行ったけど、ロビーはまるで夏祭り、終演後も戦争記念「すいとん」の店や展示で、人がいつまでも帰らない。反省会でも協力した高校生達は、大きな仕事を果した感動で泣いていました…。

(4)

――以上の話を受けて、問題提起があった。

塚越（埼芸）　城谷氏からの〝足元を…〟という意見は大切であると思う。全リ演は来年が25周年だが、そのテーマとして〝足元を見つめる〟ことをやったらどうか。25周年に対して中味のある総括のイベントをやったらどうか。

――議長団の課題として受けとめることになり、更に各集団の現況とあわせて企画についての討議を続けたが、やはり話題はレパートリーの方へ移って行った。

鈴木（群馬中芸）　25周年として「今日私はリンゴの木を植える」をやって成功しました。うちは学校公演が多いのですが、この頃は高文協というのが出来て、そっちから流れて来る。学校観賞行事も〝強化〟が行われつつあります。又、学校公演に力を入れていると地域の人達とのつながりが稀薄になるという問題があるので、毎年稽古場上演を10日～20日やることにしています。その中から「未来劇場」を建設しようという運動がはじまり、もう具体化しています。

山口（はぐるま）　本当に、どこも同じようだと感じました。「リンゴの木…」は岐阜でもやり、体罰で高校生が死亡した事件等も織りこんで、成功、やってよかったなと思っています。

森（四日市）　今年還暦になり、俺より年寄りがいなくなって来た。もうこれが最後だなと思って、記念に一人芝居を作ったら、あんなにマスコミに追いまくられて、それがもとで大量に脱退が出てしまって…そのあと、亜矢ちゃんの〝一リットルの涙〟…これを見た非行生徒が生活が変った、というので、その学校でやり、豊橋（愛知県）迄やりに行くことになって20人程の実行委員が15回の打合せに15回とも来てくれた…。四日市も25周年を記念して、今後は創作劇を中心にすえて行こうと思っている。俺はね、一九七〇年に、ここで〝地域に根を下ろし、書いてやって行くのが理想だ〟と教わった。その通り、生きてるかぎりやれる。書ける人も見つけたし…今迄人数にあわせて本を探したが、創作だと、人数にあわせて人が集ってくれる…。

工藤（展楽座）　うちみたいな小さいサークルだと、何かやりたいものがないだろうかと思っても、本が手に入らない。失礼だが、大きい所では、全員がこの作品やりたいと思ってやっているのだろうか？やらなきゃ潰れるからやむなく（笑）やっている中でいろいろ発見していくのじゃないだろうか。うちでは創作の時が一番よかったが、だけど書くことがそう簡単にいかないし…ブロックあたりで書かせる方法論がないものか。

議長　…そうすると、劇団はやりたいものを見つけた時生き生きするのかな…やりたい作品がなくてもやっているのでしょうか？

島田（青年劇場）　皆がやりたい本というのは…うちの演出陣だとそう出てこない。青年劇場は10本ぐらいで動いているので…皆が燃えるレパートリーを探すのは本当に難しい。飯沢作品でも「夜の笑い」ならそうだったが…意義のある作品なら燃えられるが、燃える部分と冷やかな部分が出来たりします。若い人がやりたいレパートリーを劇団のレパートリーにするのは、古い人がやりたいのをするのと同じ困難さがある。結局三本立てくらいになって…企画を色々立てなければならないし、活動量が多くなるし…何十本の中から三本選んで全員にかけても三つに分れて大変な議論になるんです。こりゃ、〝弱大劇団〟かな。（爆笑）

村岡（銅鑼）　（「燃える雪」の創作体験について）大変でした。原作の「村長ありき」を読んで年寄りが感動し（笑）団内に回して、若い人が感動し、行きわたるのに大変な日数と手数がかかりました。一年半かかって、初稿から決定稿まで行き、稽古の段階で三時間くらいかかるので、どうするのか、又時間をかけて…雪に閉ざされた村への現地調査から、若い人も積極的に取り組んでいます。やはり、いつもアンテナを張って皆の物にして行くことです。合意を得ないで一部の者で決めると、困難になる所で背中を向ける者も出て来る……。

早川（銅鑼）　皆が燃えると演出はプレッシャーを受けてね、最初に燃えただけでどんどん行くとうまく行かないこともある。あの本は芝居になるというより劇団の体質改善のために回したんだ。それが本にしようということになった。現地の人とふれたことが大きいね、行った人は変わるし、役が貰いたい俳優は乗り出して来るし、高度成長と全く逆のあきらめムードの村を、雪を克服して生き返らせた話、これは劇団にとっては何だろう……。

(5)

話はつきないのだが、発言の列挙はこの位にして、以下の討議内容をごく簡単にまとめてみると……

●十数名の実動劇団員のうち四名が国鉄で困難を抱えつつ公演は続けています（上野市民劇場）。

●創作はやっていないが、既成作品でも自分達とつながる問題を取り上げ、観客にどう伝えるかを考えて行けばよい。

●目的意識を持った劇団は少くなっているのではないか。歴史の古い人は変わりなく

やれているのか。
●若い人はとんでもない作品をやりたがる。主観の中でやりたいと思ってしまう。集団をリードする人の姿勢が大切だ。
●昔はお客さん千人が一つの基準だったが今はとても考えられない。黒さんにはげまされた時代もあったが、もう自分達なりの理屈を持たないかん所に来ているのだろう。
●名演会館フェスティバルに20劇団が参加し、一方ではふじた氏や木村氏が演出してグループを作る。教師が年一回反戦劇をやる平演会が出来る。年二回公演だけの東リ演劇団は存在がはっきりしない、専門家ともいえないし…
●東リ演結成時の拠点劇団を作ろうという気持は色あせた。変革の演劇をいいつづけ得るのか?

＜ブロック活動について＞

●遊びと交流中心でブロックゼミは定着している。朝まで飲んだり…（東北・奥羽）
●中部では集って何かするのは各集団個々の条件で難しい。最大で80人くらい、ソフトボールやバレーボールやったり……
●山静は8月に、青年劇場から講師を招いてやった。風呂に入り、飲んで盛り上った。
●関東は毎月ブロック会議を持ち活潑にやっている。予算は超過しているけど…ブロックゼミは藤原町で群馬中芸の「ブレーメンの音楽隊」を子供達と一緒に見て、分科会もわんわん議論をやった。ブロック合同公演をやろうという話も進行中……

(6)

ブロック報告をかねて、来年は北海道でゼミナールをやることもあり、劇団さっぽろの林中直樹が報告を行なった……。

…北海道は日本資本主義の縮図です。炭坑の閉山が相次ぎ、新日鉄、日鋼室蘭もダメ、職を求めて地域を離れる人が多数で、…24集団が16集団に減りました。もう、やる奴はハラをくくってやるしかないのです。ブロック三集団はお互に見て交流しようと話しあっています。さて、来年こそは大いに交流したい。14年前のあの熱気にあふれたゼミのことを知らない世代が多くなっています。しかし、三月に決定して、やろうという動きになって、こばやしさんにも来てもらいました…（演劇会議66号にリポートあり）

討議にひきつづいて観客動員の困難な状況が語られたところで、後藤陽吉議長の次の発言が丁度うまいまとめになった。

後藤（青年劇場）　歴史的な経済成長の時代から、今日の支配の完成までに行われた分断政策の為に、集団が存在し続けるだけで大変な時代になっています。現代は、レパートリーに全員が燃えるのは大変なことで、苦労して売っている芝居が、今日の状況にどういう意味があるか、そして劇団員の創造意欲を果たせるか。この為にレパ決定のぼう大な時間と苦労を乗り越えなきゃならない。しかし、意見を出す人に不信を抱いたら負けですよ。不信と、攻撃によるあきらめの時代、多数のテーゼが一致すると思えないが、それだけの苦労はしなきゃならない。うちの劇団でも苦斗の連続ですよ。それぞれが複雑な斗争をしなければいけない時代なんです……。

…議長が「では、続きは交流会の場で…」と引き取って、一日の討議は終った。続いての延々たる〝交流〟はどうだったのか、どうも記録は出来ない……

(7)

二日目は、前日の補足討論、会計報告、演劇会議についてと進んだが、長くなったので省略して、方針について出た意見に加える。

・ブロック活動に対し、講師のリストを作って欲しい。余り偉い人でなくてよいから。又、謝礼の妥当な額を教えてくれるとよい。
・リアリズム演劇運動そのものについての基本的評価を行うべきだ。25周年の節目にあたり、リアリズム演劇の理論強化を！東リ演の呼びかけの〝しおり〟を作り直そう。
・各集団ごとの何をやって行くかについて総括集を作れないか。
・萩坂自伝をまともに考えて欲しい。又、議長団＋大橋、千田といった形の紙上討論を展開できないか。
・創作劇は多くなったが、作品が今日の状況をとらえているか、書き手同志の話しあいがない。作者は孤独な作業になっている。多様になっている今日的な表現様式はどうなっているか、作者は無防備になっている感がする。リアリズムについて話しあう場があれば、といつも思っている。（真剣に考えます、と議長団は答えた）
・一つの公演をブロックの責任のある人々が見て話しあうことが必要である。劇評はアンケートの集計とは違うのだ。
・各地で文化基金づくりが進行し出している。地元の文化を無視させないように働きかけるべきである。

……以上の声もあわせて、87年度の活動方針は次の様に決定された。

。活動方針

(1)交流を深め、力量を高めよう。
(2)講師の派遣による学習活動。
(3)ブロック活動を活発に。
(4)活動の動脈「演劇会議」を充実させ、拡げよう。
(5)文化行政の改革をめざして。
(6)北海道演劇フェスティバルを成功させよう。
(7)全リ演創立25周年にむけてリアリズム演劇の課題を更に深めよう。

…詳しくは東会議ニュースを見て欲しい。

(7)はこの総会で追加された。

北海道演劇フェスティバルについては総会として決議が行われた。（後出）

役員については全員留任となり、ブロック運営委員も一部未定以外は留任となった。

＜東会議役員＞

。議長団　こばやしひろし
　　後藤陽吉
　　中沢研郎
　　丸子礼二
。事務局長　こばやしひろし
。同次長　城谷護
。「演劇会議」編集長　萩坂桃彦

＜ブロック運営委員＞

北海道　林中直樹（さっぽろ）
奥羽　藤原浩平（支木）
東北　石垣政浩（仙台小劇場）
関東　境野修次（石るつ）
〃　未定　（東京芸術座）
山静　未定
中部　未定

中沢議長の閉会挨拶は…〝ばらばらにされている現状に対し、方針の(7)の追加にも見られる様に、我々の論議が集約されたと見たい。…きめられた事を創造的にエネルギッシュに展開していくことを誓って終りとします〟

―こうして〝議論ばっかりの総会〟は無事終了した。御つかれ様でした。成果があったかどうかは、これからの問題になるでしょう。

全リ演東会議総会　決議

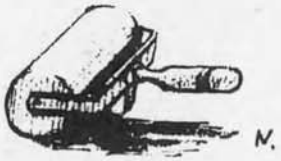
きびしい状況におかれている北海道で、再び演劇フェスティバルを開催することは、全リ演・道演集にとって以下のような大きな意義を持つ。

今、両集団には、一九七三年に、札幌市・真駒内で開かれた第一回のフェスティバルの

成功と熱気を体験した人たちが少くなっている。両集団が創造の現場で、とりわけ創作劇を中心として、交流する事は、今日の多様化している演劇状況に与える影響は大きい。

又、両集団の存在を、広く札幌市民、道民にアッピールしたい。両集団は、この演劇フェスティバルの成功に向けて全力をつくす。

一九八七年八月二十三日



＜トピック＞

劇団はぐるまの快挙

11月20日から22日にかけて、岐阜市文化センターで上演された劇団はぐるまの第七十六回公演「紅鼻子（ボンビーズ）」は破格の話題となった。連日新聞紙上を賑わし、公演のどの日も満席となって、岐阜市民を湧かした。

作者が中国台湾省の姚一葦（ヤオイウエイ）（国立芸術学院教授）、演出スタッフが中国青年芸術劇院の陳顒（チェンヨン）、于黛琴（ユイタイチン）というトップクラスを招き、それにこばやしひろしが加わるという、言ってみれば、台、中、日の、一堂に会した殆んど初めての演劇祭典が実現したのである。

芝居の中身は、様々の困難に遭遇しているいろいろな階層の人間が、サーカスのピエロ紅鼻子によって救われるが、過ぎてみれば忘れられてしまうという悲しい話である。どこか教訓めいてはいるが、作劇はうまい。嵐の一夜、ホテルに泊り合わせた人々とサーカス一座とでかもし出す趣向の面白さは、単に一座の実演のパレードにとどまらない。

この芝居を通して語りかける、人間の価値とは、しあわせとは何かという命題は、社会主義の中国であろうが資本主義の日本であろうが、それを外しては成り立たぬでしょうという設問がここにはある。何よりも、それを芝居でおもしろく見せようという熱い思いが陳顒演出の中国青年芸術院の舞台にあり、五年前、北京でそれを観て感動し、何とかこれを日本でも上演したいと考えたこばやしひろしにあって、実現した。

もとよりそれは考えたら直ちにできるというものではない。五年の歳月に見合った劇団はぐるまの辛抱づよい積みかさねがあり、数度にわたるスタッフの訪中、翻訳をしたいずみ凛、衣裳を受け持った加納豊美の二年にわたる北京留学も大きな布石となった。

ぼくは初日に観たがやはり感動した。カーテンコールで中国の演劇人たちがこばやしひろしの両手を捧げて舞台の成功のよろこびをわかち合った姿は、観客もそれに唱和せずにはいられない。拍手は二度三度のコールを求めて鳴り止まらなかった。（桃）

●特集……東・西総会とゼミナール

'87関東ブロックゼミナールの報告

——構成劇団の活動に焦点をあてて——

葛西和雄（青年劇場）

関東ブロックの活動がいま一つひろがらない、という問題意識があり、年中行事の新年交流会の企画を話し合う中、世仁下乃一座の岡安さんから群馬中芸のめざましい活動について報告があった。地域に根付き、群馬県下での公演活動を旺盛に取り組んでいる群馬中芸の話を聞こうということが、テーマの一つとなったのが昨年秋。僕自身は参加できなかったのだが、この新年交流会で、初めて群馬中芸とふれあったという人が、恐らく殆んどではなかっただろうか。隔月のブロック事務局会議に、神奈川、埼玉、東京の広域から集まるのがようやくで、群馬はやはり遠い印象があり、今迄何か催しても無理だろうというのが本音ではなかったか。しかし、この新年交流会に中村欽一さんを講師として招き、群馬中芸がぐんと近い存在になったのではないだろうか。これを機会に事務局から代表を派遣し、サマーゼミナールを群馬中芸の地元で行うことを相談、準備が始まった。ブロックの構成劇団全てが参加できる条件を作り出す大切さを考えさせられるプロセスである。

「やけあとのブレーメン楽団」

さて、今年の関東ブロックサマーゼミナールは群馬中芸のお膝元、群馬県水上温泉境、葉留日野山荘を中心に行なわれた。ゼミのメインはなんといっても群馬中芸のモデル上演「やけあとのブレーメン楽団」である。準備途中、スタッフとのスケジュール調整が折り合わず一時は危ぶまれたが、ブロック事務局長境野さんの粘りと劇団の努力で実現できたものである。

会場は藤原町の山の中、花々に囲まれた藤原小学校体育館。生徒数70人余りの小さな学校の体育館のフロアー三分の一、平舞台に装置がセットされていた。両サイド中空にゆったりとスクリーンが吊られ、左右共に同じスライドが映し出される。（目に優しい平仮名でその場の状況が説明されるのだ。）ほぼ、舞台の間口で三段の雛壇、そしてホリゾントと簡潔な装置だが、みそはケコミ。暗転時に仄明るい灯がともり、影絵風に焚火を表したり、割れ目から俳優が出入りしたりと無駄がない。

主催者を代表して議長団の中沢さん、地元からは校長先生のご挨拶。かぶりつきには、

「ブレーメン楽団」の上演光景

夏休みに入ったばかりの藤原小学校の生徒共百五十人位の客席で、いよいよ開幕である。

戦後の焼け跡で身寄りのない子ども達が、屑鉄を売っては懸命に生きているが、朝鮮戦争によって鉄が高騰し、彼等の仕事場は、資本家によって閉鎖され、収入の無くなった子ども達に亀裂が生じてくる。日系二世の米兵サージは、そんな彼等を暖く見守り、助け、何より、音楽という心の糧をプレゼントする。屑鉄や廃材を利用して作った楽器で彼等は高らかに演奏するが、サージはそんな彼等を残し朝鮮へと去って行く――――。

低学年には若干難しいかなと思っていたが子ども達は実によく鑑賞していたし、戦中派の先輩たちをはじめ、若者にいたるまで目頭を押さえる風景も見られ、大好評であった。

懐しい木造校舎、葉留日野山荘

劇もクライマックスにさしかかった時、体育館の天井がザーッと鳴った。雨である。僕等も学校公演の体育館公演で、暑さと共に嫌なのが雨である。屋根のつくりによっては、まるで太鼓を叩くが如く、雨音が大きく共鳴し科白(せりふ)をかき消してしまうこともある。余程の時はマイクで拾うなどの手を使うが、雨によって観客が舞台から離れてしまうか、それとも体中を眼や耳にして集中してくれるか、正にのるかそるかの大勝負である。後者の場合の疲労は快いものである。

この日幸いにして科白は聞こえ続け、勿論観客も釘付けにされていた。が、事務局は心中穏かではなかった。この後、葉留日野山荘へ会場を移しての大交流会が予定されており、野外ステージ、売店等々、全て準備済みだった。照明や音響は大丈夫だろうか、水留りができていないか、雨は上がるか……。「やけあとのブレーメン楽団」のモデル上演を成功裡に終え、次の会場葉留日野山荘へと向かったのである。

関越自動車道水上インターを降りて30分余り、東京から二時間強で着くという便利な所に葉留日野山荘はあった。手前には日本最大の露天風呂のある宝川温泉、先には尾瀬と、実に山深い自然に囲まれた別天地である。以前、このあたりで林業が盛んだった時、そこに働く人々の子弟が通っていた学校が廃校となり、そこを譲り受けて山荘に作りかえたそうである。昔の木造の校舎がそのまま残されている。勿論、中は造り変えられ、大きな教室にベッドがズラリと並んだ一階と、清潔な和室作りの二階、離れもある。二百名以上収容可能で、その日は百名余りの学童保育関係の親子が同宿していた。

「権兵衛太鼓」に魅せられた嵐の夜

さて、旧校庭に設営された野外ステージには無事あかりが灯りさて開幕……したのだが雨は降り止まず、傘をさして舞台を遠巻きにした人達と、校舎の軒下に雨宿りする人達とに別れ、いやはやどうなるものかと気を揉んだ。漸く小降りとなり、まずは景気づけの飲み喰いタイム。舞台下手から、群馬中芸の出店は、なんと無料の焼肉、うどんのコーナー。未来劇場建設カンパがミソである。その隣、京浜協同は夏の風物詩、カキ氷。あまりの涼しさに寄りつく人影もなく、雨があがって小学生が買いに来た時は、飛んで喜んだそうだ。下手には、埼芸の大酒店。ビール、カクテルハイ等々、バラエティー豊かで、元気のいいかけ声。品物は完売したが儲けがなかったというオチがつく。隣には展望小島さんの乾物屋さん。売れゆきはどうでしたか。

カッパを羽織った京浜の隅広さんの若々しい司会で大交流会の始まり。集団紹介では、先程熱演し劇団員総参加の群馬中芸、今総会で全リ演加盟となった土くれの若々しい面々が盛んな拍手を受けた。

雨の中、京浜の「権兵衛太鼓」

時折激しく降り注ぐ雨の間隙をぬってアトラクションが進められたが、圧巻は、何といっても京浜の権兵衛太鼓だろう。折悪しく強まる雨のもと、飛び散るしぶきをものともせず、延々三〇分間の大熱演に、同宿のお客が一階の窓に鈴なりになり、山荘の御主人が雨の中、見物人に傘を配ってくださり、それでもみんな濡れながら、最後まで魅了された。権兵衛太鼓はかなり知られたレパートリーとのことだったが僕や劇団の連中は初めてで、そのひょうきんで力強い演技にすっかりみせられた。

フィナーレは例によって、輪になっての盆踊り。郡上音頭に続いて初登場、動物音頭。犬や猫、鶏の身振りをまじえた滑稽な仕草を後藤、中沢両議長が舞台の上で可愛らしく踊っていた。

東京芸術座大奮戦

高原であるからして昼は涼しい。まして夜に雨に打たれてかなり冷えてしまった。閉会と同時に、雨はバケツの底を破った様に降ってくる。これで、あとは部屋で暖く……といきたいところだが、この日、照明その他を受けもった東京芸術座、明日は稽古場での発表会があり、すぐにバラして出発しなければならない。忙しい中でのスタッフ協力だけでも有難いのにこの雨の中、しかも野外でのバラしは凄じいものだった。SCRは吹きこむ雨に濡れコードは泥だらけ、イントレの上での危険な作業……。若い参加者達は殆どこの作業を引き受け、大声で怒鳴り合いながらも、さすが全リ演の底力を感じさせるチームワークで無事荷積みを終了。勿論全員びしょ濡れ。間もなく出発した東京芸術座の皆さん、本当にお疲れ様でした。

冷えきった体を、湯量豊富なやさしいお湯に沈め、やっとひと息。そして何より中から暖めるのが秘訣。例の如く朝まであかした人もいた一夜でした。

膝つきあわせて相手を知りあうこと

翌朝は、クラクラする頭で朝食をすませ、分科会チューターの打ち合わせ、そして全体集会。群馬文団連副議長の江口宏さんから、群馬における文化活動の話を聞かせていただき、各分科会に分かれた。

今回は分科会のテーマを決めず、今困難を抱えつつも演劇活動に関わる意味―いわば原点を探る話しをということで各チューターに一任された。この方法が好評で、各分科会とも、膝付き合わせ、和かな中に密度の濃い話し合いがされた様子。むしろ時間不足という意見も出された。特徴的な報告を二、三。

仕事が厳しくなり稽古を確保するのが難しいという中で、会社の不当な配転、職場での

嫌がらせに耐え、闘いつつ劇団活動に参加しているというTさんとの出合いで、これまでの自分の世界から一挙に外に目を見開かされた、こんな素晴らしい人達が、一緒に芝居を作っているんだと、感動的に報告してくれた群馬中芸のAさん。

面をつけていても、演技者の心情が手にとるように表現されていた権兵衛太鼓に大変感動したというBさん。

演劇を通して観客である子供たちが大きく変化、成長し、ある時は、生命を長らえる役割まで果たすという群馬中芸の実践の報告に衝撃を受けたというCさん。など、など。

雨あがりの爽かな校庭での全体集会も又和かに進められ、事務局からの総参加者81名という報告で成功が確認された。最後に、後藤議長が閉会の挨拶に立ち、大変な雨の中で示された団結の力が、売上税を廃案に追いこんだ成果の如く、今後の全リ演運動の発展の基礎であり、これからの困難に、力をあわせ立ち向かっていこうとよびかけた。又、会場を提供してくださった山荘の皆さんへの熱い感謝が述べられた。

未来劇場建設の成功を祈って

今年集まったアンケートでは殆どの人が参加して良かったと記しており、ゼミナールが成功したことは確認できた。なんといってもあのドシャ降りの雨に示された集団のエネルギーに接しての感動が多く寄せられ、思わぬ自然の演出に脱帽。又、群馬中芸のモデル上演の感想も多く、大変好評であったことが覗える。

全リ演運動は確かに困難に直面しているがどの集団もそれに立ち向かい奮闘し、その中から知恵も方法も生み出している。関東ブロック劇団間の交流が、この困難な状況下で、大きな励みとなり活力となるのだということが、今回のゼミに参加しての収穫である。今後観劇交流を始め、日常的な連りが追求されれば、更に全リ演運動の有効性が発揮されていくことだろう。

最後に、今回、劇団総力をあげて取り組んで下さった群馬中芸の皆さんに感謝申し上げるとともに、未来劇場の建設が成功裡に完遂されるよう、加盟劇団の多くが物心両面で協力されることを切望して、報告といたします。

（了）

全リ演ゼミのこと、いろいろ

後閑晴美

その日の舞台は確かにいつもと違ったものになりました。観客によって、こうも芝居が変わるものかと改めて実感したり、「あんまりイヤなお客でもないや」とほっとしたり、私もそう感じる位なのだから、共演者達もそれはヒシと伝わっている様で、この夜の一回の公演は十回分に値する位の内容になったのではないかと思いました。とは言っても自分の芝居に満足などできるハズもなく、芝居を観ていただいた方に良かったなどと声をかけられる、もう穴に入りたい位おろおろ赤面するのでありました。全く見ず知らずの方に「あの役は、本当にあなたにピッタリだ」と声をかけられ、又一方では、「君があの役をやったとは思えない」と言われたり。あんな演技全然ダメですと、私がいつもの調子で答えていれば、「君は芝居が嫌いなのか」と真剣に問われたり。

「ああ、ここには本当に芝居好きの人が集まっているんだなあ。」

（これは群馬中芸機関誌「梓」31号から抜すい転載です）

劇団通信

劇団京芸

◇8月21～22日の湯田温泉での西総会は、公演直前のため、藤沢も演出で出席出来ず、やっと小生一人が出席。ゼミには参加不能で申しわけないやら残念やら。総会では春の『浮標』上演と話題にしてもらったが、当方からは心情的な発言しか出来ず、特に栗原さんから誌上の劇評を発展させた突込んだ示標を出していただいたにも拘わらず、充分受けとめた論議が出来ず、誌面をかりておわびしたい―あと五年待って下さい。あそこの何かを確かめ確かめやってゆきたいと思っています。

◇『陽気な地獄破り』は、引続き好評続演中。おやこ劇場高学年公演で、久々の東北公演を福島、盛岡で実現出来た。夏にはここ数年の懸案だった、トルストイ原作の『ホルストメール』に挑戦。先にこれを上演された仙台小劇場のお世話で盛岡の牧場を見学させていただいたり、同じく最近上演された京浜協同劇団から数々の資料を見せていただいたり、世話になった。『浮標』が一つの契機となって演出部の岡井直道はじめ数人の劇団員が去ったが、外から強力な助演を得、またスタッフ面には元劇団員の方を中心に献身的な協力をいただいて、真夏のけいこは盛り上った。けいこ期間の不足を熱いもので補った〈創造〉と言えると思うが、『陽気な―』に続いての心と肉体全開の芝居づくり、開かれた表現のアンサンブルを開拓するエネルギーは健在だ。今秋からの中学・高校での上演で真価を問われることとなる。勿論けいこは厳しく重ねられなければならない。（小沢）

（612　京都市伏見区納所北城堀31－18　〇七五－六三一－二六〇九）

劇団息吹

〈66号を読んでの横山幸世さんからのおたよりをはじめに紹介しておきます―編集部〉

残暑おみまい申し上げます。第66号入手、「誌上座談会」興味深く拝読いたしました。劇団息吹にも様々な地域からの要求があります。それは先ず自分たちの問題を劇化してほしいというものであり、演劇を通じて社会へ訴えたいというものです。息吹は弱小劇団のため、作者に、主に瀬戸洋氏をたのみ、出演者も各団体から出るというような形で、国家秘密法、国鉄問題（河内法廷）、語りつぐ戦争ドキュメント（八尾戦争展）等々上演しています。しかもこれらの上演は、現在では増える傾向にあり、観客数は本公演よりも多いというのが現状です。演劇が観客との相互作用で成り立つ芸術であるなら、これらの集会での上演も演劇創造として認められなければならないのではないかと思います。劇団の自主公演が年々観客の減少にあるのは単にオルグ力の不足だけではなく、観客の要求の反映が困難になっているからではないかと思います。観客が自分達の要求を各種の集会での上演に期待し熱い視線を送るのに対して、劇団の意識との間に遊離があるような気がしてなりません。各種実行委・集会での劇上演は単に本公演の観客がふえ、劇団員がふえるという以上に沢山の作品を生み出す一つの土台であり親客が演劇にのぞむ一種の要求の表出だと思います。この座談会は非常にタイムリーだと思いますが、これをキッカケに、もう一歩つっ込んだものが出ることを期待しています。

（いつも城谷さんの論文は劇団で話題になる素晴らしいテーマだと思います）

末筆ですが、大岡さんの論文の完結おめでとうございます。是非一冊の本にして下さい。

× ×

〈追加・劇団息吹からの通信〉

いつもの通り忙しき毎日。10月24日、原爆国際法定、参加。11月19日、やお（八尾）文懇パフォーマンス出演。これらと平行しつつ毎日のように、秋のけいこ場公演のケイコ、ケイコ、ケイコ!!

秋公演は次のとおり。

『仕掛花火』 岡安伸治作、木田昌秀演出

日程 11月28日（土）（2・30 7・00）
29日（日）（2・00 4・30）
30日（月）（ 7・45）
12月1日（火）（ 7・45）
5日（土）（2・30 7・00）
6日（日）（2・00 4・30）

場所 かわら小劇場（劇団息吹けいこ場）

×

からだが三つくらいほしいと、団員だれもが思っているはず。

（578 東大阪市中野二二四―一四 〇七二九―六四―四四四一）

世仁下乃一座

〈近況報告〉

八七年八月八日から二〇日までの松本市現代劇フェスティバルに参加。参加劇団は全国から一二劇団。松本青年会議所が中心になって開催。私達はテント会場のため、「たこられて・華」をとも思ったが、ひき続いて東北公演をひかえていたので「太平洋ベルトライン」を演目とした。参加劇団の顔ぶれは、鳥獣戯画に始まって転形劇場、東京ヴォードヴィルショー、転位21、岸田東事務所＋楽天団、プロジェクト・ナビ、ブリキの自発団等一くせも二くせもあるところばかり、受入側の混乱ぶりをみているだけでも楽しい。しかも八月一〇日は松本市恒例の大花火大会。テントの上に華が咲き、開演時間が二時間ずれるというおまけつきでした。何事も経験経験。

「ベルト」一〇月二三～二五日まで高崎演劇祭参加後、関西へ。一一月二七～一二月九日まで池袋、文芸座ル・ピリエにて新作「洞道のヒカリ虫」、作・演出岡安伸治。八八年三月三～五日、渋谷ジャン・ジャンにて、オリジナル作品日替り三本連続上演の三年目。「ネームリング」「たこられて・華」「洞道のヒカリ虫」。一週間後横浜で「ベルト」、そして小豆島演劇祭へ。

制作問合せはカトー。

（電話 〇三―八九二―六三六三）

（176 東京都練馬区豊玉中三―五―二一 三〇四 岡安方 〇三―九四八―七三三八）

テアトル・ハカタ

「おったった伊平治」岡部耕大作、八月一日初日十五日千秋楽、二九ステージ一五〇七名様をお迎えしての公演は、延登場人員五一名、黄海海上の大序から、満州、香港、シンガポール、日本人基地の大詰まで二幕四十五場という大作。南洋開発の先兵を自認した、村岡伊平治が、天皇陛下のおんためと、農村の娘を誘拐して娼婦に仕立てあげ、東南アジアに国立の娼婦館設立を企てた男の一代記、映画「女衒」の公開前という事もあり多くの話題を提供、伊平治役には研究生の伊藤明秀を抜擢し、女優陣総出演の華かでやがて哀しい舞台を創る事ができた。特に「バナナの叩き売り」「のぞきからくり」「救世軍説教」「正調オッペケペ」「浪華の仁義」等々で、それぞれのプロについての特訓は、芸の貯金として多いに役立った筈。

舞台にお化屋敷をつくっての怪談噺も夏の趣向だろうと、古い歌舞伎ケレン、カラクリの研究から出発した長崎民話「幽霊井戸」、

九州交響楽団の演奏で飾ったプロコイエフの「ピーターと狼」の二本立て特別公演も、役者に話芸えの関心を高めようと考えての企画である。

目下「おこんの初恋」北條秀司作品に、音楽を中村ブン、花柳美女月の振付で制作中。舞台に盆をしつらえての和風ミュージカル。団体での観劇申込みが八社、初日十五日前に四ステージの追加公演が決定している。

来年は創立十周年、初心にかえり再出発。

（812 福岡市博多区奈良屋町二―九 〇九二―二七一―五〇九〇）

（編集部からのおわび・前号所載の巻頭の舞台写真、テアトル・ハカタ「デッド・エンド」の演出者名を野尻敏彦さんにしましたが中村ジョーさんでしたので、おわびして訂正いたします。）

劇団津演

私たち劇団は移動公演と来春のアトリエ公演の稽古で毎日忙しく過しています。

8月9日（日）11日（火）の両日、津リージョンプラザオープン記念公演としてメーテルリンクの作品を西田久光が脚色し、「津演版・青い鳥87」を上演いたしました。上演に際しましてはなかなか厳しい評価もありましたが、一五〇〇名の観客が動員（客席六〇〇、三回公演）出来たということで一応成功の裡に幕を降ろす事ができました。

9月に入り「べっかんこおに」の移動（二年間続けている）公演も11月1日の公演で幕を閉じ、11月21日の公演を皮切りに「ゆきと鬼んべ」にバトンタッチする。

また来春1月15日（金）～17日（日）の3日間（5回公演）稽古場でアトリエ公演を行ないます。演目は「オールド・リフレイン」を予定しています。

（514 津市大門三一―二八 仏教会館内 〇五九二―二六―一〇八九）

だいこん座

九月十九日（土）に鶴岡市中央公民館ホールに於て、本田英郎作、成田邦彰演出「勲章の川」（二幕）を上演しました。相変らずの稽古不足で、新人も多く、どうなることかと思いましたが、大変に好評でした。

仙小と劇団山形からも観に来て下さり、「今までのだいこん座の公演で一番良かった」といわれ、お世辞でも気を良くしています。

しかし、戦争の加害責任という重いテーマを現代の若者にどう伝えるかはやっぱり大変な仕事でした。

まずなかなかチケットが売れないこと、学校教育では戦争のことがほとんど教えられていないこと、ネクラになりそうな内容をどうわかりやすくネアカに創っていくか、などが課題でした。今後も背のびをしながら観客の胸にひびく芸居をつくっていきたい。

劇団外のたくさんの人々の協力も力になりました。

（997 鶴岡市本町三―一九―一一高橋方 〇二三五―二四―一六八八）

劇団夜明け

9月の中部ブロックゼミのモデル上演「太平洋ベルトライン」は、やはり大変緊張しました。でも中津での2ステージの再上演とあわせ昨年秋からの今計14ステージ経験することが出来たことは大きな勉強でした。

終ってすぐ秋の稽古場公演「家族」の準備にかかり、フランスへの上演許可（青年劇場の土方与平さんにお世話になりました）の申請、訳者の小沢さんへの許可申請を行ないながら稽古に入りました。

しかし作品のむつかしさ、劇団員の結婚式の準備と稽古が厳しくなったとあわせて、訳者への上演料の支払い能力について問題を生じ、長い時間の討議の末、今秋の「家族」上

演を断念し、来秋に一年間延期することになりました。

今年は一月からこれ迄大変きついスケジュールで劇団をやってきましたので、少しの期間、多くの芝居を観たり、88年の計画、レパ選びを含めて討議したり、稽古場、倉庫の改修、整理などに時間をとろうと全員の気持ちが一致しました。従って次回公演は来年二月になります。

次回公演　88年2月17・18・20・21日
第10回小劇場公演（№24公演）
中津川コミュニティセンター
（508　中津川市北野丸山
○五七三－六六－六〇三六）

劇団コーロ

87大阪新劇フェスティバルには、いまいたかし作、幸晃彦演出「ヤッホーッ、へんなやつ」を上演します。初めてのプロデュース公演です。87年12月25日㈮6時半、26日㈯2時と6時半。88年3月の小豆島演劇祭には、しかたしん作・構成、後藤悦治郎（紙ふうせん）音楽の「まるみちゃんの冒険」で参加します。

（546　大阪市東住吉区中野一－四－一五
○六－七〇五－二八〇五）

劇団さっぽろ

山々はもう雪。これから長い長い冬との斗い。本当に大変なんだから。スパイクとスタットレスの戦争。我劇団は両面作戦。絶対安全、保障付きなら良い。残念ながら、そうはいかない。とっぷりと日暮れの峠越へ。アイスバーンに美しい新雪がサラリなんて峠を登れるものならやってみなッと啖呵の一つも切りたくなる。冷汗かきながらやっと越えりゃ、冷たい視線がジロリと来る。何かスッキリしない。谷底へおっこちるのやだからね、スパイクはいてんだ。心の中で白い目に睨みかえすのだ。

だから、賢い劇団は冬の北海道へ来ない。苦労してるんだから、夏場だけ避暑に来るのヤメテヨ。（どっかの劇団が怒るだろうことを承知で、あえて書く）

全作品好評。でも、なぜか勘定は合わない。そして、年々悪くなって行くようだ。我劇団は来年も今年の作品を続演予定。この冬場に「三まいのおふだ」（新作）を仕込む。これは松谷みよ子作・高坂純脚色の〝やまんば〟三作目。今度は本当にこわいお話。若手の伊藤重孝の初演出でもあります。

あとは、フェスティバル88の成功へ向けて、劇団活動とのバランスをどうとるかがカギです。

何としても、余暇はテレビの前でゴロ寝族を劇場へ引っぱり出したいですね。（長谷川）
（063　札幌市西区手稲宮の沢四八五－四一
○一一－六六三－六二五九）

関西芸術座

創立30周年記念行事のひとつとして、9月の一ケ月間、四本の創作劇を週更りに上演という、劇団初の試みを終了した。

第一週（9月2～6日）
「クラブ」吉田美彦作・横崎英三演出。
第二週（9月9～13日）
「記憶」清水厳作・仲武司演出。
第三週（9月16～20日）
「奈落の神々」矢田嘉代子作・岩田直二演出。
第四週（9月23～27日）
「紫煙の彼方」重光透作・上利勇三演出。

いづれも最近大阪で若者たちの催物のメッカになっている、扇町ミュージアム・スクエア（客席一五〇）で、七ステージ上演。観客総数は約二六〇〇名。出演者総計四一名。

各作品評価については、劇団合評会や観客の声、新聞評などは予想以上の好評の様子。

私たちは、かねてより関西在住の作家による新作の上演を公演活動の基本にしており、今回の試みも、三作品が三〇歳代の若い作家

たちの筆になっている。

30周年という記念行事だから成立した企画ではあるが、これをバネに劇団の活性化に引継いでいきたいものである。

秋になり「翔べ！その翼で」（空を飛んだ鶏と銀色の松ぼっくり）可能あらた作・仲武司演出。「もうひとつの教室」山田洋次・広沢栄シノップス、広沢栄台本、富田悦史演出。

この両班の全国移動公演の最盛期に入り、多忙な毎日です。

（545　大阪市阿倍野区文の里四－一八－六
○六－六二一－二一一二）

青年劇場

関東ブロックの皆さま、サマーフェスティバルごくろうさまでした。

今や年間を通し最も演劇公演が行なわれる時期を迎え、各集団、旺盛な活動を展開されていることと思います。

青年劇場も九月に、山内久作、堀口始演出の「テントの中から星をみた」の公演を終え、年末まで、三班にわかれての地方公演に入っています。昨年の「書かれなかった頁」に続く教育をテーマとした作品である「テントの中から星をみた」は、広範な人々に御覧いただき、意欲作として評価を受け、又、制作的にも成功を収めることができました。

十月といえば、そろそろ来年のスケジュールが固まる時期でもあります。来年は「青春の砦」「少年とラクダ」にかわる作品をはじめ、年五本の新作の仕込みがあり、又、「夜の笑い」「結婚という冒険」、の鑑賞団体公演、及び「書かれなかった頁」の鑑賞団体と実行委員会の公演が目白押し。一人十役以上の活動となります。

又、附属養成所第二十期生の募集も始まりました。お心当たりの方がいらっしゃいましたら御紹介下さい。

今年の東京公演は次の通りです。

◇青少年劇場公演
「シシとササの伝説」
11月23日（月）　前進座劇場
11月24・30日　ヤクルトホール
◇親と子のファミリー劇場
ミュージカル「少年とラクダ」
12月21（月）～24日（木）
朝日生命ホール
（葛西和雄）
（160　東京都新宿区新宿二－九－二〇
問川ビル6F
○三－三五二－六九二二）

劇団やませ

八戸だけではないのでしょうが、めっきり寒くなりました。「山ァ雪だんべ」が日常会話になりつつあります。団員のグスグス声が稽古場にあふれ始めました。あと一週間、なんとか耐えて欲しいのですが……。

ということで、私達劇団やませは、八戸市民劇場創立二十五周年記念特別例会・柾谷伸夫作・佐々木洋二演出『明治四十四年十一月一日クジラ騒動異聞＝赤い海』の稽古の真っ最中であります。ストーブをどんどんたいて、寒さを防ぐために？舞台衣裳をつけて、毎晩遅くまでがんばっています。

公演日がちょうど七十六年前の十一月一日ということで、因縁めいたものも感じています。前回の公演の反省から、若者達の恋、エキストラを頼んでの打ち壊しの群集場面。衣裳等の手配などに頭を悩ませつつ、特別例会実行委員会の情熱の後押しを受けながら、なんとか公演日を迎えることができそうです。

それにしても、稽古をしながら感じることは、この事件と、現在の六ケ所村核燃料再処理工場設置問題とのなんと酷似していることか。最後の一揆であり、最初の公害闘争でもあるこの事件を、今、採り上げることは重い意味

があると思います。
そのためにも、一週間後の公演日を目指して、最後のムチを入れている今日この頃です。がんばります！（風張）
（031　八戸市鮫町蕪島町一四　柾谷方　〇一七八ー三三ー一九一三）

京浜協同劇団

私たちはいま広渡常敏脚本、中沢研郎演出による「ジョー・ヒル＝愛とさすらいの青春」に取組んでいます。
「ジョー・ヒル」は七月十一日・十二日川崎で二回公演を行い一二八三名の観客、横浜で二回公演四九七名の観客を得て公演し、現在十一月六日・七日の東京勤労福祉会館公演と、十一月二五日の川崎宮前文化センター公演にむけて取り組みをしています。本誌発行の頃には全ての結果が出ているわけですが、劇団の観客動員の一つの峰をつくりたいと思っています。
この公演には川崎・横浜で働く仲間が約六〇名応援出演してくれています。国鉄で不当配転された人たち、鶴見造船の争議団の仲間、鉄鋼、電機、機械、運輸、生協、公務員、神奈川合唱団等々で職場の中心になって頑張っている人達が、この芝居に共感し出演してくれています。出演者総数百名に及ぶ芝居の稽古でせまい稽古場はごったがえしています。
またこの公演に昨年の新人四人が残って参加し、若さはつらつ、古手の劇団員を引っぱってくれています。新人の力はすごいですよ。
「ジョー・ヒル」の後はただ今検討中ですが、来年三月に川崎市内の他の劇団と共同で「川崎演劇まつり」を、春には劇団三〇周年企画の第一弾として、劇団の三〇年の歴史にふさわしい作品を検討中です。（山本）
（211　川崎市幸区古市場二ー一〇九　〇四四ー五一一ー四九五一）

劇団展望

第25回東京働くものの演劇祭に、連鎖型集団創作シリーズ『ま昼のちょうちん』新作書きおろし三本を大沢郁夫演出で上演します。
《押捺》…小企業に働く親友同士の女性の日常生活を入口に、外国人登録法・指紋押捺制度の意味するものをとらえようと、改正法（実態は改悪）施行前のまさにホットな主題にふさわしく、お芝居らしきの壁を捨て現実の風から戸閉まりしない舞台づくりの試み。
《開発ゆうれい》…開田・開畑とダム建設に始まり減反政策、総合開発へと迷走する地域にアプアプする農民の前にあらわれる土木工事のダンプで事故死した女房の幽霊。あの世とこの世から、ぜんてェこの開発のゆく先はナジョダベとこの先の世に大疑問符をつける試み。
《サンタクルスの病院にて》…南米・ボリビアはサンタクルスの施療病院に古びた革鞄ひとつで暮らすおばあさんを訪れてくる薄汚れた中年男。戦前戦後の移民・棄民政策を支えつづける天皇制を照射しようとする試み。
これは昨秋上演の創作劇〝猫足の墓〟からひきつづいて取り組む主題で、『ま昼のちょうちん』はいくつかの主題の柱を形式にこだわらず書きついでいく試みなのです。
上演は11月28・29、12月2・4・5・6日。毎夕6時30分、6日はマチネ2時のみ。東働演共通チケット一三〇〇円。於阿佐谷小劇場。（駐車場なしのミニ芝居小屋です。）
（166　東京都杉並区阿佐谷南三ー三ー二二　〇三ー三九三ー二七三九）（林　陽子）

劇団あしぶえ

創立21年目の今年、劇団あしぶえにとっては、大変に忙しい年でした。
まず、中国地方初の本格的小劇場、あしぶえ50人劇場オープン記念公演を2月から7月

までの半年間、「落ちこぼれの神様」で19ステージ。
その後、文化庁主催、現代演劇協会制作の「第三回地域劇団東京演劇祭」に、同じ作品をもって参加。10月17、18日の2日間で、3ステージ。
尾崎宏次氏、八橋卓氏をはじめ、たくさんの評論家、演出家、映画人、俳優さんたちの他、はじめて芝居を観たというお客さまなど、各層の方々のあたたかい拍手をいただきました。そして、制作者側からは、「過去三年間に15劇団が参加したが、内容的にも、観客動員の面からも、五指に入る劇団」との評価を受けました。
稽古と本番の繰り返しで、合計22ステージの舞台をつとめ上げた役者達の成長は著しく、今後が楽しみです。
今年は、あと2ステージ、地元の定時制高校生の学校公演を50人劇場で行ない、合計24ステージで87年のスケジュールを終了します。
来年は、「落ちこぼれの神様」の上演を続けながら、車人形と太鼓を研究し、新しい創作劇を生み出す年にしたいと思っています。
（690　松江市砂子町二〇九ー三　〇八五二ー二七ー三〇五〇）

お急ぎの場合は左記へお願いします。
（733　広島市西区楠木町4ー4ー15ー102　園山土筆）

劇団名芸

中部ブロックゼミナールは、9月5・6の両日、三重県勢の世話で楽しい集いとなりました。名芸は南子供劇場を直前にして6名の参加にとどまりましたが、「夜明け」のモデル上演などに色々刺激を受けました。
子供劇場『走れ冒険』（脚本／栗木・演出／糸井）は約二千人の親子に観てもらうことができました。来年は「世界人形劇フェスティバル」が名古屋で開催されますので、呼応した劇場をつくろうと話し合っています。
さて、迎える秋の公演ですが、次のように創作劇を上演します。

●第31回公演　『夢家族』
（作／栗木・演出／片野耕治）
11月20日（金）～23（祝）。名芸平針小劇場。
単身赴任の家族を喜劇タッチに描いた新作で、このところ制作的にも低迷していますので、なんとかいい舞台をつくり、六百人以上のお客さんに観ていただこうと連日けいこに励んでいます。
そのあとの予定は、まだ決まっていませんが、半期休んだ研究生教室の開始、あるいは冒険作に挑戦する研究公演などを実現しつつ、春の公演にむかっていきたいと思います。
その他、外部出演としては、12月の〝反核舞台人の集い〟詩の朗読に参加したり、また来年の名劇協合同公演の話し合い準備に、事務局長として谷辺らが参加しています。
（468　名古屋市天白区平針一丁目一八〇八　〇五二ー八〇三ー二九二二）
お急ぎの連絡や小包類は左記へよろしく
（457　名古屋市南区汐田町三ー四〇栗木方　〇五二ー八二一ー三六九一）

東京芸術座

ロルカの「ベルナルダ・アルバの家」公演を終えるとすぐに三班は稽古・旅立ちだ。
劇団を経済的に支える学校公演は劇団活動の大きな柱である。何の保証も助成もない日本の文化政策の中では、夏のヴァカンスだ、休養だといった余裕などありはしない。この頭と体で現実を切り開くしか道はないのだ。
毎日舞台を創り、移動する。労働と創造が一つになっての毎日は、それは厳しい。だが明日に向け、今を着実に生きてゆく皆んなは明るい。そのたくましさこそ、われわれの創造の原点ではなかろうか。

核兵器を持った人類、高度に発達する資本主義の現実にあって、人間とは何か。その真実を求め、未知なる未来へ立ち向かう。

来春三月公演は大橋喜一作「ゼロの記録」はそうした皆んなの気持と一致した作品である。稲垣純の演出です。

なお、旅班が頑張るならと、在京する劇団員は、十二月には、さねとうあきら作「聖母たちの犯罪」をアトリエ公演でと、杉本孝司の演出で準備している。（記・高橋左近）

（177　東京都練馬区下石神井4－19－11
○三－九九七－四三四一）

劇団四日市

故黒沢参吉さんが、「芝居は誰にでも出来る」とよく言われたことが、私の脳裡にきざみこまれています。

先回の公演「一リットルの涙」では、地元の「絵本の読みきかせサークル」の主婦たちに友情出演をして頂き、楽屋は女性陣で賑わった。

今回（10月24日夜と25日の昼）公演の「人情赤提灯」では、地元の少林寺拳法道場の塾長、塾生たち、原作者の友人、知人らの飛び入り出演で、楽屋は圧倒的に男たちでひしめいた。

打ちあげ会では、舞台初体験の話題がいっぱい。ずしんとしみる連帯感でふくれあがっていました。

実働十名そこいらの劇団員ですが、脚本が良くて企画が良ければ、芝居づくりの道はどんなにでも開けてゆけるものと確信を強めました。

「人情赤提灯」の再演をのぞむ声がつぎつぎと聞こえてくる中、私自身は、次回公演「炎と燃えて生命―四日市萬古焼異聞」の台本執筆に取り組み開始です。（森けんろう）

（510　四日市市北浜町九－一〇
○五九三－五一－五四二六）

福岡現代劇場

全り演の皆さん、こんにちは。「山口演劇ゼミナール」では、楽しいひとときと充実した時間を持つことができ、事務局の皆さんのご苦労に感謝とお礼を申し上げます。

福岡現代劇場は、井上ひさし作、猿渡公一演出による「頭痛、肩こり、樋口一葉」を福岡市民芸術祭参加作品として公演します。（11月18日㈯・19日㈰。於・福岡市中央区市民センター）

現在、稽古場では、6名の女優たちが、舞台でくり拡げられるであろう人生の修羅模様を織り出すために、「二千五百石どりのお旗本の姫君から俥引きの女房へ。判事さまの奥様から淫売女へ。大商人があれば細民あり。葬式が終れば、すぐに婚礼。不夜城吉原が東にあれば、北に日暮里の火葬場がある。めぐりめぐる因縁の糸でみんな鎖のようにつながれて、死者と生者が入り乱れての大奮闘！、樋口一葉19才から死後2年目までを、卓抜な仕掛と会話で綾織る『井上ひさし』のおかしなおかしな世界」（チラシより抜すい）に向けて4度のめしを5度にして、悪戦苦闘中です。

（810　福岡市中央区楽院一－六－五
ホワイティ薬院四一〇
○九二－七五一－七九八二）

劇団たけぶえ

8月21日～27日までオランダ、ユトレヒトにて開催された「世界アマチュア演劇フェスティバル」に日本代表という事で参加致しました。帰途、28日～31日まで西ドイツ、マンハイム、シュビッチゲン、ユーリンハイムの三市で親善公演。往復を含めて2週間の渡欧公演でした。

作品は地元の〝伝説〟と能の〝求塚〟を素材とした創作劇「水仙」で、珍らしさも手伝ってかと思う程、好評を得ました。日本の演劇というと、能・歌舞伎といったものしか知られておらず、文化庁などの伝統芸能海外紹介の熱心さがかえって日本の文化を誤解させている事を感じました。

一年に及ぶ創造ともろもろの準備、そして世界四五ケ国のアマチュア演劇人との交流、これらは今度の劇団活動に大きな力となりそうです。

定期的な春・秋の公演活動ですが、大事業の後という事で秋の公演は今年は取りやめ、（充電です）、そのかわり、劇団の附属機関「地域演劇研究所」の事業として、昭和24年頃から武生を中心とした〝演劇資料展〟（ポスター、チラシ、写真等々）を、11月1日～3日に開催、目下その準備に追われております。（柴野千栄雄）

（915　武生市千福町一一〇－七
○七七八－二四－〇九一四）

演劇サークル「トラム」

八月二二・二三日、西会議「山口ゼミナール」開催の節は、大変御苦労様でした。いろいろとお世話様になり、本当にありがとうございました。

二日間皆様の過ごして、山口では日頃味わえない熱い息吹の中にひたれたことは貴重な経験でした。

準備のために目のまわる思いをした日々がとおりすぎた後は、虚脱感にひたるひまもなく、十月二四日、山口市民文化祭・創作劇「マイ・フォーカス・イン・ヤマグチ」に参加、明治・大正・昭和にかけての、山口市の学生の風俗を、〝書生節〟や〝高校三年生〟のハーモニカ演奏にのせて、トラムの全員が出演いたしました。

また十一月一三・一四日の両日、第二回の小劇場を、田中千禾夫作「笛」を上演すべく、現在、猛練習の毎日です。

以上が、当サークルの最近の活動状況です。

（753　山口市中央二丁目四－二
○八三九－二二－〇三九三）

劇団新芸

十一月十五日に銭函小学校二年、五年の学年行事で、学校の図書室で公演します。矢作京介脚色、鹿角優一演出「あほう村の九助」です。みんな、あほうになりきって頑張っています。

目出たい話しがひとつ。ウチの女性劇団員が、いつも公演の手伝いをしてくれる人と結婚しました。そして赤ちゃんができました。

困った話しがひとつ。大きいおなかの彼女に娘役は無理なので、子供役をダブルキャストにしていた片方を娘にしようとなったのです。

しかし、一人は就職戦線真盛りの忙しさ。また、もう一人は玩具屋勤務で、日曜日を休む時は架空の結婚式が劇団内に飛び交うありさま。

よって、今年の公演は銭函ひとつのみとなりました。

（047－02　小樽市銭函三－二三－一六二
○一三四－六二－三二五四）　鹿角方

黒石演劇研究会

こんにちは！1号振りの通信です。

劇研は、北村想作「ザ・シェルター」（杉山隆一演出）を七月十一日、十二日の二日間3ステージ、観客数四五〇で終えました。

キャストの平均年令25才、古い者で在籍四年程度という、ウチとしては異例の若々しい舞台となりました。本番一週間前に演出が私事のアクシデントのため、稽古を空けるというハプニングもありましたが、他のメンバーが抜けた穴をフォローし、何とか無事幕を開けることが出来ました。又前後して新入会員

が四人もあり、嬉しい話題を提供してくれました。これで増々劇研が活気づく事を期待しています。（年寄も負けられない！）

秋は11月15日に親子向けレパ「イソップのお話」（J・ブロック作・中辻鉄雄演出）を2ステージ公演予定。この作品は常時公演可能レパとして、「いつでも、どこでも、出前OK!!」を合言葉に施設や幼稚園等で上演して来たもので、今回の公演で通算20ステージを数えます。「イソップ――」は一応これで区切りをつけ、来年は久し振りに大ホールでの公演をと考えております。

その他の予定としては12月2日に弘演公演「今日、私はりんごの木を植える」に劇研から4名の客演予定です。

津軽は今、各地で紅葉の見頃を迎えていますが、冬はすぐそこ。もうすぐ一面白い世界となります。寒さにメゲズにお互いに頑張りましょう!!

（担当　杉山隆一）

（036－03　黒石市乙徳兵衛町51　加賀谷方　○一七二－五二－四○九七）

劇団湖

冬の訪れを肌に感ずるころとなりました。さい果ての地で、準会員を含め六名と言う小さな〝湖〟も去る十月七日・十八日の両日、年一回の公演をやっと終えたところです。

三笠市民文化祭、劇団湖創立二十五周年年念公演、合田一道作、加藤元演出『ざ・ほろない―炭山暴動始末』―三幕九場。

五年前、二十周年で「残影幌内炭山暴動」として上演したものに手を加えての再演でした。ご存知のように北海道もひとつ、又ひとつと炭山の灯が消えてゆく中で、北炭幌内礦も時間の問題と言われています。こんな時だからこそやらなければと、このどでかい作品に悪戦苦闘の末、二ステージ六五一名の観客と、五八名のキャスト、一○名のスタッフで打ち上げました。

今年も例年とたがわず、道演集（中でも新劇場から3名、劇団さっぽろの飯田氏、フリーで札幌から通ってくれた2名）や市内の若者サークルから13名、地元幌内中学校生徒の20名と教師、昨年公募に答えてくれた3名、劇団OB、OG10名、友人やらきょうだいやら手伝ってくれそうな人々に声をかけて協力してもらいました。

この作品は、来年札幌で行われる全リ演と道演集共催のフェスティバルに上演が内定していますが、この多勢出演者の必要な舞台をどう作るか、今から頭の痛い話です。まだ反省も総括も済まないうちに、作品の出来、不出来は言えないことですが、今のところ、巷の噂では、まぁまぁといったところでしょうか。単純に「好かった」「すばらしかった」との声は聞こえています。

とりあえず今年のうごきをお伝えします。来年のことはこれからです。

（068－21　三笠市本郷町五七八－九加藤方　○一二六七－二－三○四四）

演劇集団石るつ

このところ、地域の催し物出演が続いた、お馴染みの、演芸集団石るつです。今回も又創作劇を持っての東働演参加秋公演のため、改稿に改稿を重ね、あと一と月を残す所で、ようやく脱稿、お後は舞台での勝負と開き直り、殺人的スケジュールで乗り切る覚悟。何と云われようが演劇やります。乞う応援と、御期待！

第24回公演

「茜色の氷原から帰って来た男」

作・境野修次　演出・ひぐち丹青、境野修次。

11月27日（金）7時

28日（土）2時・7時

於　深川江戸資料館小劇場

（135　東京都江東区白河2－13－8　吉川複写工業内　境野方　○三－六四二－六三八三）

川崎演劇塾

今年で九年目を迎えた川崎演劇塾も、その名はまだまだ知られていません。いつも小劇場スタイルで、市内中原区の人形劇団ひとみ座のスタジオを借りて、年二回の公演をしています。こて数年のレパをみますと、岡安伸治の「とおりゃんせ」。北村想の「ザ・シェルター」。加藤直の「アメリカ」。つかこうへいの「出発」、と多彩です。そして今回は、井上ひさし作、加藤恵子演出で、「キネマの天地」を上演致します。動きの少ないセリフ劇で、私達にはかなり難しい作品ではありますが、果敢に挑戦しています。

十二月四日～六日。ひとみ座スタジオ。

（221　川崎市中原区木月四－一二七八　○四四－四一－五七四七）

（小川ガコウ）

演劇集団「土くれ」

加盟集団となって早くも二ケ月が過ぎました。第34回公演「太陽の子」の稽古へ全力傾注しているところです。公演予定は次のとおりです。

11月20日（金）　PM6・30～

21日（土）　PM2・00～

会場　東京都勤労福祉会館

この公演は集団創立20周年記念公演第一弾です。第二弾は、「奇跡の人」の再演で、六本木「俳優座劇場」での公演となります。

88年2月1日（月）　PM6・30～

2日（火）　PM6・30～

10月3日（土）、集団では、これまでに「土くれ」に在団したことのある仲間も含めて五○名ほどが結集し、内部的な二○周年記念レセプションを行ないました。旧交を温めるとともに、二○周年記念公演の成功のために奮闘する決意を固めました。

〝東京働く者の演劇祭〟第25回目が11月14日の新芸座を皮切り12月中旬まで8集団が参加して開催されます。今年もドイツ民主共和国から交流団が来日します。観劇をよろしく。

事務局の住所が変りました。

（108　東京都港区三田3－2－1　弓和ビジデンス三○二号　○三－四五三－三五八六）

全リ演加盟にあたっての、演劇集団「土くれ」の自己紹介。

「土くれ」は、一九六七年に税務署に働く青年が結成した集団です。

当時の税務署は、労働組合の分裂を受け、少数の第一組合に対する厳しい攻撃が吹き荒れていました。それまで活発だった職場の様々な文化サークルが次々と消え、永年続いた組合の文化祭も終りに近づいていました。それでも六六年に開かれた文化祭には、各職場や支部から、いくつかの演劇や歌声の発表がありました。そのなかの一つが発展し、結成されたのが「土くれ」です。

そんないきさつから「職場に根づいた演劇活動」を合言葉に活動が始まりました。集団には一人として演劇経験者（本格的な）はなく、文字どおり手創り劇団の出発です。

結成してすぐ、稽古場としていた税務署会議室からの追い出しが税務署当局の手で権力的にやられ、当局に対する抗議、駅頭での抗議ビラなどの抵抗をくり返しましたが、ついに職場での稽古が不可能になりました。

こうした経過から、私達は職場の分裂を超えて、ひろく仲間を劇場に結集するため、結成二年目に、自主サークル、自主公演に打って出ました。

当初は入場税チェックに名を借りた税務職

員の監視や麻雀への連れ出しなど妨害がありました。しかし公演回数を重ねるに従い、大旨三年〜四年ごとの転勤という職場条件も相まって、観客が各職場に拡まり、これらの妨害をほとんど克服しています。

その後、集団は、税務の職場を含めた官庁（公務員）に活動基盤を拡げて活動を展開しました。八三年の通産省演劇サークルとの合同公演、八四年には、さらに人事院演劇サークル、税関職員を中心とした演劇サークル麦の会を加えての四サークル合同公演へと発展させました。現在、それぞれの厳しい集団状況を抱えながらも東京国公演劇サークル連絡会を結成し、交流を続けています。

又、東京働く者の演劇祭には、七四年の第九回公演「ある労働者作曲家の生涯」から参加、現在事務局集団の一員として奮闘しています。

集団は今年二〇年目を迎えました。これまで三三回の公演を作ってきました。「若者たち」「プンナよ、木からおりてこい」「つくられた英雄」「11ぴきのネコ」「かげの砦」「教員室」そして「奇跡の人」等々です。

私たちは冒頭で述べたとおり、全くの素人の集まりから出発しました。これまで意欲的に学びながら、集団の主張を明確にし、舞台を創ってきました。しかし創造レベルはまだまだサークル演劇の域を脱し切れていません。全り演加盟を機に、創造的にも新たな飛躍をと思っております。

（編集部より・この加盟にあたっての自己紹介は本来ならば別頁に仕立てるべきところでしたが、都合で、劇団通信につなげました無礼をお許し下さい。なお、この文章とともに上演スナップらしき写真二葉が同封してありましたがそれについての説明が全くないこととあわせて、巻頭グラビアはすでに割りつけ済みのあとなので割愛させていただきました。石塚さんのお手紙ではこの写真多分集団のさりげない横顔のおつもりのようでしたが、次号にはしっかりした〝太陽の子〟のスチールをお待ちしています。誠実な〝土くれ〟の舞台は、全り演にとって新たな戦力です。）

劇団大阪

全り演のみなさん、お元気ですか。

山口でのゼミはとてもおもしろいものでした。伝統芸能をふりかえり、今後の私たちの演劇創造を、どのようなものにしていくか…いろいろ考えさせられることばかり。私自身、他の劇団の人たちとも交流できて、充実した夏を持てました。

劇団大阪では、秋の新劇フェスティバル参加、『〝黄金の街〟マハゴニー』を上演することになり、連日けいこに励んでおります。「お金があれば何でもできる」―架空の街、マハゴニーと、「お金がないと何もできない」―現実の私たちの街を結びつけて、物語はすすみます。

今回の作品は音楽がふんだんに使われており、劇団自身も、新しいものを創り出そうとがんばっています。

〝黄金の街〟マハゴニー
作・B・ブレヒト
演出・堀江ひろゆき
11月13日〜15日
於　近鉄小劇場
（542　大阪市南区谷町7−1−39−103
○六−七六八−九九五七）

劇団支木

（藤原浩平さんからの手紙）

朝晩冷えてきました。ストーヴが欲しくなりました。お仕事ごくろう様です。支木もあい変らず遅いけいこ開始で、なんとかやっています。公演日の二転、三転して、一月一五、一六日に決りました。この日ならという、やっとこさの合意です。

さて、「ブロックの頁」ですが、残念ながら次号への参加は無理だと考えます。わざわざご指名下さいましたのに申しわけありません。ひとつには、私が忙しくて時間がとれないのです。今、けいこ場を無料で貸して下さる話が実現して、古い木造の元工場（二四坪）を改築中なのです。劇団に金がありませんので、私一人で夜業です。夕方六時から九時まで仕事をして、その後けいこです。十月末まで続くと思います。（ここまでがインクでそのあとはボールペン）ごめんなさい、ペンのインクが切れました。

又、ブロックの各劇団も秋の公演をひきかえて、十月、十一月は、日程を調整して集まることができません。勝手ですが、次々号なら実現できると思いますがいかがでしょうか。

八月の総会のときに、「これが奥羽だ、弱小劇団展楽座」というようなタイトルで、二ツ井町と展楽座をルポ風に取材して、「ブロックの頁」に加わろうと工藤君（「展楽座」のチーフ）と話し合ったのですが、どんなものでしょうか。萩さんの「放言座談会」の提案も含めて、ブロックで話し合いたいと思います。もう少し時間を下さい。よろしくお願いします。（9・29）

（030　青森市本町一−六−一四ふじビル
○一七七−七七−四六七七）

〈編集部より。通信代りに私信の借用には躊躇があったが、本号での「ブロックの頁」を奥羽にお願いした旨、それが不発に終った次第が大へんよくわかるので、拝借しました。浩平チャン、ゴメンナサイネ〉

劇団四紀会

今日は！

自民党総裁が代わろうが、株相場が変動しようが、冬の時代は当分続きそうです。だからこそすぐれた舞台を創りたいです。

劇団30周年記念の創作劇連続上演二作目の「雨になるらむ風になるらむ」を打ち上げ、いよいよ第三作目の「青葉茂れる」の稽古開始です。大正から昭和二十年三月の神戸大空襲にいたる神戸庶民史三連作を劇団員作者の内田昌夫が完成させたのです。地域の勤労市民の歴史と暮らしを創造の柱としてきた劇団が総力を挙げてスケールの大きい舞台に挑んでいます。裏方さんが今から凄い張り切りようです。

なお第四作は趣向を変えて二十一世紀の未来物語。夢か希望かはたまた絶望か…ご期待下さい。

「青葉繁れる」　2月26日（金）〜28日
「宇宙船地球号よ」　6月24日（金）〜26日
（650　神戸市中央区元町通2−9−1−612
○七八−三九二−二四二一）

神戸職演連

今年演劇生活40周年を迎えた菊地照一は、春の自主公演に続いて在神劇団どろのB・ブレヒト作「プンチラの旦那と下僕マッティ」に客演として出演をし、その公演を終えたばかりです。また昨年にひき続いて第5回目を迎えた神戸争議団支援文化の夕べにも何人かのメンバーが表方、裏方として協力出演することになり、11月13日の本番に向けて頑張っています。国鉄労働者が男優陣の多くを占める私達のサークルですが、民営分割後も以前にも増しての頑張りを見せ、産業別としては唯一の国鉄演劇祭（12月13日岡山労働会館）に向けて、国鉄鷹取演劇部として職場の創作劇を持って参加しようと猛けい古に入っています。このようにメンバー一人一人は色々な所で忙しく動きまわっているのですが、集団全体としての動きは遅々として進まず、エンジン全開はどうやらこれらの公演が終ってか

らになるでしょう。5月公演以後やや沈滞気味だったサークルもその後女性3名が加入、新鮮な息吹が注がれ再び活気を取り戻しつつあり、3月自主公演のレパも決まり、今少しづつではありますが残ったメンバーで部分的なけい古に入っているところです。

公演予定　第35回公演　県民土曜劇場
63年3月11・12日
650　神戸市中央区下山手通九ー九ー七
西藤ビル2F
（〇七八ー三五一ー六九六九）

演劇集団・あり

十一月十九日、米子市秋の文化祭参加行事として、米子市公会堂に於いて、演劇集団あり主催による「ステージフェスタよなご」という、新しい企画を行ないます。

これは、第一部に、ありの演劇宮沢賢治の「注文の多い料理店」を脚色構成した同名の一幕劇を上演し、第二部では、舞台美術家の妹尾河童・女優の岸田今日子・音楽の小室等の三氏を迎えて、河童さんのスライドを使った、河童の語る舞台の裏おもて、岸田さんの朗読、小室さんの音楽という、ジョイント公演です。

第二部の催については、私たちも加入し、米子市に中・小ホール実現する市民組織「米子市に中規模文化ホールを実現する会」が、今春、ホール建設の話を聞くため河童さんを招いた関係から、この秋に河童さんが、岸田さん、小室さんのそれぞれの母親のふるさとが鳥取県であり、一緒に訪れる機会をとらえたのです。

地方での演劇活動に多面性をもたせようという試みの企画です。成功の可否は半々といえそうですが、これを機会に新しい支持層が生れつつあるのは確かです。

しかし、最近の不況下では、活動の困難さも増して、稽古への結集も大変です。社会のひずみの影響を庶民の文化が一番先に受けることを感じています。

以前、稽古場として借りていた、教会の神父さんまでが、最近の日本人は中流生活を維持するため、仕事のためと、休むべき日曜日さえ休まず、自分自身の時間を捨てているとなげき、ヨーロッパ人では考えられない、日本の古さだと言われたのは胸にささりました。

それでも、それだから、芝居を今……

（683　米子市昭和町23　宮倉方
〇八五九ー三三ー九三〇二）

劇団きづがわ

新劇フェス参加の秋の公演「ターミナル」（木村快・作　12月12・13日）が迫っています。〝くじ引き〟で負けたため希望の会場がとれず、結局、第三候補の会場（大正コミュニティホール）に決まりました。〝区民ホールは2ケ月前にくじ引きできめる〟ということになっているため、予定がたてにくく本当に困ります。本番まで、あと一と月余りですが、創造はアリ歩（牛歩より遅い）の歩みで、遅々としてすすみません。笑い・涙・歌と三拍子そろった楽しい芝居のハズですが、非力な私たちには……『ああ、困った、困った』。

劇団員個々の創造力量をアップさせる必要性を、ホンマに骨身にしみて感じる今日この頃であります。〝育てながら勝ち進む〟――西武・森監督のつらい気持が、少しは分かる気がします。（記・山田）

（551　大阪市大正区泉尾四ー二ー七
〇六ー五五一ー三四八一
〇六ー五五三ー七九九一）

劇団はぐるま

秋、というよりはもうすっかり冬の感じです。カゼをひいた、カゼが治らないという声もチラホラ聞かれる今日、この頃ですが、今はぐるまではそんな泣き言など言っていられない状況になっています。

こばやしが中国で観て以来、念願であった「紅鼻子」（ホンビーズ）（あか鼻のピエロ）の上演が、つい目と鼻のさきまでせまっているのです。

このお芝居は、道路が不通になり、あるホテルに集まる人々の人間模様が本筋となりますが、それに加えて旅芸人の一座が繰り広げる手品や曲芸、踊りなど、ショーの部分がかなりの見どころとなります。

ダンスについては、とりあえずの基礎訓練を続けてきましたが、曲芸となるとそうはいきません。半年前から一輪車を買い込み、特訓をくり返して、現在なんとか人にお見せできるところまで到達しました。これに岐阜大学軽音楽部「ニュィ・スターズ」の協力を得、なんとか楽しい舞台にできる見通しも立ってきました。

そして特筆すべきことは中国から演出家を招いたことです。その公演のために、中国で何回か「紅鼻子」の演出を手がけた女流演出家陳顒（チェンヨン）さんを招き、要所要所で適切なアドバイスを与えてもらっています。中国で手がけた「紅鼻子」とは一味違ったものにしたいと言ってくださる陳さんが、ウチの役者たちを使って、どう仕上げるか、これから二週間が最後のツメになります。

本番には、作者である姚一葦（ヤオイウエイ）氏を台湾から招く事になっており、国際的な劇団を目ざして、いやが上にも緊張の高まる劇団はぐるまの現場からお伝えしました。（内田薫）

（500　岐阜市西野町一ー十一
〇五八二ー六五ー一五八二）

名古屋演劇集団

十月十三日劇団稽古場にて、研究所中間発表「ブンナよ木から降りてこい」（北原雅子演出）。

今、「演劇会議」66号にのりました園山土筆作、丸子礼二演出「落ちこぼれの神様」に取り組んでいます。劇団あしぶえの東京公演も観に行きました。どうやって「演集」の「落ちこぼれ……」を創り上げるか苦闘の真最中です。公演は、十一月二六日、二七、二八、二九の四日間六ステージ、名演小劇場です。

この後、十二月九日「反核舞台人の集い」への参加。来年一月二三日予定しています創立40周年レセプションへの準備、記念公演の準備と「忘年会」もおちおち飲んでいられない状況です。（沢田）

（451　名古屋市西区庄内通四ー十六ー三
〇五二ー五二四ー五九七五）

劇団すがお

コンニチワ！　秋の公演てんてこ舞いです。

「花のき村と盗人たち」
新美南吉・作　筒井敬介・脚色
加藤武夫・演出

10・24～12・20の間、日曜、祝日十一日間十九ステージ、約八〇〇〇人観客の公演、恒例の員弁郡小学校移動公演が始まりました。劇団フリーの応援を得て、若々しくガンバッています。

「夏の夜空に―わが街桑名」の創立25周年記念公演・桑名市制五〇周年協賛公演は、被めての本格的創作劇で市民の評判を呼び、一一〇〇名の観客動員でした。出演者は約一〇〇名と市民参加の舞台作りで大成功。また駅前のショッピングセンターの催事場で、一週間と公演当日のロビーで〝桑名戦争展〟を開催し好評を博しました。

創立二五周年記念公演第二弾の「有王塚物語―俊寛と有王」は今秋の公演予定でしたが、員弁郡の移動公演をどうしても優先する必要にせまられ、来年の三月六日に延期しました。

（511　桑名市森忠一〇五八
〇五九四ー三一ー四二一〇）

ひろしまからの報告

（手話劇団の誕生・その課題）

尾津訓三
（日本演劇教育連盟会員）

―気狂いの夜討ち―

それは、一九八六年四月十日夜半にかかって来た電話によって端を発した。

心臓を病んで入退院を繰り返している母に何か？　心がまえをして受話器を手にした。

『すまんねぇー遅うから、ろう…連盟の仕事じゃけど、頼まれてぇーや。台本を書いて演出もやってあげてぇーや、あの、詳しい事は担当の人が電話してじゃけぇー、ほいじゃ頼む悪いけど』。電話はそれで切られた。

予測予感の電話ではなかった、その場にしばらく私はぼんやりと立っていた。

耳に残った「ろう…れんめい」が、労なのか、老、あるいは朗か判断がつかない不満が残った。それが、聾唖者のろうであることは担当者に会うまで不明だった。

電話は「劇団月曜会」の岩井里子氏からで、彼女は広島で名の知れた〝芝居きちがい〟の一人であり、得難い人物である。

幾つかの優れた素質を備えているが、中でも、大変な仕事をいとも簡単に、気軽く人に頼みこむ特技があり広島では「おばん」と呼ばれている。

―出合い―

夜半の電話から数日後、約束の場所でお会いしたご婦人が「手話通訳者」の中川文江さんだった。

初対面の挨拶が済むやいなや仲川さんは「手話劇をやりたいんです。どこへ頼んでも駄目なんです。シナリオ書いて下さい、やってもらえますね、テーマは〝平和と人権〟です。

ろうが聾唖のろうであることが判ったのだが、いきなりというか単刀直入にシナリオ書け、テーマは平和、人権だ、と切り出されていささか面喰らって、運ばれたコーヒーに手を出しかねていると

「岩井さんから大丈夫だと聞いているんです、よろしくお願いします」と追い打ちをかけて、紙袋から資料らしき物を取り出して机に重ねた。

―全国手話通訳問題研究会（全通研）―

八月二十二日から三日間広島市で全国大会が開かれ、この大会を記念して若い人を中心に文化的行事をやりたいと声が出ており、それを実現させたい、ついては広島だから広島らしい内容を全国から集る人たちに観てもらいたい、それを手話劇で表現したいのだ。

仲川さんの話しによって、やっとその全体像がつかめた。

広島に生きている被爆者の一人としてテーマが「平和と人権」だと告げられて、何とも重く、どこか暗い、そして固いといったイメージを受けたのだった。

それは、どうにものがれようのない命題、自分自身が過去現在引きづり続けているし、この先もこだわりを持って生きるに違いないと思う内容であるからだと思う。

だから「平和と人権」がテーマね、ハイヨテーマ了解ネ、合点承知ョ、マ・カ・セ・ナサイとはなかなか言えなかった。

すっかり冷めたコーヒーを一気に流しこみやっと「何とか、やってみましょう」

手話を知らず、手話劇についての予備知識もなく私の無謀ともいえる挑戦はスタートした。

後日、月曜会の土屋清氏に会って話した時「岩井のオバン、バカタレじゃけぇーわしに一言の相談もせずに、あんたに押しつけてしもうて、悪かった、知っとったらわしも相談に乗るんじゃったがー」と、気配りの言葉があったが、そのときはすでに稽古半ばにかかっていた。

―四十年目の語り―

中川さんは三年間県内を歩き、手話によって、ろうあ者の被爆体験を集め、それを記録として全通研の機関誌に発表された。

耳や言葉の不自由な人達が、被爆後どんな生き様をしたか、その一端が四十年目にして初めて世に出た訳であった。

被爆者一般がそうであるように、ろうあ者の場合は更に困難があり三年間努力して県内で七人しか協力が得られなかったという。

手話劇の台本は「HIROSHIMA・TODAY」と題して発表された、被爆ろうあ者の体験記を原作として、それを脚色する形式によって、作業にかかった。

初稿にかかって、決定稿に至るまで台本は四回書き替えていった。

岐阜の「劇団はぐるま」と「手話劇団いぶき」が合同公演した（安寿と厨子王）の台本を参考にと思ってその旨劇団に依頼したが、六月に台本が到着したときには私の台本も印刷に入っていた。

岐阜の台本と私の台本は基本的には一致していたので私は安心した。

最初は一般の形式で書き、次いで二段に変更し、稽古をすすめるなかで中央に舞台図を加え、出演者に自分の動きや、舞台の変化を理解させる必要から工夫したものでスタッフはB4版をタテに使って印刷した台本を使った。劇団はぐるまの台本と比較すると次のようになる。

劇団はぐるま方式台本

台詞	手話用補助台詞	手話台詞
上段	中段	下段
・・・〜	・・・・〜	・・・・〜
・・・〜	・・・・〜	・・・・〜
〜	〜	

劇団「河」筆者方式台本

台詞	舞台図	手話台詞
上段	中段	下段
・・・〜	下見	・・・・〜
・・・〜		・・・・〜
〜		

―手さぐり稽古―

五月十二日、第一回集会（八人）第二回目

（二十一人）三回目（三十人）参加と、出演希望者は増加し、広島初の手話劇を成功させようという熱気に満ちている一方、演出も担当する私は文字通り試行錯誤の世界に踏みこんで不安な思いをしたけれど、不思議なことに稽古は楽しかった。

。ゆっくり　。ハッキリ　。大きく　。美しく　をモットーにしての立ちけいこなどを手話通訳者を介して、あるいは黒板やノートでの筆談で進める中で私自身多くの新しい発見をすることができた。

ろうあ者同志で使う日常手話は非常に動きが速く通訳者でも解判読困難である、また、手話は常に自己本位のサインで進行しており第三者には理解がむつかしい。

この問題を認識の位置でとらえ、生活手話と、舞台手話は違うという意味を出演者に理解してもらうのに時間が必要だった。

健聴者に見られたくないという潜在意識から二人、三人で交わす手話は胸の前位置をメインに、第三者の目を避けるようにして日常会話を成立させている。それが、ろうあ者にとっては当り前、つまり生活感情となっているのである。

オープンの手話、多人数の視線に晒らすための手話、ステージ用手話をどう創りあげていくか、〝語らい〟が少ない事を何でカバーするか、手話に無い台詞をどう創造していくか。プロジェクトを中心に連夜話し合った。

―文化要求と涙―

チョークで汚れた手を洗う目的でドアを開けた所に一人の青年が立っていた、閉めるのをやめて青年に促がしたが彼は入ろうとしないばかりか、うつ向いたまま動かなかった。

見れば足元にポトリ、ポトリと落ちているものがある、すぐに通訳者を呼び出して事情を確かめた。

会社の上司に「残業しないのなら会社をやめろ」と叱られたのだった。

稽古は週二回になっていた、週に二回も残業しないで帰るのは愛社精神が欠けているとも言われて、稽古に来れない。

自分は手話劇に出たいのに、できなくなる、両手の拳で自分の頭を打つ姿を目前にして私は自前の姿勢を省りみたのだった。

あれ、これと理由を並べ、ぐだぐだと愚痴を吐き、稽古に集中しない劇団員やサークル員などを見馴れていた私は、ろうあ者の秘めた文化要求の強さを垣間見る思いと、それに応えていくべき自分の仕事は何か、劇創りの中で考えていった。五十人を越す集団のエピソードは一冊の本にしても余るほどである。

―公演の成功―

八月二十三日昼夜二回の舞台は、熱い連帯と出演者のエネルギーによって無事幕を閉じることができた。

関係者の喜びようは大変なもので、握手握手の連続、その一人ひとりが力強く握り締めてくるので私の手は腫れあがってしまった。

月曜会の土屋清氏が珍らしく興奮気味に舞台をほめ〝改めて手話の美しさに驚いた〟と称賛の声をかけてくれたのもうれしかった。

製作過程でほとんど手を借してくれなかった月曜会に対して不満があったが、それは次回までの貸しとして、これから月曜会だけでなく広島の文化共通の課題として、責任ある協力共同をどう築きあげていくかについて考える必要を感じた。

―手話劇団「河」誕生―

手話劇「ヒロシマ・TODAY」を成功させた有志が集って「広島手話劇団」が結成された。劇団名は「河」。団長には杉野信明氏（26才）を選出した。登録された劇団員は十代から七十代までの男女三十一名で、ここから第一歩を踏み出したのである。

結成間もなく京都で開催された「第七回・全国ろうあ者演劇祭典」を演劇の勉強をする目的で二十人が参加した。

このとき。岐阜の「劇団はぐるま」と「手話劇団いぶき」の合同公演（安寿と厨子王）を観た後、こばやしひろし氏にお願いして、交流会を実現させてもらった事は「河」の劇団員にとって非常に大きな喜びとなった。

―第一回自主公演―

一九八七年一月十八日、広島市安佐南区民文化センターホールで自主公演（二回公演）を行った。

この公演には最初から「劇団月曜会」の協力を依頼し、太鼓による協力出演が実現した。

いま、八七年九月、間もなく劇団の誕生日が来る、まだ劇団としては何ほどの事もやっていないけれど劇団員は元気いっぱいだ。

一人ひとりの勝手が、集団になっての勝手になる。いま、どちらを向いても〝我がまま勝手がのさばっている。

演劇関係についてもそれは例外ではない。自分のこと、自分の劇団のこと、についてはそれなりの事をするけれど、他人のことや、ジャンルが違うと全くの知らん顔が当り前の風潮が主流である。

全り演に加盟して年中忙しい思いをしている人達の中にもこの病気におかされた者があるかも知れないけれど、どうか少しだけ手を借し、耳を傾けて全国各地で文化要求をもっている人達がいることを知って欲しいし、地域文化の共同にむけて、あなたの心を開いてほしい。〝それどころではない〟と思いこむ前に自分に何か出来るかを、その可能性にチャレンジする発想に立って欲しいと願うのである。

全国に点在する「ろう劇団・手話劇団」との協力共同の視点を持って欲しい「劇団はぐるま」「劇団月曜会」の経験を共通のものにして欲しい。（一九八七・九・二五）

＜劇団通信＞つづき

劇団群馬中芸

いよいよこの九月、「群馬未来劇場を建設する千人の会」の人々によって進められてきた群馬の民衆文化の拠点―『群馬未来スタジオ』の建築工事が開始されました。紅葉に染まる赤城山の麓、遠く関東平野を望む松林の中で、来春五月の完成を目指して着々と工事がすすんでいます。

この劇場建設運動が始められて十年、「千人の会」は、その名の通り千人の出資会員を目標に運動を展開してきました。81年に劇場用地を購入し、現在八百五十余名の会員数になっています。全り演加盟劇団の方々にも入会していただいていますが、まだまだ私達の力が足りず資金不足の現状です。是非出資やカンパの御協力をこの誌面を借りてお願いいたします。

さて、公演の近況ですが、『また七ぎつねは自転車にのって』（中村欽一作、ふじたあさや演出）の学校巡演。また、新作〝第4回こどもの小劇場〟『ととん　すっぽん』（中村欽一・大野俊夫作、大野俊夫演出）88年一月から公演予定。

（371　前橋市昭和町三―一五―二
〇二七二―三二―〇五五〇）

第5回・西日本劇作家の会・報告

東川宗彦

原稿を書いている今は七月、アユ釣りのお休みの日にである。

会議の日は一月二十四日と二十五日、和歌山県の雑賀御崎であった。

当地には大変珍らしく吹雪で、風情がありました。

ワープロで打たれたきれいな文字の当日の案内状前文は……。

水平線を見ながら壮大なドラマを構想しませんか。

――西日本劇作家の会「つどい」のお知らせ――年もおしせまってあわただしい毎日ですがいかがお過しですか？

さて、劇作家の会は昨年、全リ演西会議と共催で戯曲研究会をもちましたが、本年度は劇作家の会だけで下記のとおりつどいを開催することになりました。

会にはゲストとして阿部好一さんをお迎えして、井上ひさし論を展開していただく予定です。阿部さんを囲んで、大いに飲んで、大いに語り合いたいと思います。足の便の悪い和歌山ですが、会場は窓ガラスいっぱいにまるい水平線の広がる絶景の地です。たくさんのおいでを酒を熱くしてお待ちしています。

同封のはがきで出欠をお知らせ下さい。なおはがきは十二月二十五日必着でお願いします。

楠本幸男（演劇集団和歌山）さんの文章です。

なにしろ、この会は一切の規約はない、出入りは自由である。世話役がいるのみである。劇を書いてさえいれば誰でもよい。

それが、なんと、もう5年5回も続いている。

二十四日夜、〝やァやァ久しぶり、お元気？〟で始まって、まず温泉。それからお酒とお料理。世の中狂気じみた過当競争と生きのこり戦争の真最中だから……。

雑賀崎漁港にあがる新鮮な魚すきである。それに地酒。

コミュニュケーションがまず先である。そして近況……消息……わいわいがやがや。

港でとれた生きている車えびが旅館からサービスされた。

ピンピンはねている。体格はまちまちであるが純国産である。それを金網にのせ、箸でおさえて焼く……。

皮をむき、口の中へ……少々残酷でありますが野性味はたっぷりであります。縄文文化的かな？

翌日。勉強（？）会が始まった。

まず、司会の又川さん、最初はパネルディスカッションも予定しておりましたが、なにしろ、芳地隆介さんから、西のゴリゴリといわれまして、指圧でやわらかくしてもらうためにもこの企画になりました。午後は、放談、討論――としたいと思いますと言われ、阿部さんのお話に入った。

言葉のしゃれ、ハメのはずしすぎ、駄じゃれのあつまりみたいであまり好きでなかったが、〝小林一茶〟をみてから、少し考えをかえるようになりました。

実在の人物を劇化する評伝劇を書きつづけて来て、〝頭痛肩こり樋口一葉〟に来たのですが、作者の作劇の仕掛け、手練手管のうまさに感心する。

〝乃木大将〟もそうであるが、馬が演じるという面白さがある。それを又、上半身と下半身のセリフがちがう。

さて〝樋口一葉〟であるが；花蛍がお盆にのみ、それも夜、現れる仕掛けになっている。

花蛍の

女　一度あの世へ足を踏み入れたことのある人、そういう人にしかわたしが見えないんですよ。

夏子　エッ？

女　おねがいしたいこともあります。来年のお盆にまたおじゃましますわ。ごきげんよう……。

その花蛍、

いったい、誰がうらめしいのかねぇ、その相手がわかれば、うらみをはらして成仏してしまうんだけどということで一葉一家にからみからみ劇が進行する。

〝イーハトーボ〟でも一人二役で農民の一人が賢治の役を演じてみる……これが井上ひさしの手か……。

〝石川啄木〟でもてんやわんや、修羅場、人生の白兵戦を書いてみせている。

井上さんは言っている。他人に対しては親切なのに、身内に対してはどうしてこう修羅場になるのか……。

三時間近くお話をきいた。皆さん、大いに参考、思いつくところ等々あったと思います。

日頃、その事で苦しんでいるのですから。

一月以降、朝日新聞西宮支店の記者殺人事件、公美子ちゃんの白骨死体事件等々とつづく。

国際的には、東芝ココム事件、包括貿易法案、中東状勢……。

とにかく、ドラマを書きましょう……。

◇　◇

（編集部より・内容は本年五月発行の六五号にふさわしいと思いますが大変おくれて届きまして本号に載ることになりました。遠からず冬になりますので季節的には合うことになりました。）

酒田演研の「場所と思い出」

高橋　寛（だいこん座）

（前略）別役実の世界は僕などの固い頭ではダメだと思っていたのだが、それがどうしてなかなかおもしろい。全くの他人が会話し、知り合い、お茶を飲み、リンゴを食べ、身の上話になり、やがて「結婚する」「結婚しない」という話までになる。これは現代人の一人一人が疎外されている状況をなんとかつながりたいと思うが、なお「つながれない」人々の願望やあせりとして見えてくる。（中略）男三人、女三名の出演だが、男1の上野博資はさすがベテランらしくセールスマンの役を確実にこなしていたし、男2の小野貢弘はとても声が良いのだからさらに技術を、男3の横山透は何よりも今後継続してほしい。女1の森田暢子は何ともひょうひょうとした味のある演技だったし、女2の菅原祥子も演技していない演技が良い、女3の金子明美のあたたかい感じが良い。演出は櫛田幸男氏。

（東北からの便りは貴重です。高橋さんからいただきましたが締切後のため抜すいして紹介しました。＝編集部）

あか鼻のピエロの行方

いずみ　凛
（劇団はぐるま）

「稽古はどんどん進めています。陳顒（チェンション）さんがいらっしゃるあさってまでに、ある程度のことはしておかないといけませんし。」

自宅の冷たい応接間で、新聞社の方が演出のこばやしひろしに取材をしている。11月20日から始まる「紅鼻子（ホンビーズ）―あか鼻のピエロ―」の取材である。

一九八二年、話劇人社の演劇訪中団に参加したこばやしは、北京で観た中国青年芸術劇院（以下、青芸とする）の「紅鼻子（ホンビーズ）」にいたく感動した。そして、いつか〝はぐるま〟でもやりたい、と思うようになったのだ。それから五年後の今年、とうとう上演にふみきった。しかも、八二年に青芸の「紅鼻子」を演出した陳顒女史との合同演出である。本番には台湾から作者の姚一葦（ヤオイーウェイ）氏の来日する予定だ。陳顒女史と共に、助手としてヴェテランの女優于黛琴（ユイタイチン）さんも来日して下さる。

「自閉症の少女によって、人と人との繋がりの大切さを出せればいいと思います。」

「お互いに会いたくても会えなかった大陸の演出家と台湾の作家が、岐阜で初めて顔を合わせる、これもとても意義あることだと思っています。」

私も台本の翻訳者として取材に立ち合う。陳顒、于黛琴両氏が来日する二日前、10月19日の午前中のことである。

そこに電話のベル。受話器をとると、北京の于黛琴さんからだった。「まだヴィザ（入国許可証）がおりません、航空券も届かない！」

実はこと数日、私たちはこの件であちこちに電話をしたり、連絡をとったりでテンヤワンヤだったのである。とっくに届いていなければならない航空券も届いていない。中国人の来日は親光ヴィザでは許されないので、手続きがひどく面倒で時間がかかるらしい。その時点で出来る限りのことをし、結果待ちの状態だったのだ。しかし、まだ解決していないなんて……。

取材はいきなり中断、あっけにとられる記者氏。さぁ、またテンヤワンヤが始まった。旅行社から外務省、中国の日本大使館まで…。こばやしと専従の加納ちゃん（加納美千子）はそれから電話につきっきりである。

本当に彼女らは来日できるのだろうか。残念ながら、今の時点では来られない要素が多すぎる。ヴィザがない、日本までの航空券が届いていない。香港で乗り換えるのだが、旅行社の話によれば、香港のヴィザがなければ航空券があっても飛行機に乗せてもらえない筈だという。

あらゆる手を尽くし、20日の午前中にヴィザを発行してもらう約束をとりつけ、航空券は再発行してもらうことになった。しかし不安は一杯だ。

記者会見で企画発表もすませ、各社の取材もボツボツ始まっているというのに、本人が到着しないとなっては、大ボケの大コケである。しかし、少なくとも21日の便での来日はムリかもしれない。誰も口には出さなかった

が、おそらく皆も心のどこかでそれを覚悟していたに違いない。

20日の夜、北京から電話があった。「ヴィザ、おりました。航空券も今日届いた！」

ずっと精神的緊張が続いていた私たちは、ホットするやら気が抜けるやら。でも、とにかくよかった、と胸をなでおろす。

21日夜、劇団員九名で名古屋空港に出迎える。ロビーで待つ間、皆で「你好（ニーハオ）！歓迎（ホアンイン）歓迎（ホアンイン）！」と彼女らを迎える練習をした。ところが一向に彼女らは出てこない。だんだん不安になってくる私たち。本当に飛行機に乗れたのだろうか……。その時、しきりに中をのぞき込んでいたマコちゃん（汲田正子）が、中に向って大きく手を振った。

笑顔を満面にたたえ、たくさんの荷物と共におふたりが出ていらした。おしゃれなモス・グリーンのコートと帽子の于黛琴さん。そして、北京ではいつもズボンだった陳顒さんが、黒いニットのスカートに、ステキなブラウスで身を包んでいる。

ヴィザや航空券のことで、陳顒女史は血圧が上がって寝込んでしまい、于黛琴さんはひとり奔走していたそうだ。

とにかく着いたぁ！いろいろあっただけに嬉しさもひとしおである。

とりあえず劇団に向かった。稽古場に着いたのは11時近かったが、旅芸人役の若手たちはまだ残って稽古をしていた。熱烈歓迎の拍手で迎える。

旅芸人のショーで使う衣裳は、トンちゃん（加納豊美）がデザインしたものを陳顒さんと于黛琴さんの劇団青芸の衣裳部で製作していただいた。早速その場で荷物から衣裳が出される。仮り縫いもなしで果して大丈夫だろうか、内心いくらか不安もあったが、着てみるとみんなぴったりだ。中国服の風あいを生かしたデザインが、本格的な製作技術によって見事に仕上がっている。

キャーキャー言いながら衣裳をつけて、旅芸人の役者たちは大はしゃぎ。ショーはこの舞台の華であり、見せ場でもある。旅芸人の一座には、劇団の中でもイキのいいところが集められた。唄にダンスに一輪車――しかし、何とかある程度の線までは見えてきたものの、今ひとつというところで、みんな焦り始めている頃だった。

衣裳の魔力とでも言えばいいのだろうか。いい衣裳は役者自身の気持ちにうまく作用するのだろう。華やかさが出てきて、表情まで生き生きとしてくる。すっかりいっぱしの芸人気分だ。

翌日から記者会見、取材、パンフレット用の座談会と彼女らの忙しい日々が始まった。子どもの頃以来、日本は初めてだという陳顒さんだが、日本の演劇界ではすっかりお馴じみの于黛琴さんが一緒にいて下さるので安心できる。夜はもちろん稽古だ。

普段の陳顒さんはボリュームのある身体に似合って、太っ腹で豪快によく笑う。気どらない、明るくさっぱりとした人だ。

中国留学中、時々青芸に顔を出していた私は、彼女の演出風景も見たことがある。厳しい表情、よく響く声、一気に溢れ出るようなダメ出し、そしてよく動く。全身で演出する。すごい迫力だ。緊張感のある気持ちのよい稽古だった。

岐阜での稽古が始まる。私など初日にはドキドキがとまらず、タバコを持つ手がプルプル震えてしまった。しかし、初めての芝居を観るようによく笑い、言葉の壁を越えてスーッと芝居に溶け込んでしまう彼女に、劇団員もリラックスしていく。初めての稽古を見終わると、彼女は拍手して言った。「面白い舞台になりそうです。こばやしさんの解釈はユニー

クで感動しました。この公演は成功すると確信しています。」

翌日からは于黛琴さんとふたりで細かくメモを取りながら、時に立に上がり、役者と一体になっての演出が始まった。ダンス・シーンでは、御自分も笑顔で身体を揺らしつつ、テキパキとダメを出す。芝居がうまくいくと、「好(ハオ)！好(ハオ)！」と親指を立てて役者に笑いかける。

陳顒さんにとって、あらゆることが新鮮な感動のようだった。まず、私たちが給料も貰わず、自ら団費を払ってまで芝居を続けていることが彼女にとっては驚きらしい。国から生活を保証されている中国では考えられないことなのだ。職場から大急ぎで稽古場に駆け込んで来る劇団員の姿が、彼女の眼には大したパワーにうつるのだ。世界各国の劇団を訪れているそうだが、やはり日本はその中でもとりわけ状況が厳しいのだろう。「帰国したら是非はぐるまのことを報告したい。」それぞれの役者を含めて、陳顒さんはすっかり〝はぐるま〟を気に入って下さったようである。

稽古が始まって何日か経った。ラスト・シーン、自閉症の少女小珍(シャオチェン)が紅鼻子(ホンビーズ)の残していった帽子を手に、彼の名を呟く。ため込んでため込んで、やっと出て来る小珍の言葉で幕がおりるのだ。陳さんは小珍役のせっちゃん（河井せつこ）のすぐ前に立って、じっと見つめている。じっと、じっと見つめる。

「……紅(ホン)……鼻(ビー)…子(ズ)……紅鼻子(ホンビーズ)……」

小珍の眼に涙が溢れる。舞台監督のはっちゃん（服部みつまさ）がパン！とひとつ、大きく手をたたく。

同時に陳顒さんがせっちゃんをひきよせて抱きしめた。黙ったまま、じっと抱きしめる陳顒さんの眼にも涙が溢れている。

彼女は本当に驚く程素直で純粋な人だ。中国を代表する演出家だというのに、それをおくびにも出さない。畳の部屋が嬉しくて踊り出してしまう。正直でストレートで感受性豊かな人。そして心はいつも熱い。

そんな彼女のパワーが〝はぐるま〟に注がれた。みんなはりきっている。合同演出のこばやしも、いつも以上に熱が入る。最近、昔のように執拗なほど役者をシボることがなくなってきたと言われていたのだが、今回はしっかりねばる。しんちゃん（藤沢伸二）は「私の為の芝居みたい」などと言っているし、ツカさん（大塚鏡子）はパワー全開迫力満点！紅鼻子役のゴローさん（なみ悟朗）は身も軽やかにノッているし、私の相手役でもあるこうじさん（三島幸司）も若返って更に魅力的だ。旅芸人の一輪車には、いまだに手に汗握るが、みんな必死に頑張っている。振付の高島くん（高島康貴）の厳しい罵声も気持ちいい。

この物語には実際に都合のよすぎる部分もあるが、それを含めて作者・姚一葦(ヤオイーウェイ)氏が〝現代の神話〟と呼ぶのにふさわしい大人の為のメルヘンだと言えるだろう。様々な人間の苦しみがあちこちに散りばめられ、唄、踊り、マジック等のショーが盛り込まれた舞台。演る側にとっては、まさに手強い相手だ。

アイヤー!!気がつけば、本番まであと三週間。果してどこまで迫れるか、「演劇会議」が出る頃には、もう本番も終わっているハズだけど……。

今はもう、ただやるしかない。

☆　　☆

劇評■

関西芸術座の新しい試み

阿部好一

ことし三十周年を迎えた関西芸術座が記念公演の一つとして「イメージ・フォーメイション4」と題する新作シリーズを上演した。関西在住の作家四人に依嘱した書き下ろしを毎週一本週替りで上演する企画、しかも公演会場は大阪の小劇場運動のメッカ、扇町ミュージアム・スクエア。というわけで、劇団にとっては全く新しく大胆な試みとなった。

関西芸術座は創立以来「自前」の芝居をレパートリー選定の原則としてきた。つまり、劇団のための書き下ろし作品か、脚色物の場合でもその原作は劇団自身が堀り出してきたものだった。だから創作劇と翻訳物とを問わず、この劇団の演目には本邦初演が圧倒的に多い。このことは関西在住の劇作家の数の少なさを思うと高く評価されてよい。今回の「イメージ・フォーメイション4」にしても、新作ばかり四本をずらりと並べた。ちょっと真似のできる芸当ではない。

そのうえに会場が小劇場運動の本拠地の一つであることを見てもわかるように、いまや関西芸術座は小劇場演劇という新しい流れに棹さそうとひそかに野心を燃やしているらしい。これまでプロデュース公演や新人公演ではそういう新しい試みも行われてきたのだが、本公演にはあまりその気配が感じられなかった。地下に流れていたその新しい水がようやく記念公演というメイン・エベントを機に地表に迄あふれてきた。まだ紆余曲折はあるに違いないが、将来この「イメージ・フォーメイション4」は劇団史の上で一つの転回のメルクマールとなるだろう。いや、そうなってほしい。

もう一つ、こんどの四本では劇団のベテラン・中堅・新人が各作品にほぼ平均して配役されていた。ベテランは新しいタイプの作品に出演することで現代の空気をかぎとるだろうし、われわれ観客としては大量の若手俳優を舞台に見出して新しい素材を発見する喜びを味わった。古くから関芸の舞台を見続けてきた知人の何人かと「関芸にもおもしろい俳優が出てきそうだな」と語りあったりしたものである。以上、多少の希望的観測をまじえての感想である。もし今回の公演が三十周年記念のメイン・エベントだからと、またぞろ大作一本立てになっていたとしたら劇団側の姿勢も慎重に且つ保守的にならざるを得ないだろう。そうなると無難なリアリズム作品に落着いていたに違いないし、これほど多くの若手が舞台を踏む機会もなかったに違いない。その意味で、冒険に踏みきった今回の企画を評価したい。

最初に上演されたのは吉田美彦作・楢崎英三演出「クラブ」（9月2日～6日）だった。「弱い男を強いヒーローに仕立てる」という宣伝文句につられて、授業に自信を失った教師（岩鶴恒義）の元野球選手（多々納斉）がクラブに入ってくる。そこではいろいろな身体訓練と「自分は強い男だ」と暗示にかける心理操作とが行われている。その訓練ぶりが

俳優の演奏する生バンドと漫画のヒーローたちの形態模写でにぎやかにくりひろげられる。

若い男性が化粧しているなどと新世代の柔弱ぶりが話題になるほどだからヒーロー待望の風潮がどこかにあるのかも知れないが、このドラマに出ているシゴキ的強化訓練はもうかなり前から現実に企業の新入社員研修や中小企業主の再教育に使われている。テレビのドキュメンタリーで何度も見たおぼえがあるが、気の弱い人間を自己催眠にかける奇妙で恐しい方法だ。いわば、このドラマよりもとっくに先に現実に行われているわけで、だから舞台を見ていても別に興味はわいてこなかったし、いまさらそこに風刺性を感じることもなかった。あの種の新入社員訓練の方法がはじめられたころなら風刺にもなっただろうが。

結局のところ教師は生徒に迎えられて学校にもどり、野球選手は家業を継ぐ。この結末がそれまでの展開に比べてあまりにリアリスチックだ。舞台がリアリズムで終わるから、こちらの感想もリアリスチックになってしまうが、そういうことで言えば勝手に学校へ出てこなくなった教師をいまさら生徒が歓迎するなんてあり得ないし、家業を継いで親孝行するというのも突然もっともらしい倫理が顔を出すみたいでとまどう。というよりも、むりやりに具体的な結末を持ってきたのが問題だろう。演劇にはカタルシスが必要だ、という古い意識が作者や演出者に残ってはいないか。

二本目は清水巌作・仲武司演出「記憶」（9月9日～13日）。中小企業の社長（溝田繁）と、元共同経営者でいまは頭がおかしくなって雑役に使ってもらっている老人（千葉保）、離婚経験のある社長の娘（中嶋洋子）、彼女とデキている社の青年幹部（亀井賢二）らが主な人物である。老人の妄想に周囲が調子を合わせているうちに、現実主義的なはずの青年幹部がふと巻きこまれてゆく。

一人の人間の妄想に周囲が調子を合わせてゆくうちにそれまで人々が確信を抱いていた価値観に微妙な動揺が起きる、といういわゆる〝妄想ごっこ〟の芝居は、ピランデルロからはじまってピンター、清水邦夫にひき継がれ、今日の演劇にはかなり多く見られると思うが、つまりは現代の人間がアイデンティティを失ったからであろう。私たちはもはや確固不動の信念など持てなくなったのである。清水氏もまたそういう今日の人間のうめきに敏感な人であって、この作品が単に時流に乗ろうとしたものでないことは氏の過去の作品を見ればわかる。

ただこの作品では老人の過去の記憶の性質や痛みの深さがもう一つ明確でない。決して説明を求めるのではないが、もう少しはっきりしたイメージを観客に与えられればもっと引きしまった作品になったに違いない。なお、こまかいことを言えば、社長の娘と青年幹部の対話の口調（セリフの書き方）に一定でない部分があり、それが二人の関係や感情を少しあいまいにしている。

俳優の表情やセリフがこのホールの寸法に比べると大き過ぎる感じがした。もう少し、こまかくしみじみと演じた方がいい。溝田は表情がやや過剰で、この小さなホールではパターンに見えてしまう。中嶋の演技がこのホールに合っていたのではないだろうか。

三本目は矢田嘉代子作・岩田直二演出「奈落の神々」（9月16日～20日）。明治だか大正だかの筑豊炭坑。馬で石炭を坑外に運ぶ捨吉（北見唯一）と〝人繰り〟と呼ばれる監視役の荒くれ男辰二（山本弘）。捨吉は無類の好人物で酷使されながらも脱走など夢にも思わぬ男だが、元遊里の女（落合智子）を助けたことが契機となって無意識のうちに自由の

世界へ飛び出してゆき、辰二はそんな彼を見のがしたためにリンチをうける。

私の周囲ではあまり評判がよくなかった。「古くさい」「もう、わかっている」といった声を聞いた。炭坑労働者の悲惨を描いた一時代前のリアリズム演劇、というふうに解釈されたのであろう。だが、私の考えは別だ。その種のリアリズム演劇なら、捨吉は「解放への夢を抱きながらも抑圧されている男」としたほうが筋が通る。捨吉が自由なぞ夢みたこともなく、馬との間に童話的な感情の交流があり、さらにドラマの外枠として阿呆陀羅経の男（松田明）を登場させたことで、私には筑豊説話の一つのように見えた。二人の男の転身のきっかけがいずれも女性である点、いかにも女流作家の筆である。演技陣では落合がいまどき珍しく古風なふんいきを見せたのが印象に残った。問題は二人の男の肉づけなり関係であろう。北見は楽々と演じているように見えたが、捨吉の人のよさがかえって辰二をいらいらさせるといった感じがほしい。山本は二度ほど表情がなごむ瞬間があって「いいな」と思ったが、最後は大芝居になってしまった。辰二自身の解放の夢が捨吉に託されたのだとする解釈が演出や演技にもっと見えてもよい。

最後に、重光透作・上利勇三演出「紫煙の彼方に」（9月23日～27日）。今回の四本のうちでは最も派手で、にぎやかで、当世風。何より才筆である。その点では、東京の若手作家と比べてもひけをとるまい。

新興の都市にたった一軒残った小屋。それは劇団のけいこ場だが、同時に終戦直後の混乱と人々の怨念の未だに残る場でもある。その古びた小屋に謎のにおいをかぎつけて自称作家の大貫（芝本正）と彼のファン星子（酒井雅子）が探険にやってくる。やがて座長鳩子（和泉敬子）劇団員光子（田中恵理）と星子をめぐる古い関係が明るみにさらされる。暗い戦後の怨念をいまも背負い続ける鳩子と現代の新人類星子、その中間の光子、それぞれの時代に対する姿勢。そのうえに現代のテレビ制作の狂騒がからみ、すべてを風俗化する現代マスコミの側面がのぞき、ドラマは目くらましのようにもつれにもつれる。

私には鳩子の言う「時代に対する復讐」という意味がつかめなかった。だから、このキー・ワードが少々大げさで空転しているように思えた。だが、現在を過去の目でながめ過去規範に押しこめるのではなく、今日を今日として新たな出発点とせよ、という作者の主張はよくわかったつもりである。劇の中に劇を二重、三重に仕組んだドラマツルギーの複雑さもアンデンティティを失った現代人が現実の重さを感じなくなってしまった状況と対応していて、私にはあるていどの実感をともなったおもしろさがある。いまの小劇場演劇にはこの種の入れ子構造を持った劇がずいぶんたくさんあるし、先の清水氏の「記憶」とも共通点がある。演技では芝本の軽妙さと和泉の座長としての貫録と新人・酒井の個性の新鮮さが印象に残った。

劇評■

観劇雑感

――青年劇場・東京芸術座・劇団銅鑼 劇団河童（北見）・劇団あしぶえ（松江）――

萩坂桃彦

「テントの中から星を見た」（青年劇場）

〝滑稽なほど真剣に書いた〟という、公演リーフレットに見えた作者の言葉が印象にのこった。そういえば、一九六九年から七〇年代の前半にかけて数年間ブームを呼んだ同じ作者の「若者たち」もどこか滑稽なほど真剣であったし、つづいて青年劇場にとっては二作目の「わが街・わが愛」についても同じことが言える。

こんどの本では親と子、夫婦の家庭における不毛な関係にかさねて教育の問題を投げかけている。

十八歳の大学受験浪人の真人は、何としても東大をと強いる両親の圧迫から逃亡を企てている。真人の父親は、十五年戦争の昂揚期に生まれ、八紘と名づけられた人物で、現在海外勤務のエリート商社マン。家長である祖父の日下一成は七十歳を迎えた小学校の元校長。紫綬褒賞の話で浮き立っている。一成の妻貞は、これまた人一倍のエリート志向、家の中いっさいをとりしきっているしたたか者である。ところが降ってわいた孫真人の家出、そして三十歳にもなった長女の忍の恋愛沙汰、相手は年下の、手作り絵本作家、それでは喰えないので生業は屑屋というしろもの、しかも忍はすでに普通のからだではない。

頬かむりして戦争に協力して、ひたすら保身と栄達をはかってきた一成と、その偽善者的な教育に染め上げられた八紘の出世哲学に対して、忍や真人や、父親の七光りで中学校の教師となった小心な次男の和平たちの抵抗である。この拮抗はもう少し輪がひろがる。共稼ぎで同じ教員である和平の妻の友美、息子真人と夫八紘の間にあって、そして姑貞に痛めつけられている圭子、圭子のあわれさが見るにしのびない圭子の姉茂、さらにその息子の金吾が同年輩の真人と結びつく。茂の家系は、出は旗本だが武士をきらって豆腐屋になったというさっぱりした気性の小母さんだ。

作者（山内久）が、滑稽なほど真剣に書いたというのは、以上の人物たちが、それぞれの立場で一歩も譲るまいと必死になっている姿を、いささかの曖昧さを残さず書いたということである。

この作者の姿勢に共感をもつ観客もあったと同時に、その劇構造の仕組み、わけてもいろいろに受け持った登場人物の配置の出来すぎに首をかしげるのも一つのあらわれであった。ぼくは後者である。

それは登場人物の腑分けの鮮やかさに俳優たちが足をすくわれるかたちで出てくる。作者の思想と俳優の肉体の葛藤である。これは、その舞台に預けた作者の賭けであるかもしれない。一つの例が正義を唱える役の俳優が悪の側に立つ俳優に及ばぬことだって生じてくる。その場合、作品はいびつになって観客に映じてくるだろう。

「テントの中から見た」が全くそれであったというのではないが、八紘（青木力弥）と真（守川くみ子）の迫力のもったリアリティは彼らを否定的人物と見なすのに骨が折れる。

こういう張りつめた劇の中には笑いも必要だろうが、お腹にこどもを宿した忍（藤木久美子）が、年下のひよわな恋人の前にはヨヨと泣きくずれるのに、居丈高になってとびかかってくる屈強な兄貴（八紘）を一撃のもとに張り倒すなどは、別の笑いの質である。

なにも理詰めで芝居をつまらなく考える必要はないけれど、やはりこの劇を一成の死で括るのは、折角そこまで蹤いて来た客の気持ちをストンと落す。

題名は屋敷の庭にテントを張って抵抗している真人の孤独の姿を藉りたのかもしれない。真人は結局、父八紘の生き方を理解して、愛の深さ、ひろがりを叫んで終る。真人（安部英一郎）と金吾（吉村直）の若者が熱演。演出は堀口始、山の稜線と一成の屋敷をキッカリときめていた装置は園良昭。

（9月10日　朝日生命ホール）

「ベルナルダ・アルバの家」（東京芸術座）

文句は言えないが座席が可成り後方の左端、視力が衰えているのでこたえた。しかし話はよくわかった。セリフが通ったからである。

この芝居、女優さんばかりで、ハリとドスのきいた女主人公ベルナルダ（関京子）を柱に、それにおとらぬ気概の女中ポンシア（相生千恵子）以下、五人のアルバの家の娘達が明晰な軌跡で熱っぽくロルカの物語を描く。

おそらく衆知のことなので改めてストーリィを語る必要もないが、その上でなおかつ簡単に紹介すると、場所はスペイン、アンダルシア地方の農村。夏である。裕福な地主のアルバ家では主人のアントニオが死去、その喪に服する一家の支配は寡婦となったベルナルダである。この家にはベルナルダのほかに母のマリーア・ホセファ（清洲すみ子）、長女のアングスティアス（崎田和子）、次女のマグダレーナ（川村千鶴とダブルキャストでその日は田中昭子）、三女のアメーリア（影山三紀子とダブルでその日は田中好江）、四女のマルティリオ（田口真美）、末娘のアデーラ（荒木かずほとダブルでその日は小柳英理子）、つづいて重要な役は先に書いた女中のラ・ポンシアである。

喪中の娘たちにたった一つ空気のかよう窓がある。それは三十九歳の長女アングスティアスとペペという二十五歳の男との婚約で、婚礼を三日後にひかえている。ペペの承知はどうやらアングスティアスの持参金めあてらしいが、ベルナルダの反対をおしきって強行されようとしている。ところがこれが簡単にはすすまない。実はペペに焦がれているのは末娘のアデーラなのである。四女の、猫背のマルティリオも異常だ。ペペとアデーラの情事を嗅ぎつけて嫉妬の炎を燃やしている。

牢獄さながらのアルバの家の中から、五人の娘たちが若いわが身に春を呼ぼうとするのがこの芝居に宿したロルカの思想である。宿命を呪い、本能の欲望をかきたて、反権力に命を賭けるのがロルカの世界だ。

演出者（高橋左近）はロルカの魅力について「ベルナルダは〝喪の季節の間は外の風は入ってこず、扉や窓は塞がれてしまったと思え、その間にお嫁に持っていくものを作っておくといい〟と娘たちに宣するが、娘たちにとってそれが何を意味するかと言えば、女であることを切れという命令だったのだ。若い彼女たちは女としての血が自然に条理に従って脈打ち、本能的衝動にうごめいているのである。その彼女たちの意志が、母親の宗教的

伝統に則した高圧的意志と相違うことは明白である。このドラマの魅力の第一は、この二つの意志の激しくぶつかる、そのダイナミックな葛藤である」とおさえている。

ほとんどこの言葉に要約されているが、ロルカの思想もさることながら、ひとりひとりの登場人物のセリフにもられた、スペインならではの豊富な、農村の生活言葉の奔放さが魅力だ。（訳・堀内研二）とくに女中ポンシアの放つ言葉が凄じい。かの女と主人ベルナルダと向き合う場面が何回かあるが、様相はタイラントと奴隷の図を呈するけれど、タジタジとなるのはタイラントである。ベルナルダは権力者の矛盾を抱えて喘ぐ虚像である。観ていて、かの女の崩壊をのぞむのだが、舞台は関京子の見事な突っぱり（しかし絶望をやどした）で幕が切れる。

夜中に白い寝巻（ガウン）着姿で、枕を紐でひきずって〝男恋しさ〟を唄いながら夜遊びにまかり出る祖母のマリーア・ホセファ（清洲すみ子）のかたちが何とも象徴的だ。それは悲劇のなかに喜劇を織りまぜてみせるロルカのにくらしいほどの技巧である。

（9月20日　砂防会館ホール）

「燃える雪」（劇団銅鑼）

原作（及川和男）の「村長ありき」を読んでいないので精しいことは言えないが、パンフレットの中の〝沢内村「いのち」の年表〟が、この劇の内容を余さず語っているように思う。

昭和二九年の沢内村婦人連絡協議会結成にはじまり、深沢晟雄氏が教育長に就任、〝いのちの村政〟がスタートする。水害や凶作を背にして、乳児死亡率の半減運動、昭和三二年には深沢氏が無競争で第十代村長に。そして手を着けたのが、村民困窮の三つの元兇、病気・貧乏・雪の中から先ず〝豪雪克服〟である。信じがたいほどの若しい村の敗政の中から除雪兼農地開発のブルトーザーを購入する。昭和三三年、沢内村単独で七十歳以上に養老手当を支給（年額一、二〇〇円）。昭和三四年、岩手医大生による夏季保健運動を誘致。昭和三五年、乳児死亡率三分の一に。六五歳以上の老齢者に国保十割給付。昭和三六年、深沢氏対立候補を三〇五票引きはなして村長に再当選。昭和三七年、移動村民室一三ケ所を新設、乳児死亡率ゼロの記録をなしとげ、昭和三八年、豪雪突破、盛岡・湯本間に定期バス開通。この年沢内村が保健文化賞を受ける。昭和四〇年、深沢村長、ガンで死亡。村葬を執行。勲六等瑞宝章を授与さる——。

以上の簡略年表でも伺い知ることができるように、まさに、よくもかかる〝村長ありき〟の感銘をうける。

劇団銅鑼の作業（台本・大峰順二、演出・早川昭二）でよかったのは、この村長をいささかも英雄・偉人視せず、現実をみつめつくすことの中にこそ理想が生まれるという質の高い命題に固執しつづけたことである。つまり、それを具さに砕いて、迷い、悩み、苦しみ、岩手県の山間の僻村の完璧ともいえる民主々義の達成に殉じた一人の人間として描いたのだ。

舞台にあわせて少し書いてみる。

先ず緞帳に裏打ちして紗幕のスクリーンいっぱいに川内村（沢内村）の四季を映し出す。さんさ踊りの民謡を流して導入するのである。

やがて舞台端に、健康号という、病院から迎えにくる無料バスを待っている老婆ウメ（藤原裕子）の〝だば、皆さんゆっくり芝居観ていって下さい〟のセリフが明るい。これは現在（昭和五七年）の川内村の姿である。そして年表の昭和二九年の村の姿に入っていく。

そこに徳兵衛一家が据えてある。徳兵衛（陶隆司）、女房ウメ、息子徳三（河野修司）、嫁ハル（高畑すみ子）、孫にあたる中学生の茂（横手ひさお）と松子（杉山ふみえ）の家族だ。茂は中学を卒えたら盛岡に行きたいという。こんな村イヤだとセリフに叩きつけている。徳三は年越しの金稼ぎに東京にゆくらしい。国保の保険料の集金に係の清造（千田隼生）があらわれるが徳兵衛はニベもない。

村役場の全景がスクリーンに映る。

農協の佐山（加藤忠）が村民に副収入のためにナメコ栽培をすすめているが、村民の慾がバラバラで逆に買い叩かれてしまうので、何とか一つにしたい、したいが自分にまとめるちからがない、それが出来るのは、婦人連絡会議や広報活動やらで人心をつかんでいる教育長の深田（森幹太）しかいない、ナメコ協会の会長をひきうけてくれと泣きつくのである。

村のために一所懸命になっている、こんな佐山、そしてもう一人あの国保の清造を見ていると、深田はつくづくこの村に帰って来てよかったと思う。彼はこの村に生れはしたが、満州にわたったり、戦後は九州に寄り道したりして決してこの村のいい息子ではなかったのだ。

昭和三二年、深田は無競争で村長になる。彼が手をつけたのは雪とのたたかいである。ブルトーザー購入は村財政を破壊するものだという村議南（村岡章）、彼につづく議員たち（西田圭、平野幸一郎）の抗議もさかんだ。

その頃、村営病院で不祥事がおきる。盲腸患者に手術を施した医師が麻薬中毒症で、患者を死に陥しいれてしまう。村長はその医師を送りこんで来た大学に抗議して縁を切ったという事件である。これを岩手日報の記者田村（出野孝路）が記事にしようとする。

村長の苦悩はふかい。そんなことが世に知れれば村の病院に来てくれる医師は一人もいなくなってしまうのではないか。田村は事実の報道をさしとめる権利は誰にもゆずらぬと拒むが、眼に泪をいっぱい宿して頭を下げる村長に田村はうごかされるのである。このシーンは感動を呼ぶ。

もう一度それがある。岩手医大から派遣されてきた三ケ月契約の医師加山（佐藤文雄）が、村長から、村民の健康はあなたに任せてあるといわれ、それ以上に老人医療を無料にしたいという村長の決意のたしかさにうたれて、村での居留を決意するシーンである。

今は厚生課長になった清造や保健婦トミ（平口信子）、橋本（山下智寿子）の万歳の唱和がいかにも美しい。

さらにエピソードのもう一つ、二つ紹介しよう。昭和三六年の村長選挙、深田対古い村のボスどもの結束渋山の間でたたかわれたが、その結果のわかる投票日の翌日、徳兵衛の家の光景がおもしろい。

渋山の運動議員が当選確実の先き触れにくる。徳兵衛は地元のつながりで一家確実に渋山さんですと安心させて帰えす。ところがだんだん様相があやしくなってくる。女房のウメは湯のみ茶椀を口にもっていってトボけている。息子の徳三は迷ったあげく白票にしたという。嫁のハルはハッキリと深田さんだという。何のことはない、渋山に入れたのは徳兵衛ひとりである。こんなことがどこにもあったらしく深田は三〇五票の大差をつけて再選される。徳兵衛の狼狽ぶりを陶隆司がナントモうまく出した。

無料診療で老人たちがいっぱい集まった病院の待合室のシーンがある。〝無料〟がもちこんだ珍風景である。薬をしこたま手提袋にいれてみんなにわけてやるのだと言っている

話としては筋の通っているお婆さん、あいつにうった注射をおれにうってくれぬのは不公平だと怒る、これもどこか筋の通っているお爺さん。何よりも小さな村の中なのに、何年ぶりかで会った年よりたちの歓声。

さて最後に、題名の示すとおり〝燃える雪〟の凄じさを描くシーンがある。照明、効果、音響、映写の効用は、ぼくなどの昔のしごとを思うと昔日の感にたえない。

久しぶりに好い芝居を見たと思う。何よりも、ルポルタージュも徹すれば芝居になるということだ。深田にとぎすまされすぎて形影相伴うはずの妻アキ（菊地佐玖子）のしどころの尠いのが惜しかった。

（9月26日　朝日生命ホール）

「津軽姥捨口伝」（劇団河童）

津軽の山深い村に言いつたえられた昔話というつくりである。口伝はクデンではなくコウデンと読ませるという。

その村では七十歳になるとお山に行くならわしである。またその齢にみたないうちでもその家に曾孫が生れると同じ運命が待っている。

タツはまだ七十歳に間があるが、孫の伸吉が嫁をもらうと言い出した。というより、はるという娘と深い仲になっていて、身ごもってしまっている。はるの母親に談じ込まれてタツ一家はどうしようもない。

悩むのはタツの息子の、当主の松平である。これを受ければ、いづれ母親は曾孫を持つことになり姥捨のならわしに従わなければならない。なんとしても母親が可哀いそうだ。かといって伸吉の既定事実もさけられない。そこで考えたのは、はるに生まれた赤子は川に流すという条件である。これもこの村では珍しいことではない。晴れて夫婦になりたいばかりに伸吉とはるは承知する。生まれてくる子がどちらかわからないので男と女の人形をつくったりしている。川に流すときに男の子だったら女の人形を添えるのだろうか。たのしそうに語らいながら、タツとはるが人形づくりをしている光景は、妙に哀しい。

傍の人物だが重要な役で、隣家の仙助（布施茂）というのが出てくる。姥捨の齢にスレスレだ。彼はまだ一年早いと云いつくろってお山ゆきを渋っている。この仙助が長雨のつづく村の大雨の難が逃れるための人柱に擬せられると話は一寸わかりにくい。人柱は生き埋めにされるのである。仙助の伜夫婦は親思いで、人柱にされるよりはお山ゆきをすすめる。穴あき銭と煎り豆をいれたヅタ袋を持たせるのである。

はるに女の赤子が生れた。産声をきくと同時に伸吉は産着に包まれた赤子を抱えて川辺に立つ。狂ったように納屋から匍い出てくるはる。必死に頼むのだ。おらの子だ、流さないで、おら、その子を育ててえ――。

タツはお山ゆきを決意する。

ここまでが第一幕で、第二幕は、雪の降る深い山峡を、背負い子に母親を乗せて、重い重い足をはこぶ松平の姿である。このシーンは深沢七郎の「楢山節考」でも既に見て来た。

全幕は通して十景ほどもあったろうか、いづれも短い暗転でつないでゆくが、これを、殆んどそれ自体独立したかたちで、津軽三味線の演奏（堀隆二）でふさぐのであるが、聴く耳をもたないものには、むしろ勿体ないほどだ。

装置（川名征一ほか）は徹底した写実で、第一幕の山の遠景のたたずまい、峰の樹立を縫って降りてくる小径、松平の家にさしかかるところの丸太橋、その下を流れる川のせせらぎ、松平のすまいの水場、裸床板だけの居

間、離れの納屋など、かまどやいろりにも火のゆらめきをしのばせてスキがない。ホーッと溜息が出るほどだ。第二幕の深い山の岩肌や深々と雪を頂いた山頂の姿も丁寧に出す。どうやらこの装置、東京のこの頃のナンニモナイ舞台に対して挑戦的である。

キャストも粒をそろえた。タツはやさしさと愛らしさをふくみながらさいごにシャッキリと腹をきめる立役だが劇団河童のママさん石原みつ子さんが受けとめ、息子の松平（波多野定雄）も重厚である。幕切れ近く、山の岩の上に母を置いて降ってくる姿に、貧しく哀しい農民の悲しさをやどして見せた。

伸吉（清水聡）とはる（石谷美代子）のコンビはチグハグだが、どこかしっかりと夫婦に見えるのがいただける。はるは女房になってからがよく、おらの子を川に流さないでくれと泣き縋る姿が真卒だ。伸吉の妹千代（後藤美紀）がなかなかいい。貧しい農家の娘らしからぬ気転のききすぎはあるが、暗いはずのこの芝居に唯一の明るさをもたらして効果的である。はるの母親ハマ（竹安敦子）は横顔に終始したチョイ役だが光っている。

仙助は難役である。いろいろ苦しい瀬戸際に立たされる場面が多く、なにもかもひとりで始末してゆく。演出（扇谷国男）はこれをやりぬかせるのである。かつて、芝居にならないところを芝居にするのが扇谷さんだと言ったことのあったのを思い出した。

正直、びったりと地についた方言のセリフはわかりにくい。とくに物語の欠かせない部分は方言にこだわらず、はっきり伝えることはさしつかえないことだ。作は扇谷さんとコンビの石上慎さんである。

（10月11日　東京・三百人劇場）

「落ちこぼれの神様」（劇団あしぶえ）

「地域劇団東京演劇祭」というのが毎年、文化庁の芸術祭の名目で、現代演劇協会の三百人劇場で催されているが今年がその三回目である。これまでに「鰯の海」（テアトル・ハカタ）、「カチカチ山」（潮流）、「仙女たちのシンフォニー」（四紀会）を見ることが出来た。今年もこういうチャンスでもなければ見られない、北海道北見の劇団河童と鳥取松江の劇団あしぶえに出会うことができた。見られたということに限って言えば有難いわけである。

東京の舞台を一度は踏んでみたいという地域劇団の渇仰は何なのだろうと思ったりもするが、それにしても大変な償いを要するだろうと思う。観客をあつめることなどもその劇団に任せられるとなると、ひとごとに思えない。割りあてられた二日間の客席を満員にするためには全く別の考案が必要だ。ただ場所を与えられただけでは可哀そうである。

劇団あしぶえは「落ちこぼれの神様」を携えて上京して来た。客の入りもそれほど悪くない。教育問題ということで劇団の根回しが効いたのであろうか、お母さんたちの参加が多く見られた。

芝居はわかりやすい。逆にわかりやす過ぎて困るほどである。夜間中学のリアルな描写と見るには問題を感じるとは、同じこの作品の、劇団きづがわの舞台の感想で今泉おさむ氏が指摘されたところである。

園山土筆さんの本は原作となっている松崎運之助氏の著書「学校」とどんな関係で成り立っているのかわからないが、たとえば、生徒には衣料品店の店員で四五歳の井上守夫、オモチャ工場のハンダつけで六二歳の市川竹子、天ぷら屋の主人で四二歳の山下コウジなどなどが出てくるが、一様に漢字には文盲という設定がある。木にはじまって、林、森が

彼らにとって初見なのである。どうあれこれだけ人生経験のある人たちが、いくら無学とはいえ、こんなかたちで割り切って見せられてしまうとホントかなと思ってしまう。

だからあれはウソだといってもはじまらないのである。誇張されたパロディであり、アンチ学歴社会のメルヘンと思うしかない。リアリズムのせんさくをしていると芝居の印象が逆、逆といってしまうので、この種のこだわりは捨てることになる。捨ててみるとこの芝居の狙いがわかってくる。

作者の言いたかったのは、この夜間中学にあつまった学校教育の（人生社会のではない）落ちこぼれたちのかもし出す、人と人との肌のぬくもり、たすけ合い、そして歪んだ教育制度へと怒りのバクハツなのだ。

感動的場面はこんなかたちで出てくる。入学式の日、マッサージ見習の四六歳の加藤好春が詰襟の学生服を着てあらわれた。入学案内に制服着用とあると彼の客の田中という男にかつがれたのである。おもしろがって見に来たその男に、山下コウジと井上守夫は、加藤に謝れと強硬である。井上はその田中に、あんた学校どこ？ときく。産業大学と答える。すると井上は〝なにかい、ダイガクじゃそういうことを教えないのかい？人の道だよ〟と詰めよる。捨身で怒るコウジや守夫にはジーンとなる。

また、一五歳の山田ヒロシは昼間中学からの落ちこぼれである。先生からも仲間の生徒たちからも見離されて、ハジキ出されて行場を失った少年なのだ。その彼がこの教室で甦えるのである。つまり彼のような生徒だけを受けいれる夜間中学への模様替えで、中、高年令の生徒は閉め出され、学級閉鎖となる瀬戸際に、この教室を潰さないで下さい、ぼくもがんばって昼間の中学に戻ってみせます、と誓うのである。つまりヒロシは能力の上での落ちこぼれではなかったのだ。彼をハジキだしたのは別の何かなのだと作者は言いたいのである。

作品の設定には前にふれたように現実ではありそうもない場面がいくつかあった。そこで笑わせたり、感動させたりという仕組みであるが、問題なのはそうした人物の役づくりである。どの役もなかなかうまいと思う。ただそのうまさへの傾斜が内面的形象ではなくて、誇張された外形へとらわれてゆく懸念をかなり感じた。そういう計算され、準備された芝居は逆に客席を醒めさせてしまいかねない。井上守夫（さだしょうへい）の好演も、そのスレスレというところだろう。

作者のねがう作品の中でのシンセリティをかっきりとうけとめて、そして可成の水準で感銘をつたえることのできたのには、担当の松崎先生の津田恵一郎の説得性をもった表現力に因ったと言えたかもしれない。

教員室と教室の転換をスピーディに見せた装置は孫福剛久氏であった。

（10月18日　三百人劇場）

劇評■

祭りはそれぞれに……

——中部ブロック・7月～10月の上演から——

丸子礼二

(1)

昨年左手を痛め、一年がかりでやっとよくなって来たら、今度は右手が悪くなった。動きかたによって激痛が走る。右のポケットの物が出せない。服に手を通せない。あくびやのびをするとズキンと来て、暫くの間痛みが尾を引く。特につらかったのは夜寝る時右腕が身体の線より下ると、突っぱった様に痛み出す。眠れない……

八ケ月程電気治療に通い、少しよくなって、横になっても痛みが来なくなった時の嬉しさ、のびが出来る幸福感。健康な人には全くわからないだろうが、この所世界は私にとって全然異ったものだった……

たかが右腕一本の痛みで、これ程である、もっともっと大変な痛みを心と身体にかかえている人々が沢山いる。この世はドラマにみちみちているのではないか、と思う。

(2)

さて、7月～10月の上演（私に知らせていただけたもののみ）は以下の通りである。

劇団夜明け　第4回親と子の劇場（№23公演　7／11・12　中津川文化会館　7／19　恵那文化センター　さねとうあきら作　鈴木弘文演出　「ゆきと鬼んべ」　中部ブロックゼミナールモデル上演　9／5　津市青少年野外活動センター　岡安伸治作　鈴木弘文演出　「太平洋ベルトライン」

劇団すがお　創立25周年記念　第38回公演　桑名市制施行50周年記念協賛　7／11・12　桑名市民会館　大野章・伍藤かずよし・水上貴史作　伍藤かずよし演出　「夏の夜空に、わが街・桑名—」

劇団はぐるま　第75回公演　なつやすみ親と子の劇場№16　7／18～20　岐阜市民会館　E・ファージョン原作　こばやしひろし脚色　汲田正子演出　「魔ノ森の黒鬼と銀のシギ」

（追加）憲法40周年記念　5／2　岐阜市民会館　ふじたあさや作　こばやしひろし演出　「今日、私はリンゴの木を植える」

劇団名芸　第7回天白こども劇場　7／24～26　名芸平針小劇場　栗木英章作　皿井重典演出　「走れ冒険」

劇団名古屋　創立30周年記念公演第2弾　アトリエ公演その1　8／6～8　稽古場　岡部耕大作　江瀬蘭望演出　「精霊流し」

名古屋演劇集団　研究所第24期中間発表　10／13　稽古場　水上勉作　北原雅子演出　「ブンナよ木から下りて来い」

劇団四日市　四日市市制九十周年記念協賛　10／24・25　四日市文化会館第2ホール　田中十九郎脚本　菊本健郎・森けんろう演出　「人情赤提灯」

…上野市民劇場と岡崎演劇集団はこの期間公演がなかった。尚、番外として、加盟あと一歩まで来ている（と私達は思っている）一劇団を加えさせていただく。

劇団津演　津リージョンプラザオープン記念　8／9・11　お城ホール　M・メーテルリンク原作　西田久光脚色　山本賢司演出　「青い鳥87」

(3)

ゆきの村は三年ごしの日でり、田んぼのイ

ネも畑の豆も、サトの者全部の命が危ない。
山の墓の番人デエデラ坊に、日でりの原因が竜神の熱やまいにあることを聞き、ゆきは二度と帰れない事を承知で竜神に会いに行く。
山鬼の鬼んべと仲よしの小太郎天狗は、ゆきを救うためには竜神を退治しなければならないと山んばに教わり、勇気を出して山奥へ。
実は山んばは鬼んべの母で、竜神の化身、人間界の苦しみを背負って熱やまいになり、鬼んべが早く一人前の勇気を持って、新しい竜神になってくれることを願っている。
鬼んべは竜神を倒し、里には待ち望んだ雨が降って来る。さねとうあきらの名作「ゆきと鬼んべ」であるが、内容はかなり難しい。
ゆきのやさしい歌声に竜神がよろこんでいる場面のあとで、知らぬこととはいえ、鬼んべは親を殺してしまうわけだし、〝間引き〟のため地に埋められた赤ん坊達を集めて育てるデエデラ坊という存在も、今の子供達にはわかりにくい。劇を見た後で、いろいろ質問されて困るお母さん達がいると思う。
夜明けの舞台は若い人達が精一杯やっているという感じでそれなりに好感が持てた。
ゆき（代田千夏代）、鬼んべ（林いづみ）小太郎天狗（桑原節子）それぞれ、熱演で迫力があったが、セリフの切れ、表現力はもう一つくっきりとしない。子どもの劇の演技は明確に、大きく表現できることが必要だろう。
ゆきの父親藤太のベテラン内木繁が、出番は少ないが、面白味のある存在感を出していた。見習ってほしいものである。

(4)

劇場に入るとロビーに展示された〝戦争展〟の数々の品に眼を奪われた。
モンペ、防空頭巾、雑のう、火叩き、焼夷弾のカラ、軍服、寄せ書きの黒い字で埋った日の丸の旗…四十数年前の記憶が現われて、しばし、考えこんでしまった。
そして幕が上ると桑名市民会館の広い舞台一杯のヤミ市である。ぞろぞろと敗戦後の人々が通る。ヤミ屋、やくざ、浮浪児、復員兵、遺骨の白い箱を抱いた人…アメリカ兵にもつれて歩くパンパンガール…百人もの出演者を集め、その情況を作った桑名の人々の努力に敬意を表したい。
「民子じゃない！民子！」「ミー、知らない！」のやりとりから…教師野村（石垣正司）の家に舞台は移る。転換の間、傷痍軍人のやるせない物乞いの歌がつなぐ。
パンパンガールになっていた娘民子をなげく母さとを含め、野村の家に集まる人々、その回想から、空襲の夜に舞台は変る。火に追われ逃げまどう人々、炎上する校舎（しかし、体験者である私には、この〝屋台くずし〟は少々チャチに思えた）菊の紋章をつけた銃を運び出すことを人命より大切にする将校…背負っていた赤児の死に気づかなかった自責から火の中へ飛びこむ母親…
場面は敗戦直後へ戻り、戦争に協力した自分を責める野村…人々の思いは復興のため、気持のより所を求めて、伝統のお祭りを復活させようという声になり……
エピローグ、石取り祭の山車が、勇壮に舞台を練り…芝居が終っても、一度始めたおはやしは終りまでやるきまりだそうで、ロビーの外で、山車が練り、ロビーでは〝すいとん〟の店と戦争展の続行…夏の祭りの雰囲気の人々が去りがたく群れていた。劇団すがおの「夏の夜空に―わが街桑名」は狙いどうりの盛り上りを見せたといってよい。
ただ、ヤミ市と石取り山車に圧倒されてかセリフの通りが悪く、特に野村先生宅の人間関係の部分は何がどうなったか、一寸はっきりしなかった……

(5)

美しい娘ドーリは麻糸を十二かせ、あっと言う間に紡ぎ上げるという働き者…という誤解がもとで気ままなノンケルス王様のお妃に。実は糸を紡いでドーリを助けたのは魔の森の黒鬼だったのだ。〝一年たったらオレの嫁になってくれ！〟という強引な約束で……
黒鬼をやっつけるには名前を当ててやれば消えてしまうというのだが、これがなかなか解らない。妹ポーリと友達チャーリーと、彼らに助けられた月の国から飛んで来たという不思議な銀のシギが魔の森へ忍びこむ大作戦…シギは実は月の国のお姫さま…名前を当てられた黒鬼〝トム・ティート・トット〟は消え失せ、ドーリは本物の糸紡ぎの名人にしてもらうというお話。イギリスの童話ファージョンの「銀のシギ」を第16回を迎えたはぐるまの親と子の劇場はかなり楽しませてくれた。充実した演技者達とスタッフの力である。
美しく、おおらかなのでなまけ者だが、にくめない人柄の姉娘ドーリ役の古田敦子が役柄にうまく合って、歌もセリフものびのびとじて、なかなかいい。「マイフェアレディ」でもやらせたいようなスケールの大きさを持っている。対照的にきびきびと動く妹ポーリのいずみ凛も楽しく、小鬼に変装して魔の森に忍びこみ、小鬼の就職試験でバレそうになりながらの群舞は傑作。黒鬼のなみ悟朗も、一面の人（？）の好さを見せて、童話の世界の敵役としてうまい。地味な所で、宮殿の侍女達の忙しい動き回りが、これも好演の乳母ナン（荘加真美）にひきいられて面白い。
姉妹をふくめて五人の母コトリング（松久美保）愉快な気ままぶりのノンケルス王（高島康貴）と数え上げていてはスペースが足りないが、とにかく今回は役者がそろったと感じた。（実はまだかなりのメンバーが出ていない。はぐるまの陣容は大きいのだ）
欲を言えば銀のシギの美しさが、もっと沢山舞台に出てもいいが…やはり欲か。

(6)

八月十五日―盆―精霊流しの夜。一人暮しのおばば（ごとうてるよ）と行き倒れ同様に泊りこんだ女（西島知佐）との重く流れる対話。現在の怨みに死を思う女と過ぎし怨みを力に生きつづけるおばば…女どのふるさとはどこじゃろかい……
創立30周年記念公演の第2弾を稽古場で、そして30年の思いを、岡部耕大の女の執念を描く作品で…老朽したバラックを直し直し、幾つもの佳品を生み出して来た稽古場によしず囲いに蚊遣りをたいて…ベテラン二人のイキは合っていたし、わかりやすいと思った。
女性のうらみつらみは男である私にはどうもよくわからない。わからなければ、自分に都合よく解釈し、勝手な行動をとり、新らたなうらみつらみを呼ぶのだろう。松浦をえがく岡部作品を観せられる度に、何となく、じゃあ、どうすりゃいいんだと開き直りたくなるし、そこが向うの附目でもあるだろう。
精霊流しの場合、傷ついた女を、自らの傷をさらけ出すことによって、救うと共に自分も孤独から救われたいというおばばの心底が次第に明らかになり、海を眺める二人の女性の思いにもいくらか共感でき、ホッとしながら、ごとう、西島の努力に拍手を送った…もっとも、おばばはもっと年寄りらしく老け、女はもっとシャープなつきつめ方にした方がいいんじゃないかな、とも思ったが、これも〝男〟の考えることか…

(7)

四日市諏訪公園の屋台店。市街美化の名目での取りこわし騒動。戦後四十年、庶民の命の洗濯の場であったおくま婆さんの赤提灯の運命は…怒りと絶望から無言の行に入ったおくまは臨月の大きなお腹をかかえての娘さち

よの里帰りにも口をきかない。見かねた常連の一人、又吉老人は単独で、屋台にバリケードをめぐらし抵抗闘争に入る。取りこわしに来た建設業実はやくざの親分が、昔、戦後すぐの頃、けんかして追われた又吉をかばっておくまさんが一世一代のタンカを切った相手だったり、して、婆さんの最後の願い、年内だけは店を続けたいということが受け入れられ、大晦日になり別れの宴、いよいよ閉店の時になってさちよが産気づく。元気な産声と共に新しい年が……

又吉の森けんろう、おくまは劇団四日市の長い浮沈の時代を通して、支えつづけた山本淳子、さちよの城山千賀子の妊婦ぶりが面白く、この三人が立派に芝居のシンをつとめた。

多数の応援出演者もそれぞれ曲者ぞろいで、仕どころでは自分の流儀でお客をさらう事を心得ている。それだけに芝居のムードはああなったり、こうなったり、統一を欠きそうで、何となく新喜劇風に落ちついて行ったのはお客の好みか。

取りこわしの通達を持って来る市の職員までが、おくまさんお気に入りの常連で、板挟みの苦しい立場で、ナレーターもつとめる。この清水という青年で飛び入り出演の山口正義が素朴な姿勢をつらぬいて好感が持てた。

台本についてはやはり、土地問題でのいろいろなからみがバックにあるだろうし、それを省略して屋台周辺に限ってしまったことで世界が新喜劇的に縮少してしまったと思う。又、四十年の庶民の場としての情景が開幕と終幕に一寸だけというのも物足りなかった。「人情赤提灯」という題名から、私などはもっといろんな状況を期待していたし、おくまさんのキャラクターも大部分が無言の行では一寸味気なかった。又吉もカラオケ公害だけが目立って、折角森けんろうがやるのだから「怒髪天」の時のような多彩な行動が欲しかった…と、まあいろいろ注文はあるが、地域に根ざした創作を続けるという意気はよし。大いにがんばって続けてもらいたいと思う。

(8)

ある老人ホーム、それぞれに楽しむ老人達の中の演劇グループが、劇の上演をはじめる。作品は何と「青い鳥」―津演版と銘うってあるので、ダイジェスト版かと思ったら、〝木こりの家〟から始まって、思い出・夜・幸せ・未来と廻って木こりの家に戻るまで、ほとんどまっとうに演じてのけるのである。上演御も老人がやっているという様子は見られない。津演の皆さんが若いだけに、老人ホームの場面よりやりやすそうなのである。はじめから「青い鳥」だけにチャレンジした方がよかったかも知れない。

それはそれとしてチルチル（平田富志夫）ミチル（森川美和子）は素直に、犬（若林一博）は達者に、多数の人物があり、場面も一々丁寧に道具が飾ってあって転換の間は長かったが、多数の人物が、演技的にはかなり落差はあっても、よく動いて全体としてはまとまっていたといえるだろう。夜の園で一つ一つ扉を開け、その向うの恐ろしいもの達が出て来るのを必死に押える所も、幸せの花園でぜいたくな幸せのアドバルーンのような服と正しい喜び達の踊りも、未来の王国のこれから生きる子供達の抱えている道具も…全体として、かなりの総合力のある劇団になっているなと感じた。（創立公演に名古屋演集は協力上演を行い、その後十数年いや二十数年かな東り演に入っていなかったので、交流が余りなく、最近つきあいが増えたので、こういう感じ方をしたのである）早く仲間になってくれたら頼もしいな、という印象であった。

○　　○

合唱劇
山手線はまわる
―朗読教材の試み―

大橋喜一

人物と舞台。

朗読者は二〇人くらいが最適、最少なら六～七人でも可能。内容上男性主体がのぞましいが、女性の混入も可。服装は自由だが、鉄道労働者らしいイメージがいいと思う。舞台もとくに指定はないが、試みとして、山手環状線を形づくるのも面白い。舞台の芯の前面を東京駅にするなら、上手は田端、下手は品川、中央の奥は新宿で、上手奥は池袋と、舞台一巡で山手環状線が形づくられる。そして舞台のホリゾント沿いに二重をおくなら、現実の山手環状線の地勢どおりのリアリティもつくりだせる。

この本は朗読教材の目的をもつので、そのための作者のイメージを頭書きに表示してみた。

S（ソロ）は単独の朗読。
C（コール）は、数人のグループ、あるいは全体の半分といった合唱。
全員　とあるのは全体的な合唱。
各個　とあるのは、とくに＜　＞の詞句を各個連続に、わたりぜりふの効果をもって発される。

1　合唱＜山手線はまわる＞

効果音（または音楽）――高架線ガード上を駅へ到着、入れちがいに発車してゆく一〇輌編成の電車の音、山手環状線と巨大都市東京のイメージ……
朗読者全員舞台いっぱいに長円形に並んで登場、山手線の運行を表示するように右まわり（または左まわり）に移動してゆく。その内、突然音（または音楽）が小さくなり、合唱がはじまる。

合唱＜山手線はまわる＞
S　全員　山手線はまわる
　　一二〇〇万人口のひしめく
　　巨大都市の中心地域を
C（半分）外まわりは時計の針まわりに
C（半分）内まわりはそれの逆まわりに
S　南北に細長いだ・円形の線条は
S　幹線ターミナル駅
　　乗かえ連絡駅
S　私鉄・地下鉄接続駅など
S　大小さまざま二九の駅をつないで
S　所要時間一時間で
全員　めぐりまわる

音または音楽。

S　年間の輸送人員
全員　およそ一二億（じゅうに）
S　その始発は朝まだき午前四時半
S　終車は深夜午前一時をすぎる
各個　＜雨にも＞＜風にも＞

＜炎熱にも＞＜酷寒にも＞
S　電動機は車輪をうならせ
S　制御器は制輪子をきしらせ
S　パンタグラフは火花を発し散らし
全員　ああ　山手線は休みを知らない
音または音楽。
S　それらの機能を織りなす労働は
各個　＜運転＞＜信号＞＜通信＞＜保線＞
＜駅務＞＜電気＞＜車輌＞＜などなど
もろもろ＞
S　人間能力の緻密な技術的集成が
組合わされての巨大なはたらき
音または音楽。
全員　みたまえ　今日もまたまわりつづける
山手線を
S　東京という世界一の巨大都市が
都市の機能をひろげ生きつづける限り
C　山手線は休みを知らない
C　休むこともまた許されない
全員　まわる　まわる　まわりつづける
音または音楽。
進行役をのこして他は退場。
進行役　山手線は日本の鉄道の歴史とともに生れています。……では、その歴史をたとってみましょう。

2　日本鉄道・汽車の時代

汽笛。つづいて鉄道唱歌のメロディ。
数人のグループ、中央から下手よりに登場。
S　明治五年一〇月、日本にはじめて鉄道が……新橋――横浜間を、いわゆる岡蒸気が走った。
新橋の位置に［新橋（汐留）］のプラカードが出される。つづいて品川の位置に［品川］のプラカード。
S　その起点、汽笛一声の新橋停車場は、現在の新橋駅ではなく、汐留貨物駅であった。
S　東京駅……つまり中央停車場ができたのは四〇年以上もあと、大正年間になってからのこと。
S　……ということは、いまの山手線のなかで、もっとも古い駅とは……
全員　それは品川――品川停車場！
進行役が前面に。
進行役　鉄道建設は、文明開化明治政府の最重要の国策、この官設鉄道は西へのびて、東海道線となってゆきます。では東京より北の方は？……それから一二年ののち、明治一七年六月。
別のグループ、上手よりに現れる。
S　日本最初の民営鉄道会社、日本鉄道によって、上野――高崎間が開通、いまの東北・上信越線のはじまり。
上野の位置に［上野］のプラカード、上手端に［赤羽］のプラカード。
S　ということは、この上野駅は、山手線

にとっては品川に次ぐ二番目に古い駅ということ。
S　上野を発した鉄道線路は、赤羽を経て大宮へと延びてゆく。
進行役　日本鉄道は、当時の主要輸出産業である生糸の生産地――上信越地方と、横浜港とをつなぎ、輸出製品輸送の任務をもっておりました。しかるになんと……
上野と新橋の位置に朗読者が立つ。
S（上野）。新橋に向い）おれは上野、新橋停車場は、南の方一里一五町。
S（新橋）。上野に向い）おれは新橋、上野停車場は北へへだたること一里一五町……
進行役　一里一五町とは、現在の五・五キロメートル。
S（上野）新橋へ！　でも線路は……
S（新橋）上野へ！　でもレールは……
S（二者同時に）一町はおろか、一〇間だってのばせねえ。
両者、手だけ延ばし切ない形。
進行役　上野――新橋、五・五キロ。二つの駅、なぜ鉄道で結ぶことができないのか？
数名の町名朗読者が、上野―新橋の間に、入れかわりあらわれ、町づくしの朗読。朗読者の数は自在であるが、ことばのリズムと交代のテンポに留意たれたい。
連唱＜上野――新橋　町づくし＞
S　上野停車場、南へ下れば広小路、黒門町、御徒町に中御徒町、練塀町やら佐久間町。
S　川がござる神田川。
神田川には和泉橋、西にかかるは昌平橋、橋をわたれば神田区にて、岩本町、松枝町、紺屋町、福田町と屋根つづき、小路へだてりゃ日本橋区。
S　日本橋区は大傳馬町に小傳馬町、堀留町に小舟町、本石町やら小田原町、室町とくればこのあたり、言わずとしれたお江戸のへそ、へそを流れるは日本橋川、かかる橋はコリャ日本橋、東にかかるは江戸橋にて
S　日本橋わたれば、通り一丁目・二丁目、三丁目・四丁目と、町の呼び方やや近代的、八重洲橋通りなる路をまたげば京橋区。
S　京橋区は南傳馬町一丁目・二丁目・三丁目・四丁目・五丁目はなくて川がある。川の名前は京橋川、橋は京橋、川が先か橋が先か、そんな詮索どうでもいい、京橋をわたれば、
S　京橋をわたれば、その名現在にとつづく銀座にて、銀座八丁檜かげ、銀座一丁目、二丁目・三丁目・四丁目、数寄屋橋通りを越せば、町名いつしか尾張町、一丁目・二丁目と町ならび、竹川町に三十三間堀、堀の向うは木挽町、行きつく川は汐留川、かかる橋が新橋にて、橋をわたれば芝口、やっとついたる新橋停車場。
全員　くたびれました。おお　しんど……
朗読者たちずっこける。
進行役前に出る。
進行役　申しあげるまでもなく、神田・日本橋・京橋貿隈、お江戸八百八町のなかでも、大商人・中商人・大商家蔵屋敷の甍を競う土一升金一升の土地柄、鉄道用地への買収なぞ思いもかけず、いつの時代でも事情は似ております。さて、

別のグループ、上手にあらわれる。

S　日本鉄道会社は、地価の高いお江戸中心地に汽車を通すことをさけ、はるか手前の赤羽から、西の方山手の農村地帯に鉄道をしき、官営鉄道の品川駅に連絡する迂回線を考えていた。

以下朗読者はそれぞれの位置を移動しながら、

S　赤羽より右に分れて、仲仙道は板橋の宿、池袋村、雑司谷村、戸塚村、大久保村などなどを南へと、甲州街道は新宿を通り、

S　武蔵野台地の丘を切り開いて、渋谷村などを経て目黒川に沿って南下、品川停車場につながる。

S　かくして日本鉄道はこの線を、品川線と名づけた。品川線――これが山手線の先行線名だった。

進行役が前に出る。

進行役　明治一八年三月一日。この日は山手線にとって記念の日、日本鉄道品川線の開通日。赤羽・品川間の営業運転がはじまった日です。

新橋の位置に日の丸の小旗をもった朗読者たちあらわれる。汽笛一声、人々はバンザイの形。

S　午前一〇時一五分、汽笛一声新橋を発車、マッチ箱の二軸客車七輌編成、ひいて走る機関車は英国制一八五〇型SL。

汽笛、シュッシュッ、ポッポの音。朗読者たち汽車ごっこよろしく、下手に向い品川にて反転、ホリゾント沿いに上手へと、移動しながら朗読。

S　品川までは左の車窓に海をみて、列車は本線より分れ品川線に入る。右カーヴまた右カーヴと、目黒川沿いに、やがて川を離れて武蔵野台地を北へのぼる。

S　汽車はゆく、北へ北へ、茅の原を分けて、雑木林の間をぬけて、駅とはほんとに名ばかりの、

各個　〈渋谷停車場〉〈新宿停車場〉〈板橋停車場〉と止り、

S　終点の赤羽停車場に到着したのは一一時三〇分。品川――赤羽間所要時間は一時間六分、平均時速は一六キロ。

S　この日の列車は、新橋・赤羽間を三往復、だが乗客は鉄道関係者だけで、普通旅客の乗組は一人もなかったという。

進行役が横からあらわれ、

進行役　これは明治一八年三月三日付、郵便報知新聞の記事によります。……開業第一日に普通乗客ゼロ。これが一〇〇年前の山手線の姿でした。だれが今日の山手線を、年間一二億の人々を運ぶ大動脈路線を想像しえたでしょうか。

ここで、山手線なる線名にまつわるエピソードをひとつ。

舞台奥のホリゾント沿いに朗読者たち（その性格は山手の住民――お百姓さんを思わせる）あらわれる。

合唱　〈品川線じゃねえ、山手線だ〉

S　その鉄道は品川鉄道、品川線だとよ

S　品川というとだれでも海を思いだすよなァ

S　だがこの線路のどこに海があるんだろ？

S　汽車が走るのは武蔵野台地だぜ

S　海なんかあるもんか

S　菜の花畑に大根畑

S　雑木林に茅の原だ

S　なのに品川鉄道。品川線とは面白くねえ

S　品川線なんて。フン、おらたちゃ知るもんか

C（各個）おらたちの村々、〈池袋村〉〈大久保村〉〈代々木村〉を通るから

C（各個）山手の村々、〈原宿村〉〈渋谷村〉〈目黒村〉を通るから

全員　こりゃ山手鉄道だ、山手線だ

S　そうよ、品川線なもんか山手線だ

全員　そうとも、そうとも、山手線だ

全員　山手線の汽車だァ

進行役が前面に出てくる。

進行役　明治三四年一一月二〇日、日本鉄道会社は次のような通達を出しました。

「品川線を山手線と改名する」

朗読者たちバンザイの形

進行役　これは開通以来一六年八ケ月目のこと、山手線なる線名がやっと定着。げに、住民パワーとは根強いものがあります。

朗読者は舞台全面に散開して、次の体勢をとる。

3　電化と環状線ができるまで

進行役　山手線の歴史、話はたくさんございます。

S　明治三九年、民営鉄道の多くが国有化されました。

進行役　いまの時代とは逆な現象です。

S　山手線は日本鉄道から内閣鉄道院の管理下に移され、以来、院線山手線とよばれる。

電車のシンボル的図柄のプラカードをもったグループが登場

明治四二年一二月、山手線が電化された。

S　都市近郊交通機関として、電車の時代がきた。

新橋の位置に 烏森 の駅表示が出て、上野行 の行先札をつけた朗読者。

S　電化第一番の電車は烏森発上野行。

S　烏森？　はて、聞いたこともない駅だが……

S　もとの新橋、つまり汐留駅では、それ以上線路の延長が不向きと、あたらしい新橋駅を、汐留の西二百メートルの地にこしらえた。烏森町にできたので烏森駅、これが現在の新橋駅になる。

S　烏森発上野行、とはいっても品川の方に向って上野行とは？

S　山手線、まだ環状線にはなっていない。

以上朗読者はそれぞれ位置を動いて、

S　烏森発車！　電車は一路品川へ、ポッポー、ポーポー。

S　品川から山手線に入りポッポー、渋谷、新宿とひた走り、ポー、ポーポー。

S　やがて池袋、これからあたらしく東へ

と右曲りに分岐した線路を、ポー、大塚、ポッポー、巣鴨、ポー、駒込と、

S　かくして本線の田端へぬけ、南へ向いポッポー、次は終点上野ォ、という次第。

S　上野はいまだに行き止りの終着駅、さもありなん、東海道線もまだ東京駅が建築中。

進行役　時代はまだ明治、院線電車、開業時は単車で走る、車輌はたった一輌。

S　運転手は勝手に電車をぶっとばす。

S　パンダグラフなる近代的な集電装置はまだ発明されていなかった。

S　架空線から電気をとるのは、かのデンデン虫の角よろしく、屋根から突きでた二本のトロリーポール。

S　運転手が乱暴に電車をとばすと、ポールはしばしば架空線を外れる。

S　さァたいへん！　外れたポールを、電車後部の窓から身をのりだし、ポールの綱で引きよせ、架空線にもどすは車掌の仕事。

以下それらの身ぶり動作を伴って。

S（運転手）電車は走る、ポッポー、院線電車は走る、ポッポー、ガタコン、ガタコン、ガタコン、ガタコン、畠を突っ丘を越え、ガタコン、ガタコン、ポッポー。

S（車掌）ポールが外れたァ！　とばすなよオ！　運転手さーん、外れたよォ、ポールが外れたァ！　運転手さーん！

進行役　こうした車掌残酷ものがたりは、初期山手線電化のころは日常茶飯事。こうして時代は大正に移り。出来ました、中央停車場が、ルネサンス様式でシムメトリカルな東京駅の完成、大正三年一二月です。

東京駅　の表示が出る。

進行役　東京駅と上野駅、つながれば環状線は完成……でも、世の中は皮肉で、一足先に新宿駅が東京駅につながった。

舞台中央奥の新宿の位置に、次の朗読グループ。

S　当時、甲武鉄道という民営会社が、新宿から西へ八王子まで開通していた。この甲武線が現在の中央線の前身。

S　甲武線は新宿から東へと、都心に向けて市ケ谷・四谷と延びて、飯田町が始発駅だった。

S　線路はさらに神田川に沿い、お茶の水・万世橋・神田とのびて、一足先に東京駅にのり入れる。時は大正八年。

S　かくして環状線への未完成区間は、神田――上野間、二・三キロを残すのみ。

進行役　……さらに六年の歳月、やっとたどりつきました環状線完成の日！　大正一四年一一月でした！

花火の音。全員上野―東京の位置に集り、円形を形づくるように動いてゆく。

進行役　上野・神田間は高架線、なかに御徒町・秋葉原の二つの駅。完成しました！

山手環状線！

S　電車は五輌編成。

S　集電装置はすべてパンタグラフ。

C（半分）東京駅、南へむかうは外廻り

C（半分）北へと向うは内廻り

全員　ぐるぐるぐるぐる終点のない環状線山手線はまわりはじめた。

人々の動きやがて止り、隊形かわる。

4　環状線は昭和の歴史

（以下、ソロはその表現内容に応じて、ひとりか数人で担当し、駅名は各個の連唱によってなされる。歴史的なソロの内容表現と、リズミカルな駅名の連唱との、緩急の配合に表現の工夫をしてほしい。）

合唱〈山手線いつまでも〉

S　山手線・環状線はまわりつづけました。昭和の歴史とともにまわりつづけました。いろいろなこと、さまざまなこと、どっさりと、たくさんにありました。

各個　東京・有楽町・新橋・浜松町・田町・品川。

S　もっとも苦しかったのは戦争中でした。壮年の男子はほとんど軍隊にとられて、運転するのは老人か若年者たち。車掌はみんな女性にかわりました。

各個　田町・品川・大橋・五反田・目黒・恵比寿。

空襲警報のサイレン、舞台は騒然となる。

全員　空襲警報！　空襲警報！

S（数人）空襲警報が出ると、電車は最寄の駅で乗客を下ろす。駅と駅の中間まで電車を移動。パンタグラフを下げて待避。乗務員は電車から離れられない。娘車掌は車掌室でひとりでふるえました…

各個　目黒・恵比寿・渋谷・原宿・代々木・新宿。

S（数人）空襲被害、山手線はほとんど全駅がやられた。池袋電車区全焼、電車一三〇輌が焼けた。それでも山手線は止らなかった。私鉄は止ったが、山手線は動いた。

S　車掌の娘さんたちは、しばしば生理が止ったといいます。

各個　代々木・新宿・新大久保・高田馬場・目白・池袋。

S　戦後荒廃のとき、線路はガタガタでした。窓ガラスは破れ、座席シートははがされ、室内燈の電球さえ盗まれるありさま。それでもすし詰めの乗客をのせて走りました。

各個　目白・池袋・大塚・巣鴨・駒込・田端。

S　電車のよび名も歴史的にかわりました。昔、鉄道院時代は院線電車。戦前、鉄道省になって省線電車。戦後、日本国有鉄道となって国電。

各個　駒込・田端・西日暮里・日暮里・鶯谷・上野。

S　そしていま、国鉄はなぜか大変動期に。企業分割・民営化というコトバでの、労働組合つぶしとしか思えない、大きな変動が山手線の職場にも……熟練した国鉄労働者の多くが配置転換されました。

各個　鶯谷・上野・御徒町・秋葉原・神田・東京。

S　国鉄の名はJR東日本会社に、経営体かわって国電の名はおかしいからと、よび名を一般公募、そこで選ばれたは、なんとまァ……E電でした。

各個　神田・東京・有楽町・新橋・浜松町・田町。

次は数人による会話体で。

―　E電？　これ、どういう意味？

―　ABCDEFのEなんだってね、

―　そのEにどういう意味があるの？

―　どうにもこうにも、語呂がいいとか、なんとか新聞に出ていたけど……

―　そんなこと、どうでもE電。

―　都民はなじむかしら、E電。

各個　浜松町・田町・品川・大崎・五反田・目黒。

S（進行役）国電よ、山手線よ！　これからなんと……よび名かわろうと、経営主体がかわろうと、山手線の名はいつまでも山手線。そして電車は環状線をまわりつづける。労働者の手は電車を動かし、電車はまわる、まわる、まわる、

全員　山手線はまわりつづける。

各個　品川・大崎・五反田・目黒・恵比寿、

C　まわる、まわる、まわる、

各個　渋谷・原宿・代々木・新宿・新大久保、

C　まわる、まわる、まわる、

各個　高田馬場・目白・池袋・大塚・巣鴨、

C　まわる、まわる、まわる、

各個　駒込・田端・西日暮里・日暮里・鶯谷、

次第にテンポ早まる。

C　まわる、まわる、

各個　上野・御徒町・秋葉原、

C　まわる、まわる、

各個　神田・東京・有楽町、

C　まわる、まわる、

各個　新橋・浜松町・田町、

C　まわる、まわる、

各個　品川・大崎・五反田・目黒・恵比寿・渋谷・原宿……

S　山手線のレールに終点はない。

S　山手線は無限線路。

S　人間が、人間の労力が、都市を動かし。

S　東京が、日本が、そして世界の平和が守られてゆく限り、

全員　山手線はまわる、まわる。

全員　まわりつづける！

※この合唱劇の執筆資料として、〈讀賣新聞社会部編、東京一〇〇年モノごと誌〉を使わせていただきました。

ルードリッヒ はるかなる恋人へ

中村　おがわ

人物

みどり　二十五才
ルードリッヒ　四十〜四十二才
カルル　その友人　四十才位
アマンダ　同じく友人　少し若い
テレサ　その変人　二十三才位
男　（この男はルードリッヒの化身のように振るまっていることもある）
ウエトレス（カローネ）　二十五才位
（これも、時にみどりと、同一人物がやってもよい）

第一部

第一景

舞台、うす暗いまま。
ピアノの音、曲目「エリーゼのために」たどたどしく、何度も何度も、繰返されて、しまいに音途絶える。
ばんと強くたたく音。
舞台、明るくなる。はじかれたように、ピアノの前にうずくまっていたみどり、身体を起こす。
一人外国人風の男、傍に立っている。

みどり　誰？

男　どうしてあんな風に弾くんですか？

みどり　あんな風？

男　この曲は、雨だれじゃありません。

男、スムーズに弾き始める。

みどり　上手ですね。

男　それだけ……

みどり　本物みたい……でもどうでもいいことだわ！

男　どうでもいいことじゃありません。下手なら、練習すべきだし、弾けないなら、やめて下さい。この曲が、そんなダラダラした音しか出せないなら、やめて下さい！

みどり　おせっかいはやめて！どうでもいい

ことだといったでしょう。
男　その程度のものなのか、この曲が、どうでもいい……
みどり　ゴチャゴチャいわないで下さい。お願いだから、眠らせて下さい。
男　話は終わっていません。眠らないで、ホラ！　眠ってはいけない！

みどりのほおを打つ。

みどり　ああ痛い！　（はじめて、男をまじまじと見る）どうして…ここはどこ？　私の部屋に違いない。このピアノ、私の唯一の財産、姉のおくり物、ぬすまれちゃ大変だわ。このため、姉は、ボーナス貯金出来なかったんだもの。それが気を重くしている。盗まないで、私のたのしみ。
男　泥棒じゃない。残念ながら…でもいいピアノだ。これならハンマークラヴィアだって、ゆうゆう弾けるというもんだ。あなたには無理だと思うが……
みどり　まだ答えてないわ。あなたは、自分が誰か名のるべきじゃないかと思うけど…。
男　この男はだれ？

みどりの部屋の壁に、ベートーベンの肖像が大きく掲げられている。

みどり　ルードリッヒ・フォン・ベートーベン。
男　まずい男振り！　あなたのピアノと同じだ。私がこんな風に描かれているなんて、失礼だ。
みどり　これが、ご自分だと？そう、おもってるわけ！あなた、どこからきたの……私、逃げ出したい。でも歩けない。だから、あなた、ぜったい手出し、しないで…気を鎮めて…私も冷静になるわ。決して、あなたを侮辱したりしないわ。

男、じっと、みどりをみる。

みどり、椅子から起ち上って、車椅子の方へいこうとするが、うまく、行くことが出きない。

みどり　手をかしてくださったら、あなたを信じるんだけど……

男、みどりに手を貸し、車椅子に坐らせる。

みどり　ピアノ弾きの手だってことは判るわ。でも、はっきりさせましょう。いえ、はっきりさせる必要ないわ、いいたくないでしょうし……誰だって……弱くなってる個所はあるものね。でも、それに耐えられるかどうか……生きるってことは……どこまで、耐えていられるかどうかなのよね。もし、耐えきれなくなって、どうしても耐えきれなくなって……　死にたい、死ぬより他にないとなった時……それでも逃げ道を考える。恥ずかしいけど……人間は最後にいっても、ずるがしこいのよね。私、どこかで、誰かにたすけられることを期待してるの。本当なら、人間が、生真面目だったら、そんな甘ったれ、許しやしない筈だけど…
男　どうして、そんなにしゃべるのですか。あなたは？　もっとも、ぼくと対話してる訳じゃなければ、どうしようもないけど…同情しますよ。本当に、時々、人は絶望します。でも、仲々、自分から自分を殺すことは、むずかしいものです。おやめなさい。もうそんなこと考えることは……　なるようになる丈。それを待っててもやがては、やってきます。あちらから……
みどり　あなたのように、器用にできれば、

どんなにらくでしょう！　常人であることをやめてしまって……自分で、普通人じゃないところに逃げこんでしまうやり方……
男　常人とは、何ですか？　普通じゃない人って誰ですか？　それは……
みどり　それは……いえ、ご本人は、それを認めたがらないといいますから……でも、いいですか？　あなたは、ピアニスト？　ご職業は？
男　さっき言ったでしょう！　あの男です。あのぶ愛きょうに描かれている男の本物です。画じゃない本物です。

みどり、じっと男を見て、息をのむ。肖像を見る。

男　実物の方が、いいと思いませんか？　何時も、いつも、あんな苦い薬をのんでるような顔をしてたわけじゃありません。いつも、いつも、いやなことばかり、悲しみばかり、絶望ばかりしてたわけじゃありませんでしたからね。
みどり　それは、私もそう思っています。
男　あんな男の肖像画をかけてたところをみると、あなたはあの男、つまりこの私に、何らかの感情をお持ちだった？
みどり　あなたにではなく、ベートーベンにですわ。私、あの方の音楽が好きで　そう…好きでした。
男　それはそれは……何という幸せ…　私が生きてきた甲斐があるというものです。
みどり　あなたも、幸せな方ですね。すっかり、ベートーベンになりきっていらっしゃる。私は、何になりきれば、幸せになれるのかしら……

男、ピアノに向って、さっきの曲を弾き始める。

みどり　本当に、ベートーベンみたいに見えるわ、後からみると……　あなたは、私をなぐさめにいらしたの？　私の自殺防止をたのまれたのかしら！　姉の……もしかしたら、姉にたのまれて？ね！　そうでしょう、そうなんだわ、作戦ね、少し、頭のおかしい振りを見せて……私を油断させて、監視している。姉は、今夜当直なの……姉が、あなたに鍵を渡した……図星でしょう？でなかったら、入ってこられる訳ないもの、私、ばっちり鍵かけときましたよ。チャイムがなっても…いや、ならなかったわ。
男　いや！　押しましたよ。なった筈、何度も何度も……
みどり　ホラ！　あなたは、鍵を持っていた。卑怯だわ、私をだますようなことして。
男　あなたは、だまされてませんよ。少し、おかしな男と、いまは、大変おかしくなっている女が、この部屋にいて、でも、何も起こっていません。
みどり　起こってるわ。あなたは、私の邪魔をして、私の眠りを妨げた。自分の名もなのらず、侵入して。
男　名のってるじゃありませんか。さっきから……あの肖像画より、いい本物だって……これ、はずしましょう。私のイメージダウンです。よくおもわれたいんです。これでも私、とくにあなたに……
みどり　私によく思われたい？　冗談はやめて、侮辱されるのはいや——
男　ひがみっぽいんですね。あなたは女性のくせに。
みどり　ああ……何てことを……ひがませるのは誰？　裏切るのは誰？　不信感ばかり植えつけて、死ぬより他にない道をふさごうとするのは誰？　男よ、みんな男よ。

男　どならないで下さい。私があなたに何をしました?。私、あなたを裏切ってません。うらぎられ続けてるのは、この私です。ご存知でしょう。私の伝記にそう書いてある筈です。真実ばかり書いてはありませんがね。私は、女性の愛を得ることはできませんでしたと……

みどり　私は、あなたを愛しています。ルードリッヒ・フォン・ベートーベン。でも、あなたは、いま、実在しない。もう、その肉体を見ることはない。でも私は、愛した。愛している。いまも愛し抜こうと思っている。とても、不可能なことは解っている。でも……私の愛したベートーベンは、私の中からは、逃げ出せない。そう、私のものよ……

起ち上がって、男の方へ倒れる。
男、それをうけとめる。

男　あなたにベートーベンを紹介したのは誰なのです。

みどり　楽譜!

男　ガクフ?

みどり　ピアノを教えてくれた音大の学生、ボランティアっていうのかしら? その彼が、ベートーベンを、私のところへ連れてきたの。ピアノと一緒に……車にはねられて、下半身マヒになってしまった妹。姉は一生、妹という荷物をしょいこむことになってしまって… 私が、十三の時、姉は十八… いまから十年前。私が、姉の高校卒業祝の、プレゼントのスカーフを買いに町へ出た時……とても気にいったものが手に入り、うきうきしてたの。私たち、その五年前に、両親をなくしていたから……その時も車……車が、うちの中へとびこんできたの! 運の悪い姉妹だった私たち……おまけにこの私…… でも、姉は負けなかった。看護婦になったの、三年後に……立派な自立、でも、私は、ひねくれ者、お先まっくら、世の中なんて、くそくらえ! 夢も希望もない、ヤケクソで、姉の世話になって、生き永らえた。

看護婦になって、初めてのボーナスであのピアノを買ってくれた。あなたが子供の時からほしがっていたからといって……泣いちゃったわ。これで、元気出しなさいって、姉は言ったわ。自分は、何も買わなかった。夏靴の白いメッシュを買った丈……それも安いの… ピアノからみたら… 可哀想な姉さん……ああ、私何を言ってるのかしら?

男　言いたい丈おいいよ。

みどり　あくびしてるくせに…… 我慢できるならきいて! その上、姉は、患者だった人から、音楽の教師を、私に見つけてくれた。久し振りに、姉以外の人との接触、その後、私にベートーベンのレコードまでプレゼントしてくれて… 私を愛してるとまで言ったの…… 笑っちゃいや… それとも、あなたでも、私は男性に愛される資格ないと思ってますか?

男　いや! あなたは、チャーミングだ。

みどり　じっとみて、私をまともに見て、私を見て物を言って下さい。おねがいだから……ああ……私はまた、言ってしまった。お願いだからと……私何度言ったことかしら、彼に… おねがいだから、私と真剣にお話をして… おねがいだから、私を抱きしめて……おねがいだから、私にキッスして……

私、みだれすぎ? あの人は、しまいに言ったわ。ぼく、婚約しました。卒業したら、結婚します。郷里の高校の教師になります。愛する人は他にいたってわけ! 私、三度

も、そんな目にあっているの、君が好きだよって、いわれながら、他の人と婚約する…私って、だめな人間なのね。私を人生の道連れにはできないってわけ! そんな中で、私が、どうして、自分の人生をたたえることができて……どうして、幸せを自分の手で勝ちとれると思って! 私には勝ちとる力など、とうに失せてしまっていたわ。ただ、残っていたのは、私の頭に叩きこんだベートーベンへの憧れと愛。私がベートーベンを思う時、私は、何ともいわれない軽やかな心になる。恋する乙女になる。とても苦しいけど、ひたすら、恋こがれるの。

男　何という不幸な人だ。

みどり　そんなことないわ。

男　彼は、あなたなんか愛していない。

みどり　でも愛している私は……

男　悲劇だ、ぜったい……一体になれない愛なのに……

みどり　私が愛してるのだから、かまわないでしょう! つらくとも、私の愛なのだから……

男　あなたは、二十世紀に生きているのに……

みどり　生きてなくともいいわ。もし、天国であえるなら、私の愛をそこまで届かせる。

男　あなたは、現在を生きなければならないのに、何たる不幸!

みどり　何時だって不幸です。生きる限り。

男　でも、あなたは、生きてもらわなければならない!

みどり　あなたの指図はうけません。

男　あなたは、生きるのだ、ぼくのために。

みどり　ぼくのため?

男　あなたのルードリッヒのために……ルードリッヒの魂のために……

男、三度「エリーゼのために」を弾く。

みどり　何故、その曲ばかり弾くのです?

男、落涙する。

みどり　泣いてる。

男　思い出すとね……たすけて下さい。たすけて!

(みどりを抱く)

みどり　温かい… あたたかい体、どくどくどく……私の方に流れこみそうな、あなたの血の音……生きてるんだわ、あなたは……生きている肉体を持っている。

男　そう、生きてる。あなたも……でも、私は、あなたによって生かされる。何故なら、実体のないものだから……

みどり　いえ、あなたも生きている。

男　言うだけではだめ! あなたが、私に魂を吹きこんでくれなければ、駄目です。私が動けるのは、ここまで。

みどり　どうすればいいの。私の魂は、枯れてしまったのに…

感動の一滴でも残っていると、きっと、違うんでしょうけどね……。もう、この頭の中にも、この胸の中にも、この腕にも……

男　いや、出来ます。あなたは……魂を吹きこんで、作り上げて下さい。原稿用紙が白紙のままでは、これ以上、私は、動けません、さァ… あなたのルードリッヒに魂を吹きこんで……

みどり　私には、才能がありません。大それた、ベートーベンなど、私の手で、動かせません!

男　どうして、やってみないのです? あなたは、作家でしょう?

みどり　作家とよばれる程の出きばえじゃな

いの、恥ずかしくて……そのくせ、他のことは、何も出きない……

男　いい加減なところで、自分に見切りをつけてはいけません。書くしかなかったら、生命のギリギリのところまでつきつめて見たら、いいじゃありませんか。そして、魂を貫った私と戦って下さい。もし、途中で、力つきたら、それなりに、その時こそ、死はいたずらじゃなくなります。私に魂を入れて…さまようのは、いやです。

みどり　魂を入れ損なったら……

男　捨てゼリフ、よくないです。さァ、元気を出して……　私を動かして…　あなたの好きなように……あなたのルードリッヒなのですから……

第二景

舞台、前景と同じ

みどり　ここは、ウイーンです。十九世紀です。なんだ、さっきと変わらないじゃないかと、おっしゃるのですか？　そう私の部屋でもあります。でも、作者はウイーンだと決めてます。作者の特権と申しますか、おつきあいを宜しく。時と場所は、自由自在、登場人物も、私の思うまま……　でも、登場人物は時々、私の思うままにいかなくなります。勝手に動きまわり……全く、人間は、動物なのだと、改めて、認識させられます。ホラ！　きたきた……彼らは……誰？

ワゴンテーブルを押しながらウエトレス、登場、あとから、みどり、ついてきて、つくられたテーブルにつく。

ウエトレス　ご注文は？

みどり　そうねえ…

ウエトレス　当店ごじまんのコーヒーは如何？

みどり　勿論いただきますわ。

ウエトレス　じゃ、ご存知でして？　当店はウイーンで一番、おいしいコーヒーを出すのですよ。

みどり　ウイーンですって？

ウエトレス　そうですよ、あなたは、おみかけしたこと…どこからいらっしゃいました。

みどり　私は日本から、……東京をご存知？

ウエトレス　残念ながら…　オリエントの方ですのね。

みどり　オリエント？　ええ！　そうです。東洋の…じゃジャパンという言葉は？

ウエトレス　ジャパン？

みどり　どうして、こうくい違うのかしら。私は、ウイーンも、コーヒーもよく知ってるのに、この人は、日本など知らないという。そんなものかしら。日本て、そんな程度？

ウエトレス　でも……あなたを、私はよく知ってるような感じです。きっと将来おあいする時があるんでしょうね。

みどり　将来？

ウエトレス　この国には、まだオリエントの女の方が、旅行なさってるの、私は存じませんのよ。

みどり　私たちの国から、沢山留学している筈ですのに、どうして……音楽の勉強のため、ウイーンは音楽の都でしょう。あこがれています、皆さん。ベートーベン尊敬しています。モーツァルト、シューベルトの音楽は、日本ででもとても有名ですのに、この国では……

ウエトレス　ベートーベンですって？　あのルードリッヒ・フォン・ベートーベンの事ですか？

（はずかしそうに、顔を赤らめる）

ウエトレス　あの方の名前を、あなたのようなオリエントの方まで有名だなんて……すばらしい人です。

きかせてあげたら、どんなに喜ぶことでしょう。あの方、この頃、少し、めいっていらっしゃる。頭をかかえて、内にこもっていらっしゃる。心配なの？　とっても心配なの……

コーヒーを入れて持ってくる。

みどり　丸でお友だちのような言い方…

ウエトレス　友だちになれたら、どんなに嬉しいことか……あの方は、私なんか……でもいい人です。姿を見られる丈で、そう見られる丈で。

みどり　あの伺ってもいいかしら？

ウエトレス　ミルク、もっと入れてさしあげましょうか？

みどり　いいえ、結構……あの、今日は何日でしょうか？　何年何月……こんなことときいて、おかしいでしょう。でも、教えて下さい。私の頭の整理しなくては……

ウエトレス　一八　　年、五月　　日ですけど。

みどり　一八　　年、百五十年前ということ…

そして、ウイーン…

ウエトレス　私…ね。こんなこと、私がいうのは、生意気なんですけど……というのは、あなた、何か勘違いなさって……それとも、私もとても変なんですよね。私急によばれて…あなたに呼ばれて、ここにきたという気がするの…　よんだのはあなた！

みどり　そうなの……いいのよそれで、私はとうとうルードリッヒと同時代にこられた、あの人と同じ街にいる。ここでは私、交通事故に会っていない。だから、ちゃんと立ってる。ホラ――立ってるでしょう……

みどり、椅子から、起ち上がる。

ウエトレス　どうかなさいました。

みどりの起ち上った方をみる。

ウエトレス　ああ―もう時間だわ、あの方待ってらっしゃる。ごめんなさい！

みどり　どうなさったの？　私を一人にしてしまうの、私はお客さまでしょう？

ウエトレス　ルードリッヒが、コーヒーを待っているわ。きっと、あの方は、私の入れるコーヒーが大好きなの。毎日必ずのみにくるわ。胸がドキドキ……判るかしら…ね判るかしら、あなたに。

みどり　判るわ、私だって……じゃあなた……

ウエトレス　ええ？……

みどり　私にやらせて！　そのコーヒーを運ぶ仕事、あなたはお店があるでしょう？

ウエトレス　いいえ、これも仕事ですから一寸とも、面倒なことじゃないのよ。

みどり　だったら私が…

ウエトレス　いえ、お客さまには面倒よ。第一どこへお持ちになるの？　あの方のお住いお判りじゃないでしょ。

みどり　どうして、そうムキになるの？

ウエトレス　あなたこそ！　おかしな人、オリエントの女性って、みなさんおかしいの？

みどり　私、おかしい人？　どうして、そうみえるのかしら…　ただ、はりあっているだけじゃないの？

ウエトレス　冗談でしょう。オリエント人とはりあういわれはないわ。
みどり　私もルードリッヒが好きだから、恋しているから……ここまできたの……
ウエトレス　つまり、こいがたきってわけ……あなたが、ルードリッヒを、引きこもうとしてたのね。だから、私の方も引っぱられて……
みどり　二人が引っぱりあって…おかしいわね。私たち…
ウエトレス　おかしいわね。本当に……　よしましょう。もう…
みどり　共存共栄といきたいの私……
ウエトレス　もう一杯、如何？
みどり　有難う……

ウエトレス、コーヒーを注ぐ。
カルルと、ルードリッヒ入ってくる。
みどり　ルードリッヒだ。

身を硬くする。
ウエトレス、コーヒーをこぼす。
みどり、ウエトレスの思いを察し…

みどり　しっかりおやりなさい…私たち一緒よ。あなたの思いは私―私の思いはあなた……さがらせてもらうわ…きっと応援するわ、きっと。

みどり、舞台の袖に下がる。
ウエトレス、コーヒーを入れてもってくる。

カルル　有難う。

ルードリッヒ、ゆううつそうに、黙って、コーヒー飲む。

カルル　一体全体、こんどのふさぎの虫の原因は何だね……ルードリッヒ…

ルードリッヒ、じっと、前方を見る。
思わず立ち上がる。コーヒー碗から、コーヒーこぼれる。

カルル　ああ、ズボンが、コーヒーだらけじゃないか、何てことだ。

ポケットからハンカチーフを出しルードリッヒのズボンを拭く。

カルル　子供だね、今に始まったことじゃないがね。
ルードリッヒ　カルル……
カルル　もう一杯、クリーム抜きで…（叫ぶ）
ルードリッヒ　違う！　コーヒーなど、どうでもいい……あれだ！
カルル　あれ！
ルードリッヒ　あの人……

前方を指さす。

カルル　テレサ……
ルードリッヒ　引き止めてくれ！　話がある
といってくれ！カルル…
カルル　何故、自分でいわない。君の弟子ではないか？
ルードリッヒ　親友だろ。きみは、ぼくの下僕だろ！
カルル　ルードリッヒの下僕ではない。ルードリッヒの音楽の下僕だ。音楽のだ。
ルードリッヒ　そうなんだ。時々、君はいじわるなことを言う。本来は、とても善い人間なのに……

カルル　君の思い違いってこともある。いいかい、何事によらず、君は、自分が善の中心だと思っているらしい。はなもちならぬ時がある。しかし、安心していい。それでも、君はいい友人なのだ、ぼくにとって……
ウエトレス　幸せなルードリッヒ！　伯爵様の方から、友だちだと、手をさしのべてくる。
ルードリッヒ　立ち話してるあれは誰？　今の中だ。彼女は、二週間、姿を見せなかった。それが、どんなに、ぼくの心を苦しめていることか……さア早く―　カルル……
カルル　（いたずらっぽく）どうするんだっけ！
ルードリッヒ　（はじらいをこめて）こう伝えてくれ、ルードリッヒは、あなたのために、新しい曲を書き上げました。全く、あなたのためです。
カルル　かなわないなア…君には…　はいご主人さま…（立ち上る）
ルードリッヒ　それにしても、何故振り向かない？　大抵ここにいることは、判っている筈なのに……　ああテレサ……
カルル　仕方がないなア……

カルル、にやり笑って出ていく。

ルードリッヒ　有難う、カルル……君は、ぼくにとって、無二の親友だ……

ルードリッヒ、落ちついて、コーヒーを一口のんで、独り言を言う。

ルードリッヒ　テレサ様、本当は、あなた、ぼくを、誤解なさってるのです。ぼくはただ……あなたが、心外なピアノを弾いているのを見ると、たまらなく情けなくなるのです。
何しろ、ぼくは、熱情を傾けると、時として、我を忘れてしまうことがあります。それが、他人には、狂人だなどと、恐ろしいうわさを立てられています。が、ぼくは、だからといって、軽べつなさらないで下さい。時々、自分の野蛮さを反省いたします。その荒々しさを封じこめようと努力いたします。私が、あなたを、尊敬し、愛していることに偽りはございません。
高潔なあなたの魂で、私を救って下さい。

ウエトレス、ため息をつく……

みどり、登場……

ウエトレス　あの方は、貴族の女性に憧れていらっしゃる。でも、だめなの……あなたもよく、ごらんになるといいわ。ウイーンの貴族の娘は、貴族としか、結婚の相手に見ませんわ。人間ではないのです。ルードリッヒだって、どんなに偉大な音楽家であっても、決して同列に並べようとはしません。ルードリッヒは、判っていないの……
みどり　いいえ、判ってると思うわ。あの人バカじゃないもの…　きっと、こっちを向くわ、向かせなければね……私やあなた浮かばれないでしょう。
ウエトレス　全く……あ、私を、絶望させないで――

カルルとテレサ、舞台の隅で――

テレサ　そうですの！　私の曲が出きましたの……嬉しいことです。今、ウイーンで、一番すぐれた音楽家ルードリッヒ先生、私のために……もう三曲…三曲もですのよ。自分の曲が持てるなんて、何と晴れがましいことでしょう。本当に光栄です。そうお

伝え下さいね？
カルル　お伝え下さい？
テレサ　今度の新曲、どうぞ、難かしくない曲でありますよう、祈ります。いけませんかしら、こんなこと……
カルル　あなたは正直な方だ。
テレサ　実のところ、あの方は、私の乏しい才能にお構いなしに、遠大な曲を、おかきになります。私の指では、到底弾きこなせません。この前、いただいた曲など、二十本の指がほしいと思いました。絶望しました。ピアノに身を投げだしたくなりました。私、命がけで、ピアノを弾く気はございません！
カルル　そう、あなた方には、ピアノに命をかけたりはしないでしょう。しかし、彼は、命がけで曲を作ります。
テルサ　人生はほかにもございます。なんといったと思います？　誰にでも簡単に弾ける、エチュードだよと、おっしゃったのよ。あなたもご存知のあの曲のこと……

ピアノの曲（エリーゼのために）きこえてくる。

私、指がのらなくて、まごまごしてたら、あの方、かんしゃくを起して、ピアノがこわれるかと、思いました。
その弾き方といったら、嵐のよう……私とうとう…逃げ出してしまいました。怖かったわ……丁度、旅に出る前のことでした。
カルル　後悔してますよ。彼は、やってしまったすぐあとで、謝るんです。後悔して……謝ります。今、彼に代わって……
テレサ　謝ります？　あなたは、謝りの使者いつでも……
カルル　何時でも？……
テレサ　社交界の噂でございましてよ。いいご身分の方が、たかが、一音楽家…　そりゃ、音楽家としては、この街でも有名な、大家でございましょう？　でも、たかが音楽でしょう。あなたが、彼の下僕のようだと……おくさまがよく、耐えてらっしゃるわ。
カルル　家内は、彼を尊敬しておりますよ。
テレサ　ルードリッヒは、決して、頭を下げたりしない人、あなたは、貴族の生れで、高貴なものがおありになるのに。
カルル　彼も貴族です。彼は精神貴族です。
テレサ　それは、私も、そう思います。あの方は、ごうまんで、自由で、つくろうことを知りません。子供のように、単純で、我慢というものを知りません。野蛮です。
カルル　しかし、それ丈純粋だといえませんか。吾々の間で、絹の衣にくるんで、表にあらわさない、どす黒い心を……　それを吾々は、教養とよんでいます。それからいけば、彼には教養はありません。それでは、承知できませんか……
テレサ　……
カルル　承知できませんか……
テレサ　私何のために、ルードリッヒの話をしているのでしょう。不愉快になるわ！
カルル　不愉快なんですか？　あなたには。
テレサ　お話って、何ですの？
カルル　うん……（ためらっている）
テレサ　ご用があるとおっしゃいましたわ。早く、うかがいたいわ、カルル。
カルル　どうしたというものか……あなたのお話を伺って、とても……
テレサ　とても……
カルル　辛くなってきたな……
テレサ　えっ……
カルル　ルードリッヒが待っている…　あそこで、彼は、君に、恋をしていてね。

テレサ　手紙をいただきました。あの方から。
カルル　それで？
テレサ　光栄に思うべきなんでしょうね。あなたは、信じてらっしゃる。後世にルードリッヒの名と音楽は不滅だと……
カルル　信じていますよ。彼の名は、不滅なものだと……
テレサ　だとすると、私の名も、共に不滅なわけですね。あの方の思われ人として、そして、その思いのたけを、けった女として……私、浅はかな女ですけれど、天才を利用する気になりません。
カルル　テレサ……
テレサ　カルル、私の兄の親友として、私を妹のように可愛いがって下さってるあなたの、また親友を傷つけるのは、心苦しいことです。でも、私……
カルル　そう、判った…　もういいよ……
テレサ　傷つけたくはございません。よしなに……
カルル　あなたの恋人は誰です？
テレサ　誰？
カルル　一緒に旅に出てた人でしょう。
テレサ　お判りでしたの？
カルル　ぼくの友だちの一人が、旅に出ていたよ。あいつかな…
テレサ　あいつとは……

カルルの親友の一人、アマンダ登場。

アマンダ　二人一緒だったのか……
カルル　アマンダ！　しばらく……旅はどうだった。

テレサとアマンダ、顔を見合わせる。

アマンダ　ライラックの花ざかりでね、すばらしい旅だったと報告しとこう。
カルル　そうだろうな、彼女も一緒だったことだし……しかし、ぼくを見て、そうがっかりした顔をするのは、現金すぎやしないか！　まア、そうそうにぼくは消えるがね！
アマンダ　もう、きいたのかね。彼女に……
カルル　それなら、手間は省けるというものさ。
アマンダ　何を、何の手間をはぶこうというんだ。横着せずに、話したらどうだ。
アマンダ　白鳥へいこう…コーヒーでものみながら、ゆっくりと味わせてやるよ。幸せな味という奴？
カルル　白鳥だって？

みどりの部屋の方をみる、ルードリッヒ、いらいらしながら、待っている。
ウエトレスも気をもみながら、見守っている。

三人入ってくる。アマンダをのぞいたカルルとテレサ……はらはらしながら……ためらいがちに……
入って来た三人をみるルードリッヒ。

ルードリッヒ　そういうことだったのか！　結構なことだ、一度に三人も証人がいるなんて！　親友と親友の鉢合せが、ぼくにとって、幸せを運んでくる。
アマンダ　元気そうだな、ルードリッヒ。やれやれ一安心だな。
ルードリッヒ　君は、ぼくの主治医を任じていながら、このところ、何故か雲がくれ、でも、今日は怒らない。君を怒らせたら、多分、元も子もなくなるだろうから……ね。
カルル……
カルル　ああ……ルードルリッヒ！
ルードリッヒ　テレサ、よくきてくれましたね。カルル、君には感謝する。全く、君は

親友だね。テレサ…きいてくれましたか？
カルルに……ああ、あなたは、また一段と、美しい、でも、そのうれしい顔、さっきまで、ぼくは、怒っていました。あなたが、ぼくを無視して、いきすぎようとなさった。でも心配事がおありになられた。そのおかお……
テレサ　また、新しい曲をおかきになったとか。しかも、つたない私のために……
ルードリッヒ　あなたは美しい、その美しさに相応しい曲をと……願いながら…

テレサに対して、一礼する。

カルルから、きいていただけたと思いますが……
テレサ　ええ、もう、胸がどきどきときめいています。早く、ききたいものです。新しい曲、何時、どこで、発表なさいまして！
先生……
ルードリッヒ　先生？　ルードリッヒと呼んで下さい。あなたのルードリッヒ！
テレサ　あなたのルードリッヒ！
ルードリッヒ　あなたの……（テレサを指して）あなたのルードリッヒ……
テレサ　つまり、私のルードリッヒ？
ルードリッヒ　テレサ、あなたのピアノはメキメキ、上達しております。愛の神が、あなたの指を転がしているようだ。それに相応しく、格調高く、そして、可愛いらしい曲なのです。あなたなら、大丈夫……ぼくは、それを、光栄に思い、感動することでしょう。ぼくは、あなたを幸にするために、闘います。自分自身とも、ぼくを非難する人々とも……ぼくは、闘うことに慣れております。

テレサ、当惑顔。

テレサ　カルル……（たすけ舟をたのむ）
カルル　ね、ルードリッヒ、おちついて、きいてくれたまえ……そうだ、まだコーヒーたのんでなかったね。アマンダ、テレサ……
テレサ　ええ……でも…　ねえ、先生……私は先生を尊敬している弟子の一人です。その弟子に向かって、ねえ、先生……
ルードリッヒ　先生ではありません。テレサ……あなたのルードリッヒ！
テレサ　でも先生……
ルードリッヒ　ルードリッヒ！（怒って）
テレサ　先生―　私には、先生以外何者でもありません！　私には…私のアマンダがいるのです。

一同、ハッとする。いってしまって、テレサも、口を押さえる。

ルードリッヒ　何だって？　何といわれた？
テレサ……

ルードリッヒ、テレサの腕を掴む。他の人々、息をのんで見守る。

ルードリッヒ　テレサ！
テレサ　（ゆっくりと）私のアマンダ……

ルードリッヒ、衝撃をうけて、しばらくは、絶句、動揺する心を押えかねる。

ルードリッヒ　アマンダ……私のアマンダだって……私のアマンダ……だって……どうして、ぼくじゃない……
（アマンダをしみじみ見て…）
君…君だというのか？　どうして、君アマンダなのだ。

テレサ　許して下さい。先生！

ルードリッヒ、皆に背を向けて立つ。

ルードリッヒ　今度も……どうして　ぼくではなく……アマンダなのだ……テレサ……
テレサ　私たち、ずっと許婚者だった。親同志が決めていた。私たちは従ったわ。勿論きらいじゃないから……
ルードリッヒ　ひどい……アマンダ、君はひどいなァ。君だって、ぼくの親友だろう。ぼくは若い時から、ぼくの病気のことまで相談した。君は、よい医者も紹介してくれた。おかげで、ぼくは、死なずに生きてこられた。今日まで……カルルが、ぼくの生活の支えになってくれていることと共に、君にも感謝している。だからって、ぼくの弟子まで、君に託して、感謝しなければならないのか！　ええ……
アマンダ　ルードリッヒ！
ルードリッヒ　底なし沼が見える。絶望の黒い沼が、落ちていく……アマンダ、君の仕打ちは、親友といえるのか……出ていってくれ！　ああ……
カルル　ルードリッヒ。

ルードリッヒ、テーブルに突伏して、しまう。

ルードリッヒ　幸せなお二人さん、消えてくれ。ぼくが、消えてしまいたいところだが、今は、力がない。立ち上がる力がない！
カルル　君たち……

アマンダと、テレサを促して、外へ出る。

カルル　（でながら、ウエトレスに）すぐ戻ってくる。たのむ！　よろしく。
（ルードリッヒを、指さす。）

三人出ていく。

ウエトレス、気ずかわしげに、しばらく、ルードリッヒを見守っている。頃合いをみて、おそるおそる近ずく。

ウエトレス　もう一杯、あついコーヒーでも。
ルードリッヒ　君の名前は？
ウエトレス　カローネ……カローネです。
ルードリッヒ　カローネか……おぼえとこう。
ウエトレス　すぐお忘れになります。
ルードリッヒ　どうして、そういえる？
ウエトレス　前にも、おききになりましたが、すぐお忘れでしたから……
ルードリッヒ　君は、そんなに永く、この店にいるの。この前だなんて。
ウエトレス　三年になります。あなたは、毎日おいでになり、その度に、私はコーヒーを運びました。でも、あなたの眼中には入ってませんでした。
ルードリッヒ　君はいくつなの？　勿論、知っているね。自分の年を？
ウエトレス　ええ、多分……親がズボラでなかったら……
ルードリッヒ　ぼくはね、最近まで、三十八だと思っていた。しかし、実際には、もう、四十を越えていたんだって―四十をだ……
ウエトレス　それがどうしまして？　重大なことでしょうか……
ルードリッヒ　アマンダは、二度目の結婚をするんだよ。彼の妻は七年前に死んだ。テレサは、二十五才だ…でも、もう二人のことはいい……許婚だと？　神様は、どの位の時間を、ぼくに分け与えて、下さったのだろうか？　ぼくは、誰かが、ぼくの時間を、盗んでる奴がいるような気がしてなら

ない。ぼくの、今、流している涙の人生ではない。幸せな、勿論、音楽など、くそくらえの、また、やっていたとしても、人生のたのしみにしかやっていない。健康な、もう一人のルードリッヒが……幸せなぼくの時間を使っている。そして金もうけにいそしんでいる。貴族の仲間と、たら腹くって……ぼくから、何もかも、横取りして……ぼくを見捨てて……

ウエトレス　（コーヒーを運んでくる）そんなこと、ありません。あなたを見捨てたりはしませんわ、どんなことがあっても……あなたは、偉大な音楽家……でも、私、あなたの曲きいたことありません！

ルードリッヒ、彼女を無視してコーヒーをのむ。

ルードリッヒ　神様は、ヤキモチヤキなのか？ぼくが、ほんの少し、幸せになりかけると、何時も取り上げてしまわれる。そんな神様にも、ぼくは、愛を捧げてきたというのに、ぼくは、……

カルル、戻ってくる。

カルル　よかった、まだいてくれたんだね、ルードリッヒ！

ルードリッヒ、そっぽを向く。

ウエトレス　本当に、あなたの音楽をきくことがで出きたら、どんなにいいことか……

カルル　君、きいたことないの？　ルードリッヒの音楽を！

ウエトレス　どこへ行けば、きくことが、出きますの？　私、公爵さまや、伯爵さまの、お邸へ出入り出きませんし、演奏会にも、いかれませんわ。私の身分では……

ルードリッヒ　ああ…　テレサ、君のやさしい瞳、温かい手。ぼくは、ずっと、君に愛を注いできた。あの笑顔……君だって、ぼくを愛していると、言ってくれたではないか。それなのに……

ウエトレス　何て、悲しい眼、何て、悲しい姿おかわいそうに……

でも、ルードリッヒ、こちらを向いて！私がいるというのに、心から、あなたをお慕いしている娘がいるというのに……あなたは、女の愛を呪ってしまわれている。

カルル　仕方ないでしょう。人間思うようには、いかないものです。大丈夫です。こう見えても、ルードリッヒには、強い意志があります。絶望の中から、作品を生み出す、すばらしい力があります。ぼくらは、それを信じて……彼はただの人間ではありませんから……　ルードリッヒ！　いいかい。未来の栄光は君のものだ。貴族がくずれさってしまっても、君は輝いているだろう。百年先、二百年先……地球がほろびぬ限り、君は不滅だ。人々は、君の名をよび、君を愛する人々で、一杯になるだろう。それを信じて、ついていくだけだ。

ルードリッヒ　百年後の愛や幸せが、何になるだろう？　ぼくがほしいのは、現在の幸せであり、愛の報いなのだ！

カルル　そんな俗っぽいこと、言ってくれるなよ。ぼくたち、金を使うより能のない貴族の奴らが吐くような埃にまみれた……

ルードリッヒ　カルル……お前なんか、消えてしまえ！

カルル　ルードリッヒ！

ルードリッヒ　そう。ぼくは、君がいなかったら、餓死してしまったかもしれない。それは感謝している。しかし、ぼくは、神じゃない！　俗っぽい人間で沢山だ！

ぼくは、君たち、貴族によって、作られた、土偶人形じゃない！

ルードリッヒ、立ち上がって出ていく。

カルル　ルードリッヒ！

後を追って、出て行く

ウエイトレス、ため息をつく。

ウエトレス　ルードリッヒ……ルードリッヒ…

ルードリッヒ

彼女の姿だけ残して、照明暗くなる。

みどり、舞台の袖に現れる。

みどり　あの姿が、二百年前の私なのだ。可哀そうに、愛をうけ入れる器を持たないとは、何と貧しいこと。こっちは、注ぎきれない程の愛をこの身にもっているというのに……

痛ましそうに、ウエトレスを見ている。

溶暗―

ピアノの音しばらくつづいて、きこえてくる。　溶明―

第三景

ルードリッヒ、ピアノに向かって作曲の構想を練っている。

所々に、紙片散らかり、衣類も脱ぎっぱなし、食器もバラバラ、要するに、乱雑極まりない有様。

ルードリッヒ、思うようにいかず、ペンを投げ捨て立ち上がって部屋の中を歩く。

ウエトレス、オズオズと、入ってくる。手にコーヒーの盆を持っている。

ウエトレス　コーヒーをお持ちいたしました。

（ピアノの脇の小卓におく）

ルードリッヒ……ルードリッヒ……。

あなたの音楽とあなたの名前を、ウイーンの人たちは、頭に刻みこんだようです。私も、とても、誇りに、思います。

ルードリッヒ　（振り返って）何か言いましたか？

首をかしげる。

ウエトレス　私、あなたの演奏会にいきました。とうとう、行けたのです。ウエリントンの勝利、いさましくて、素敵でした。それに、大砲の音、本物かと思ってしまいました。びっくりして……本物の戦争になったみたい。でも、本物は、もっと、こわいでしょうね。やっぱり戦争ですもの……でも勝利したところでしたから……よかったわ。

（言いながら、部屋の中を片ずける）

有名な作曲家の、私は知り合いの一人です。何て、すばらしいこと…ね……

ルードリッヒ、耳を気にして、いじったりしている。

ウエトレス　ルードリッヒ、何とかいって、まだ、私を無視なさるのですか？　そんな

に私がお邪魔なのですか？　とにかく、コーヒー、此処においておきます。さめない中に飲んで下さい。その気があったら……

ウエトレス、泣きながら、部屋を出る。

ルードリッヒ、首をかしげて、見送る。

ルードリッヒ　あの娘、なんのためにきたのだろう？　何を言ったんだろう？

コーヒーに気がつき。

ルードリッヒ　コーヒー有難う。

コーヒーカップを口元に運ぶ。

ウエトレス、そっと戻ってくる。

ルードリッヒ　何のために、生きながらえようというんだ。この胸の中に、頭の中に、耳の中に、巣くった病魔は、決して、出ていこうとしない！　深く、深く、居据って、とどめをさそうと、ねらっている。音のきこえない音楽家、それでもきこえる振りをして音楽を生み出さなければ、ぼくの存在はないし、生きていけないのだ。このことが、ぼくの全身を押しつぶそうとしている。音楽は、吾が血の中に、流れこんでしまっている。ハーモニーが、メロディが、体中をかけ廻り、勝手な音をたてている。それを、まとめるのが、ぼくの仕事なのだが、いま、ぼくの頭の中には、きこえない音、いまいましい音しか、湧いてこない！

ウエトレス　可哀想なルードリッヒ！

気配で、ルードリッヒ振り返る。

ルードリッヒ　カローネ。

ウエトレス　ルードリッヒ！

思わず、かけより、その肩を抱く。

ウエトレス　とうとう、私の名をよんでくれたのね。そう、カローネよ。私は、カローネ……

みどり、現れて、二人の様子にうなずく。

突然、ルードリッヒ立ち上る。

ルードリッヒ　何故、君がテレサではないのだ。

ウエトレス　（ぱっと、身をはなす）ルードリッヒ！

ウエトレス、身をひるがえしてかけ去る。

ぼうぜんと見送るルードリッヒ。

みどり　ああ…だめねえ……ルードリッヒ、本当に、あなたにふさわしい娘が傍にきたというのに……あなたは、それが見えないなんて……

みどり、彼の前に腰を下ろす。

第二部

第四景

考えこんでいるルードリッヒ、その傍に、彼の顔色をうかがっている、みどり……

みどり　あまり、深く、考えこまないで下さい。私もどうしていいか判らなくなります。そんな顔していると、あのいかつい肖像より、もっと悪い顔に見えます。機嫌を直して下さい。あなたは、元々、陽気な人だったじゃありませんか？　思い出して下さい。私なんか、経験したこともない——　私も、下半身動きません。今は、時間をとびこえて、私があなたに近ずいたのか、あなたが私に近ずいたのか、とにかく、こんな風になってしまって、私は、いま二十五才、何も成功していません。

ルードリッヒ！　あなたはどう？　二十五才の、その時、もう成功の祝杯を上げていたのではありませんか！　青春の輝きの中にいたじゃありませんか！

ルードリッヒ、立ち上がって、過去を思い出し、目を輝かす。

ルードリッヒ　青春の輝きか……ぼくが、ウイーンに出た時、ウイーンは、まさに都、ぼくは、ボンという小さな町から出てきたオズオズした田舎者だった。そのくせ、誇り高き田舎者……スープののみ方一つで、眉をしかめられた。にもかかわらず、誇り高きぼくは、自身満々、そして、ぼくは、まず成功した。

みどり　キース公、ルドルフ大公、きらきら輝くような優雅な貴夫人たち……　その中で、アイドルになった。あなたのピアノは評判をよび、あちこちのサロンからおよびがかかり、あなたは、こわいもののなしウイーンをのんでかかった。

ルードリッヒ　それは、一寸違う。誇り高くはあったが、ウイーンをのんでかかってはいない。本当のウイーンは、ぼくをうけ入れようとしなかった。いまだって、ぼくにとってウイーンはまァ、よそう、こうして、ぼくはいまだに、ウイーンにふみとどまっているのだから……

みどり　そう、うけいれられなかった。あなたが、自作のピアノトリオを発表した時、ハイドン先生はじめ、みなさん方大部分は、あなたの曲は、規則を無視している。素人の域を脱しない。でたらめ！だ。

ルードリッヒ　ぼくは、ウイーンの人々の賛成を期待していなかった。こういえば、万々才だが……

第一、ハイドン先生に合格点をつけられたのは、たった一曲、先生の作風を頭においてかいたものだ。その曲について言えば、ぼくとしては、平凡極まりなく、頭の中で不満ふつふつだった。ぼくの心の底から作るものは、こんなものじゃない。ぼくの本当の音は！　ウイーン風や、ハイドン風じゃない。ぼく、ルードリッヒ・フォン・ベートーベンの音なのだ。ぼくの音楽なのだ！

みどり　どうして、そう、自身満々なの。ウイーンの人が、あなたを受け入れると、どうして確信が持てたの？

新しいものには、異質なものには、人々は、臆病なもの…　誰がパンドラの箱をあけたがるの？

ルードリッヒ　ぼくは、自分を信じたと同時に、人々も信じた。人間はバカじゃない。ぼくの新しい音楽が、人々の心に届かない筈がない！

みどり　そう、あなたは、人々を信じた。どんな人々を……貴族ですか…　一般の庶民？

ルードリッヒ　ショミン？

みどり　おわかりにならない……まァいいわ。

とにかく、あなたは、若くして、ウイーンの花形になった。順風満帆のルードリッヒ！

そして、彼は、人間を信じ、恋をした。い

くつも、いくつも恋をした。人間を信じていたから……どこまでも信じていたから……

ルードリッヒ　（みどりをさえぎる）やめてくれ。からかうのは、やめてくれ……

みどり　えっ！

ルードリッヒ　女性とは、どうしてこう、残酷なのだろう！

ぼくが恋をする。その恋は拒絶される。その度に、ぼくは絶望して、世界一不幸な男になる。そして、作曲する。ぼくが作曲するのは……絶望への叫び声、死に損なって、生へ、しがみつくための綱をあんでいるようなものだ。

この世界一の不幸を、きり抜けるための手段なのだ。

その手段によって、ぼくは評価されたり、けなされたり……しかし、どういわれようと、やめるわけにはいかなくなった。作曲は、もはや、ぼくの呼吸なのだから。

みどり　気丈な人だわ。あなたは……その上……ああ、いってもいいかしら……

ルードリッヒ　何を？

みどり　あなたは、まだ、心から、認めようとしないこと……　あなたは、出きたら、否定しおおせたい事、でも駄目です。誰でも、知ってしまっているんですから？

ルードリッヒ　誰でも？　誰でもだって……

みどり　いまは、まだ…　きこえてるらしいけど……でも時々……本当は、あなたの耳は、もう……

ルードリッヒ　いうなもう……

みどり　自分で認めなくてはいけません。きこえる振りをしていてもだめです。ルードリッヒ！　認めるのです。そこから、新しい哲学を持つことが出きるでしょう。あなたがこれまでしてきた、英雄崇拝でなく、弱い人間にも、涙をそそぐことがうれしくなるでしょう。世界は、ナポレオンや、コリオランで廻っているわけではありません。

ルードリッヒ　うれしそうに話すのはやめて下さい。

みどり　ごめんなさい。でも、私、判るんです。あなたの悩みや、切ない思いが、それを知ってほしかったのです。

ルードリッヒ　判るもんか、あなたなんかに判る筈はない。

みどり　どうして、そう、断定できるのですか？　あなた丈は、特別な人種とでも、おっしゃるのですか？

ルードリッヒ、みどりの気配におされて、どうしたらいいか、とまどっている。

みどり　（ため息をつきながら）私、本当はあなたを、もっと、英雄にしなければいけませんでしょうね。でも、あなたの絶望は、ぜいたくな絶望だと思うの。あなたは、一度は栄光を手にした。いえ、一度ならず、あなたは、地球は自分のために廻っているという思いをした。この私ときたら……いつも、絶望ばかり、絶望以外、この世界にあるなんて……でも、そんな絶望の中にいると、絶望的状態が日常になって……死にたくなるのは、絶望に退屈してしまうの……最悪です。

ルードリッヒ、彼女の言うことが、きこえないので、彼女に構わず、音楽を口ずさむ。

頭の中に、音楽があふれてくる。そして、急にピアノに向かう。

みどり　ルードリッヒ！　私なら、そうなんだわ。ルードリッヒ、あなたの不幸は本当

の女性の愛と姿を、理解できないでいることじゃないかしら！

外形が美しい人が、必ずしも女神とは限らないということを、あなたに悟らせたい！

あなたに、真の愛情を寄せる貴族の令嬢など、めったにいなかったのです。あなたは、貴族ではないし、外形もスマートではないようです。判りますか、私のいうこと……私だって、真心はあったのに……心から、愛していたのに……

男性は、私に何を要求してたのでしょう。私は、何に応えればよかったのかしら？

（ふと吾に返って）まァ…私…いま、自分の中にこもってしまってはいけないんだわ。

ルードリッヒを追っていかなくては……彼を行方不明……立往生させては……

私も、つとめを果たさなければ……私の生き方をきめるんだわ。

（態度を改めて）

ルードリッヒ、あなたは、強者だわ。あなたのずば抜けた音楽の才能……それ丈でも、あなたは世界の強者たり得るの。

あなたのまわりには、あなたを尊敬し、憧れる友人がいる。おいしくコーヒーを入れてくれる。ロマンスを囁かれる貴婦人の出入り、あなたは、その貴婦人たちを弟子に持つ……その上、あなたの周りには、あなたのパンを焼き、あなたの暖炉をもやし、あなたのベッドに清潔なシーツを敷く……そんな婦人に、どの位目をとめました？

あなたは、そういう女性には、目もくれない！

弱者に対して思いやりのない人、無名の街の人たちの誠実さが判らない！　それがあなた！ルードリッヒだったとは……　私は、そう思いたくない。おもいたくないのよ。しかし、このままでは……弱者に対する思いやりがたりない。それが、あなたの人生を、不幸にしているのではなくて？……ねぇ

ルードリッヒ！

ルードリッヒ、何やらテーマ曲を弾いている。

みどり　一度位、こちらを振り返って……あなたのまわりで、働いている人たちに目を向けて……

美しいメンディを奏でるルードリッヒ

…（例えば、大公トリオの一節）

みどり　それにしては、何と感動的な音楽を作ったことでしょう。後の世の人々が、あなたを呼ぶのに、苦悩の楽聖とよんでいる。でも、平凡な人々の方が、心やさしいという……皮肉な事だわ。

突然、ぱんと、キイをたたき、みどりの方へ向き直る。

ルードリッヒ　もういい、もういいよ、判ったよ。顔や姿がきれいなら、誰でも女性は天使に見えるだって……ぼくには、見さかいがないって……判ってくれ。ぼくだって、こっけいな恋をしていることを……それが、その上ない苦い味だってことを……

君が言う程、ぼくは強者でもなければ、勝利者でもない。でも、ヴォルガングが、ミューズの神によって、あたえられた天才なら！　ぼくは、恋によって、作られた音楽家だと、思うことにしてたんだが……今日までは……しかし、それは、正しくなかった。恋が、ぼくの手に入らなくとも、音楽は作らなければならない。それが、音を失ったぼくの、死の誘惑から、生を守る最後の砦だと気がついた。その砦の中で、ぼく

は闘っているのだ。時々、挑戦してくる死神と、世間の非情と…　そう、一時、ぼくは、名声によった。

みどり、うなずく。

ルードリッヒ　そこで、ぼくは、もっとも警戒しなければならなかったのに……ウイーンのワナを……

みどり　ワナ？

ルードリッヒ　ぼくの名声が絶頂に達した頃、ぼくは、芸術を生み出していない。ぼくの中で、一番、かすの部分、排泄物を流している丈だった。それなのに、人々は、ぼくの排泄物にとびついた。

ウイーンにおける、大衆もまきこんだヒットだという。

ウエリントンの勝利だって……ナポレオンを倒したことが、何だっていうんだ。そのあとで、ぼくの排泄物をもてはやす、人々の排泄物でウイーン中が、浸されている。人々は、その中で、よっぱらい、あれ程固執していた芸術を追放しようとしている。人々の気紛れ、ぼくがもっとも怖れるのは、その気紛れのワナだ。社会のワナにはまることは、なお怖ろしい。ぼくは、いま、自分で自分をまもらなければ、どこへも出かけられない。この砦を、一歩も出ることが出きない。本当は、ぼく、もろい人間だから。

みどり、身動きせず、彼を見つめる。

ルードリッヒ　あなたに、何をいいました。ぼくに……

ぼくは、あなたが、ぼくに問いかけたことと、違うことを、しゃべってたかもしれない。許して下さい。ぼくには世間が、きこえない。本当のことは、何にも、きくことが出きない。こんな不安な気持、あなたに判りますか？　何て、弱音を吐いてるんだぼくは……ここは、どこ？　ぼくは、自分の家にいる？　だから、自分をさらけ出している。

みどり　あなたも弱者なのね、本当は……そうよ、あなたも、身体障害者、聴覚障害者だった―本当は……だから、私たち、理解し合える同じ一線にたっているわけなのね？

ルードリッヒ、何かをいおうと、首をかしげて、みどりをみる。

みどり、ありあわせの紙にかく。

みどり　あなたも、私同様、身障者なのです。

その紙を、ルードリッヒに渡す。ルードリッヒ、それを読み、一寸顔をゆがめ、破ってしまう。

みどり　そうでしたね、あなたは偉大な芸術家です。私と同じ意識の連帯感など、持ってやしない。判ってましたのに……　つい、心易くして、ごめんなさい。でも…もし、私に、あなたの十分の一の才能でもあったらね、教えて下さい。どうしたら、人々に感動をあたえられるか、生きていく甲斐が出きるか……

ルードリッヒ、じっと、彼女を見つめる。

みどり、次第に涙ぐんでしまう。

みどり　辛いわ、とても辛いんです。本当は私、耳のきこえないあなただから、言いたいことを言っているのです。若しあなたが、

耳の障害がなかったら、あなたの前で、口をきけません。私、自分以外の人と口をきくことに、とても臆病です。でも、今、耳のきこえないあなたの前で、のびのびしています。とても、卑怯だと思います。自分でも、いやになってしまいます。いじけた自分の心に……他人の欠点を見て、自分をなぐさめてしまう。あなたを好きだといった理由もそこにあるのかも…　何ていじましいの……

ルードリッヒ　何が悲しいのですか？

みどりの傍へよってきて、彼女の肩を抱く。

私のために泣いて下さるんですか？

みどり　ええ？……ええ……

うなずいてみせる。

ルードリッヒ　ああ、何という…やさしさ。気高さ。心の友　ぼくの愛……

みどり　ルードリッヒ！

ルードリッヒ　あなたが、絶望した人間だということは、ぼくにも判ります。ぼくも永いこと、涙を流してきました。本当に、親しい……一番親しい心の友、それは、あなただったのです。あなただったのですよ。……でも、本当は、それでは困るのです。

みどり　（はなれて、絶望的に）ルードリッヒ。

ルードリッヒ　ぼくは、自分の目の前に、絶望を見るのはたまりません。本当は、ぼくそのものが、絶望しきっているのです。たすけて！　と、心の奥深く、叫んでいます。すがりつきたいのです。ぼくは今、ぼくの傍へきたら、何にでも、すがりつきたいのです。だから、あなたが、ぼくの前で、絶望しきっては困ります。たすけあわなければ……勇気を出しましょう。共に一、二、三で、立ち上がりましょう。

みどり　私にも音楽を下さい。私にも曲を下さい。私が希望を持って立ち上がれるような曲を、私にも下さい。あなたには、それが出きる。音のきこえない音楽の中でしか、生きていかれない、そんなあなたの希望の曲、私にも下さい。お金は、貴族の方々のように、高く、お支払いできないのが残念です。だめでしょうか……でも、出き得るぎり……私に、希望を見い出せる曲さえあれば……

ルードリッヒ、彼女の希望が判ったように、そして、突然ひらめいたように、ピアノを弾く。

この曲は例えば、シンホニー第九の一節がいい……

みどり、こうこつと、その音楽にききいる。

その音色に引きよせられるように、ルードリッヒの友人、カルルと、アマンダ現れる。

二人顔を見合わせる。　溶暗

明るくなる

第五景

喫茶店の雰囲気。

ウエトレス、やってくる。テーブルに…

カルルとアマンダ、腰をかけている。

ウエトレス、行きすぎようとする。

カルル　ああ、君、コーヒーを頼むよ。

ウエトレス　残念ながら、私……
カルル　どうかしたの、ひどくあらたまって
る、おかしいよ君。
ウエトレス　お持ちすること出きません。私
には……
アマンダ　何故？
カルル　どうしてかね？
ウエトレス　首になりました。
カルル　いつ？
ウエトレス　いま、たった今です。
アマンダ　どんな不都合、仕出かしたのかね。
ウエトレス　それが……こぼしました。
アマンダ　こぼした？
カルル　コーヒーをかね？
ウエトレス　はい。
カルル　拭いたらいいじゃないか！
ウエトレス　勿論、拭きました。
カルル　いいじゃないか、それで……あるじ
をよびなさい。すぐ取消させるから……
ウエトレス　いえ、とても怒ってて、だめで
す。
カルル　何て、度量の狭い奴だ。たかが、コー
ヒー位で……
ウエトレス　でも、おちないんです。
カルル　洗えばいいじゃないか……全く…
よし、洗濯代たて替えてやろう。それで、
問題解決だ……
ウエトレス　お金持ちはいいですね。何でも
お金でかたがつくのですから……天才のそ
の才能まで、買い取ることが出きるのです
から……自分の無能のかざりになさるため…
アマンダ　何、たわ言をいっているの君は。
いいかね、カルルは、いやこのぼくだって、
君の味方をしようってのに……本当は君、
店をやめたくないんだろう。やめたら、困
るのではないの？
ウエトレス　そりゃ…　おっしゃる通り……
でも、たべる丈なら…　誇りさえ捨てれば、
何をやっても生きていける世の中ですから、
有難いことに……
カルル　一体どこへこぼしたのかね。どのク
ロスも、きれいじゃないか。しみどころか
……真っ白だ……
ウエトレス　ドレスです。
カルル　ドレス？　誰の……おかみさんがド
レスをきて、どこかへお出ましかね。
ウエトレス　いいえ、おかみさんは、ドレス
など、ご大層なもの、着ることありません。
さっき、入口のところで、お会いになりま
せんでしたか？　何とか伯爵夫人、何とや
ら男爵夫人とか……その中の白いドレスで
す。
カルル　やれやれ……どうおもうかね、アマ
ンダ？
アマンダ　ああ見えても、金持ちはけちだか
らな。それに情け心を持ちあわせてない。
ドレスは、他人の生命より大事なシンボル
だと思っている連中だ。
カルル　しかし、あやまちは誰にでもある。
うちの使用人たちには、こんなことで首に
したりしやしないよ。
アマンダ　一々首にしてたら、働き手がいな
くなってしまうよ。それが判らないのかな、
ここのあるじは。
ウエトレス　働く人間が余計にあやまちを犯
すのです。そして、何も手を汚さない人間
が、それを許すなどという、とても口惜し
いことです。許していただかなくとも結構
です。
カルル　耳がいたいね。将来は、君のような
たくましい人間たちが生き残る世の中にな
るだろう。ぼくたちは消えていくのみ、手
をこまぬいて……
ウエトレス　私、あやまちなんかでありませ
ん。わざとやったのです。わざと……

カルル　おやおや……（ため息をつく）
アマンダ　わざとやったとなると……（ぐる
りと一回転して）どうして、わざとやった
りした。
カルル　しかし、君の心情も察してやらなけ
れば……君も若い娘なんだもんね。あの着
飾ったご婦人たちを見れば、なんだ、その
気になっても無理もないな、ね。
ウエトレス　違うんです。そりゃ口惜しくお
もうこともあります。私が孤児でなく、伯
爵家か男爵家の生れだったら……戦争で父
が一兵卒で、死ななかったら、母も若死す
ることなく、私も幸せな娘だったかもね、
みんな私のせいじゃないんです。生れた環
境について、生れたばかりの赤ん坊は、責
任とること出きませんもの……もし、ナポ
レオンとか、何とか、えらい人たちの野望
がなかったら、少なくとも、私のような淋
しい娘は少なくてすんだものを…
アマンダ　そりゃ、君の生れについちゃ　誰
も何もとがめたりしてないよ。しかし、ひ
がみぽいのも、人生をよくする助けになる
とも思えないな。
ウエトレス　責任のない悪口で、傷つけられ
ても、じっとたえていた方がよかったのか
しら。
カルル　悪口にもよるがね……
ウエトレス　ルードリッヒへの悪口に私、耐
えていることが出きませんでした。私自分
のことなら、耐えること出きます。自分よ
り大切なものを悪く、けなされて。
アマンダ　ルードリッヒの悪口なら、ありき
たりのウイーン人なら、よくいってるさ。
あいつをよくいう人間など、余程のお人好
か、世間知らずだね。
ウエトレス　あなた迄そんな……あなたまで、
ルードリッヒは時代おくれの鈍牛だとでも
いうの！
カルル　おいおい……ルードリッヒが、どん
牛だって？
ウエトレス　今、ウイーンに必要なのは、ロッ
シーニの音楽のように、軽快で、心を浮き
たたせるものだって、この平和な社会、戦
争のおびえの消えて、何でも豊かにもどっ
てきた人の心をみたすのは、深く考えるこ
とじゃなく、軽快で幸せな思いだって……
ルードリッヒの音楽は、深く、重々しくて、
もう逃げ出したい。全くどん牛のようだっ
て。
カルル　それで、コーヒーを。
ウエトレス　私の指をみて、太いたくましい
ゆびですこと、ピアノには、似合わないっ
て、うちにピアノがあったら、私だって、
弾けるわ……そして、私は怒って……首に
なりました。
とりなして、いただかなくて、結構です。
いま、旦那様がコーヒーを持ってきます。
カルル　残念だね。折角おなじみになったの
に……
ウエトレス　本当に、ルードリッヒにコーヒー
を入れてやれなくなって、残念です。残念
ですわ……（涙ぐんで、立ち去る）

間

アマンダ　確かに、ロッシーニの音楽にひか
れるものはあるからね。あの軽快さは、戦
争から平和をとりもどしたものにはうって
つけのものがある。世の中に波だちきらう
ものは一事を起したりしたくなかったら、
あたりさわりない、苦労しなくても幸福気
分になれる方をえらぶものだろう。今のル
ードリッヒには、そういう軽快さは向かな
いだろう。
カルル　アマンダ、彼の前では、決していっ

てくれるなよ。それでなくても、きいてるだろ、その頃あいつ……

アマンダ　妙な女性がついているという噂。

カルル　あの、カローネではないか。

アマンダ　いや、残念ながら、彼女ではないらしい。このウイーンの住人ではない。我々、今日まで、会ったことない種類の女性だという。

カルル　会ったことのない女性ね……一体、何者？　だまされてやしないかな、彼は、その方にかけては、女だと見ると何だ…

アマンダ　手が早いというものじゃないし、彼は、子供みたいなものだし…　とにかく、こもりきりだという。二人で……

カルル　とにかく、どんな女性か確かめなくては……彼のためにならない女だったら断然追放しなくては……（時計をみて）しかし、おそいなァ。

アマンダ　ええ……

カルル　よんであるんだがね……

アマンダ　彼を？

カルル　使いをやった。たまには、自分で、顔をみせて、親友に対する義務を果たせと…

アマンダ　もう、親友と思っていやしないかもね……そうか、ぼくはついでだったという訳か……

ルードリッヒ、舞台の端に現れる。

カルル　あっようやく……見たまえ、あの髪の振り乱しよう、傍若無人の歩き方、もう少し、服装に気をつけてくれないかなァ。だから、ご婦人方にきらわれる。

アマンダ　そういったらどうだ。シャツでもくれて。

カルル　勿論、シャツに糊をつけて、くれてやる位、何でもない。しかし……

ルードリッヒ、二人の前を通りすぎてしまう。彼らには全く無関心のように。

カルル　あっルードリッヒ、ルードリッヒ。

ルードリッヒの後を追っていく。

アマンダため息をつき、二人の後を見送る。

カルル、ルードリッヒを連れて、戻ってくる。

カルル　アマンダ、おかしな事を言い出したぞ、ルードリッヒが。

アマンダ　おかしなことをいうのは、今に始まったことではないが、一体どうしたというんだ。

カルル　まァ、坐りたまえ！

ルードリッヒ坐る。

アマンダ　カルル、さア、話してくれ。ぼくは、もう胸がドキドキしてきた、よくない話になる前兆のようだ。

カルル　そう、い話ではないようだ。ルードリッヒが町を出たいと言っている。

アマンダ　旅行かい？　ルードリッヒ！

カルル　旅行？　そう、永久に、戻ってこない旅だ。

アマンダ　どうして、急に、町をでたくなったというのか。この町を出てどこへいこうというんだ。

ルードリッヒ　（あたりを見回して）ああ、いやだ、いやだ。

いつの間にか、彼の傍で、ダンスをする男女。

時々、よっぱらった声、等……乞食、

もの乞いに登場

アマンダとカルル、顔をしかめながら、小銭をあたえる。

乞食共、何度も何度も頭を下げて立ち去る。

ルードリッヒ　知ってるかい。あの乞食たち、物乞いのくせに、ぼくより金持ちなんだぜ。実際……くさりきった町だ。快楽だけが、まるで善行の模範のようにはびこっている。音楽がない。心より奔ぼしる音楽がない！

遠くで、男女の小唄のざれ唄のようなものがきこえる。その中にロッシーニの「セビリヤの理髪師」のオーバチャがはじまる。

そのくせ、至るところ、音楽があふれている。丸で、男にこびる商売女のような、うつろな音だ。動物の部分丈をくすぐる音だ。しかし、これが、嬉々としている町の音楽だ。あの偉大な、ヴォルフガングの音楽はどこへ消えてしまったのか。今少し前までは、天才の慈雨の如き音楽に、その心を浸しておきながら、そのおかえしときたら、忘却というひどい仕打ちだけだ。死んだ事さえ忘れている。

アマンダ　ルードリッヒ、ぼくたちは、君を忘れたりはしないよ。決して、決して……

ルードリッヒ　こんな町に、二十年以上も住みながら、ようやく今、それを悟るなんて、ぼくも相当おめでたい人間だったな。君たちだって、そう見抜いていただろう？

カルル　ぼくが見抜いていたのは、君の天才だよ。これまでの概念を次々に打ちやぶっていく、君の才能と勇気だ。

ルードリッヒ　君はよく怒ったね。自尊心を傷つけられたといって……君は、ぼくの音楽の下僕だといいながら、結構、ぼくに、かんしゃくを起してくれた。

カルル　何をいうか？　こちらだって、耐え難きを耐え忍び難きを忍んできたのは何のためだと思う？　ええ……

ルードリッヒ　怒ってしまったのか本気でカルル。ぼくは、君に悪意を持ったことは、一度もない。君たちには感謝している。どんな時でも、ぼくは感謝している。

アマンダ　それを、君は…　忘恩の徒になろうとしている。恩をきせる気はないがね。

カルル　ぼくたちばかりじゃないと思うが……ルドルフ大公も、ロブロビッチ公爵も、ナポレオンが撤退してから、ウイーンは、にぎやかに活気をとり戻した。君の存在は……このウイーンは、まだまだ君を必要としている。もっと、もっと落ちついてくれば、再び君の時代が、君は、それを信じているのではなかったのか？

ルードリッヒ　……

カルル　旅に出る。それなら、止めやしない。君が、新しい曲を生み出すためには新しい息吹きが必要だ。だから、旅行してくることはいいことだ。しかし、その町がいやになってにげ出すのは、君のやることじゃない。君に相応しくない。

ルードリッヒ　いつだって、相応しくないんだぼくは、だから、どう思われようと、仕方がない。

カルル　全く、君らしくない。そんななげやりな言い方、ぼくたちの間に横たわっていた友情という河は枯れてしまったとでもいうのか！

ルードリッヒ　君に怒られるのは……

カルル　何でもないか……いつもそういって笑ったな。

ルードリッヒ　違う！　かって、ぼくが友人

と称していた公爵や大公といわれるおれきれきも、君たちの友情には敵わない。君たちだって、貴族の一人だが……こんなぼくをよく扶けてくれた。ぼくは、金銭的にルーズな奴だと、自覚しているが、時々は、どうでもよくなってしまう。そのため、ぼくの生活は、めちゃめちゃになる。そんなぼくの生活を、救ってくれたのも君たちだ。

アマンダ　特にカルルだ。ぼくはいささか……

ルードリッヒ　あの事なら、もう、何とも思っていない。テレサは君を愛してしまった。仕方のないことだ。君たち二人がいなかったら、ぼくはすでにこの世から消えてしまっていただろうから……

アマンダ　ふざけたこといってくれるなよ。

ルードリッヒの弱気、君は、今度は、何がほしくなったの？　もう音楽の下僕を使う気はなくなったというのか？

カルル　君の本音は……もう、ぼくからなはれたくて仕様のないというのか！　もう。

アマンダ　怒るぞ、本気で、勝手にウイーンをさられて、たまるもんか。ぼくたちの財産である君を、手ばなしてなるものか！

カルル　アマンダ、酔っぱらったってわけじゃないんだろうな、その言い方。

アマンダ　ガブガブのコーヒーで、酔ってみたいね。

ルードリッヒ　とにかく、君たちには、感謝の言葉もない。

アマンダ　感謝の気持や言葉などいらない。君の音楽がほしいのだ。君が今、なりをひそめている音楽をかきならしてほしいのだ。

カルル　そうだ、その通り、君なら出きる筈だ。今まで、どんな最悪な状態の中でも、それをてこにして作品を生み出してきた。君は、ぼくたちの司令官だ、若い頃のように、堂々と、部下を指揮したまえ！

ルードリッヒ　ぼくは、君たちの友情に感謝しながらも、その温床から出してほしいと願っているということを……

カルル　ルードリッヒ！

アマンダ　訣別しようというのか、われわれと、どうしても……

間

みどり、いつのまにか舞台の隅に立っている。

ルードリッヒ彼女を見て、ほおえむ。

ルードリッヒ　ぼくは、これまで、我々の先輩のように、皇帝や教会や貴族に庇護されず、独立した音楽家だと自負していた。しかし、ぼくが作った音楽は大抵、公爵や、伯爵や大公、ご令嬢の依頼で、そういう人々を頭の中で一杯にしながら、作曲してきた。その貴族の向う側に、もっと、大勢の人々のいることを、ぼくは眼の前にしながら、見ていなかった。

アマンダ　カルル、判るかい？　彼が何を言おうとしているのか？

ルードリッヒ　町には、君たち階級以外の人間が大勢いるんだ。その大ぜいの人々が、音楽が好きでないと思えんのだ。貴族以外にも、ぼくの音楽を好きだと、教えてくれたものもいる。

カルル　カローネのことだね、彼女は、君が好きなのだ、そうきいたことがある。君に対する愛情に、君だって、気ずいているのろう。

ルードリッヒ　あの子と、結婚しろとすすめのか？　君たち……

カルル　反対はしない。

アマンダ　反対はしない！

ルードリッヒ　そう、あの娘はいい子だ。あ

の子と、結婚することで、ぼくは幸せを得ると思えるが……しかし、ぼくは、あの子を幸せには、出きない！　勿論カローネはいい。ぼくの作る音楽を、カローネに捧げたい。しかし、ぼくはもっと、ぼくに相応しい相手を、紹介しよう。

みどりを、手招く。

みどり、ルードリッヒの側に立つ。

ルードリッヒ　君たちに、紹介しよう。ぼくの側にたっている。

カルルとアマンダには見えない。二人、いぶかしげに、ルードリッヒを見て、首を振る。

カルル　ルードリッヒ！

アマンダ　どこにいるんだ！　ぼくの側にといわれても、誰もいないじゃないか！

ルードリッヒ　見えない！　そう…君たちには、見えない。十九世紀のいましか、君たちにはない……しかし、ぼくには、見えるのです。ずっと未来の人……

みどりを指し。

ルードリッヒ　とにかく、ぼくにヒントをくれたのは、ずっと、未来に生きている女性でした。しかも、ぼくを…熱烈に彼女の愛は……ぼくの胸にとどいたのです。その愛は、とてもぼくの心を揺すりました。感動しました。そこで知ったのです。これまでと違う女性が世の中にはいるのです。その彼女のために、ぼくは作曲するのです。今までのルードリッヒは、もう、ウイーンには、いなくなるのです。どんな献辞がつけられていようが、これから、ぼくの作る曲は、今より未来に続く……あの彼女のために、作曲されたもの……ぼくの曲は、未来のもの……

みどり　ルードリッヒ！　あなたは、とうとう私のものになったのね。私の方を振り向いてくれたのね。

感極まって、倒れる。ルードリッヒ、それを支える。

ルードリッヒ　みどりさん……みどりさん。

カルルとアマンダ、ルードリッヒの心をはかりかね、おかしくなったのではと、心配して、ルードリッヒによびかける。

アマンダ（ともに）　ルードリッヒ、ルードリッヒ！

カルル　溶暗

同時に、シンホニー第九の第四楽章わき起る。

溶明

エピローグ。

額に納まっているルードリッヒ。

男、机の前で、こうこつとしている。

みどりを揺さぶる。

男　みどりさん！

部屋の中全く明るくなる。

男　とうとう夜が明けましたね。

みどり　もう、そんな……

男　ルードリッヒはあなたの手に戻りました か！

みどり　ええ、彼は永遠なり……そうなれたけど……この私は……

男　あなたも、生きるのです。あなたはルードリッヒの音楽に感動させられ、生きる希望を持てるのだというその証拠をお見せなさい。あなたは、生きることによって、ルードリッヒの永遠性を証明するのです。それ丈の生甲斐はあると思います。ホラ、日が昇りました。

窓をあける。日の光が、さっとさしこむ。

男　あなたは、もう、死の誘惑を遠去けることが出きましたね、私の役目も無事終りそうです。

（そろそろ、退場しようとする）

みどり　あっ待って！

電話のベル。

みどり、受話器をとる。

みどり　もしもし、あっお姉さん……ええ、元気よ……

（その間に男退場。）

お姉さんでしょう？　何をって、私のところへ、見張り番をつけて……知らない？　全ぜん……じゃ……誰なの、あれは……

受話器をおく。

みどり　お姉さんの恋人も当直だったんですって！　じゃ、あの人は誰なの？

幕

〈作者住所〉
271　松戸市野菊野一－一二一三
ＴＥＬ　〇四七三－六四－五五三二

六七号後記

◇どうしてなのかよくわかりませんが、こんどの号は大分落ちつきを欠いているようです。あてにしていた原稿が向う様から外されたかと思うと、全く予定もしていなかったものをいただくことになったりして、毎日が気もソゾロでした。

原稿締切日というのにも解釈はいろいろあるようです。締切日というものを、三日や四日過ぎてもまだ大丈夫だろうと目安にするのと、もう過ぎたのだから書くこともないだろうと開きなおるのと。締切日はそちらの勝手でこちらは書ける気分と書ける状況でしか書けないという全くの無視は論外ですが。それらに対応できる準備（幾様もの編集プラン）があれば動ずることもないのですが、こんどばかりは翻弄されました。正直、疲れたと申し上げます。

◇そういう不揃いな顔かたちでも生れてみれば可愛いもので、まァ何とかなったという気にもなるからふしぎですが、本号でいえば天恵ともいえる北川鉄夫先生のお話の原稿で助けられたかと思うと、折角好調に辷り出したかに見えた「ブロックの頁」が奥羽で頓挫しました。（これは一方的な言い方ですが―）。劇評も二つ、三つ消えました。編集体制の不備を痛感した次第です。

◇土屋清さんの急逝（11月8日）は痛恨の極みです。何回か、役員会議でお会いするといった機会しかありませんでしたが、ぼくの中には、「河」の作者として未だにその実在感は消えていません。「河」が小野宮吉戯曲平和賞になったとき、受賞式には行かれないがどうしたものだろうとわざわざ相談されたときの電話の声が、今でも甦ります。来春発行の六八号には土屋さんの追悼特集を組みたいと思っていますので、劇団月曜会をはじめ、西会議の皆さん、よろしくおねがい致します。

◇戯曲「ルードリッヒはるかなる恋人へ」の中村おがわさんは、かつて「車椅子の王女とその騎士」（別冊3号）、「ともだち」（33号）で読者におなじみの作者ですが、この新作でも中村さんにしか描けない心やさしさが従来にもましてあふれていると思います。会員ではありませんがもっとも近しい作者のお一人です。

◇「テアトロ」の編集責任者野村喬さんがこの十二月号を最後に辞任されました。お別れの挨拶の中に、二十三年七カ月はいくら何でも長過ぎて、私の能力の限界を感じたからと言われています。この言葉はぼくを搏ちます。野村さんのあとは利光哲夫さんが継がれるとありました。

（もも）

演劇会議　六七号
一九八七年十二月一〇日発行
定価　五〇〇円（送料二〇〇円）
編集委員　萩坂桃彦・こばやしひろし
丸子礼二・仲　武司・藤沢　薫
森本景文・栗原　省
発行所　演劇会議発行所
〒　川崎市川崎区渡田四－一一－三
はぎ書房内
電話　〇四四（三三三）〇七七五
誌代振込は
川崎信用金庫小田支店一三三五二七
又は郵便振替　横浜〇・一七二二七